
君色ブレンド

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君色ブレンド

【Zコード】

Z2584W

【作者名】

滝沢美月

【あらすじ】

男子が苦手なれいは大学一年。友達の七海に誘われて行ったカフェバー「ブルーベル」はイケメン店員ばかりの喫茶店。コーヒー好きでいきつけるけど、れいは同じサークルの秀先輩に片思い中でイケメンには興味がない。それなのに、ちよつかいを出してくる奏の真意が分からなくて

あれは高校一年の春

高校生になつて一週間くらい経つた頃だつた。

下校時間過ぎ校内を歩いている人はまばらで、校舎から校門に続く桜並木をゆっくりと歩いて行く。並木道の隣の運動場からは部活をやつていてる生徒の声が聞こえてくる。

青い空に雪のように白く映え、うつすらと紅に染まつた桜の花びらが、風に乗つてぐるぐる舞い落ちてくる様子があまりにも綺麗で、空ばかりを見上げて歩いていた。

だから後ろから声をかけられて、最初は自分を呼ばれているんだと思わなかつた。

「羽鳥さん つ！」

振り向くとすぐ目の前、息が触れそうな距離に男の子が立つていた。身長は私とさほど変わらない、黒く量のある髪は少しうつとうしそうに目にかかり、眼鏡の奥の瞳は見えない。

えつと確か、彼は同じクラスの そう考えたのは振り向いてからほんの一秒钟くらいの間で。

振り向きながら、彼と私の唇が触れる。

「！」

私は驚いて、ぱつと体を後ろにそらして彼との距離を開ける。

振り向いた時、あまりに彼が近くにいて触れてしまつただけかとも思つたけど、彼が私との距離を一步ずつ詰めてくるから、彼が纏う雰囲気から、事故じやなくて故意にキスしたんだと伝わってきて、背中がひやりとする。

「羽鳥さん、好きです」

そう言われた瞬間 私は彼に背を向けて走り出していた。

私のファーストキスが……！

振り向きざまにキスされてしまったことがあまりにもショックで、それ以外なにも考えられなくて、夢中で駅まで走つて家に帰つた。だから今では、彼の名前は思い出せないし、顔すらおぼろげにしか思い出せない

昔の嫌な記憶を思い出したのは、気分が沈んでいるからかもしれない。

サークルで資料として一冊三万七千円する本を買つことになつて発注を頼まれたんだけど、一冊買つはづが十冊注文してしまい先輩にはそこまで言わなくともつてくらい怒鳴られまくり、気持ちはへこへこに沈んでいた。業者さんに頭を下げてどうにか返品してもらうことが出来たけど、さすがに今日は飲まずにはいられなかつた。

いきつけのカフェバー『ブルーベル』でビールを頼んで次から次へと喉に流しこんでいく。

大酒のみの父親の遺伝なのか、お酒には強くていくら飲んでも顔が赤くなつたりはしない。女の子なのにお酒が強いなんて可愛げがないかもしれないけど、飲めても私はあまりお酒が好きではない。このカフェバーに来てもいつもは というか今まで、コーヒーしか頼んだ事がなかつた。

だけど今日は飲まずにはいられなくて、やつていられない気持ち

を誤魔化すように瓶が空になれば追加を頼み、すでに机の上には空き瓶が何本も溜まっている。

いつもみたいに親友の七海が一緒にいれば「飲みすぎだよ」って止めてくれたかもしけないが、残念ながら七海は今日はバイトで一緒にいない。

ぼおーっと見つめる視線の先、店内はぼやけてよく見えない。そんなに飲んだつもりはないのに頬が火照って、思考が鈍くなる。空になつたグラスを机に置き、くにやりと力の入らなくなつた体を机の上に乗せて頬杖をつく。

お酒に強いっていつも、普段飲まなかつたら弱くなるものかしら

それとも、気持ちが弱つているから、こんなに泣きたい気分になるのだろうか

田の前のぼやけた視界に人影が近づき、何か話しかけられる。

「 」

なんと言つたかは聞こえないけど、知つてゐる声に、私はふわっと微笑む。

「秀先輩……」

サークルの三年生、犬飼^{いぬかい}秀先輩。すらりと長身で、ノンフレームの眼鏡の奥に見えるのは優しいこげ茶色の瞳。田に透ける細くて柔らかい髪は癖があつて、瞳と同じこげ茶色。

私のミスに激怒する三年生の中で、唯一私を庇つてくれたのが秀先輩だった。

「迎えに来てくれたんですね、うれしい……」

愛しい人の名前を呼んで

私の意識はそこで途切れた。

第1話 最悪の記憶（後書き）

人物紹介

羽鳥れい

武蔵野理科大学二年、コーヒー好き、人見知り、男性が苦手、視力が悪い、秀に片思い中

第2話 ラベンダーブルーの薰り

翌朝目覚めると、一人暮らしするアパートのベッドの中だった。 しきつけのカフェバーで酔いつぶれて、秀先輩に家まで送つてもらつたような気がするけど、夢だつたのかな

そう思つてベッドから抜け出で、洗面台に行く途中の姿見の前で動きを止める。

鏡には、ふわりとうねる肩まで伸びた髪の毛、白い肌、二重で日本人にしては茶色い瞳が目立ち、白地に小花柄のプリントの半袖丸襟シャツに黒い細身のパンツを履いた私が映つている。

私の格好は昨日の服のままで、心なしか頭痛がする。

ゆめ、じゃ、なかつた ! ?

酔いつぶれたんじやなければ、着替えずにそのまま寝るなんてありえなくて、その結論に辿り着く。

「あつはー、笑える!」

大学の講義室。一限目が終わつて昼食を食べている七海があまりに大きな声で笑うから、その声が頭に響いて私はぎゅっと唇をかみしめて不快感を表す。

だんだん夏らしい気候になり、この前までは中庭で食べていた昼食も暑すぎて外では食べられなくて、冷房のきいている講義室に避難してきた。

「確かに笑えるかもしないけど……ひどい、笑いすぎだよー」

私はミネラルウォーターのペットボトルを片手に椅子の背もたれに体重を預けてうなだれる。

人生で初めて経験する一日酔い 少しの頭痛と胃もたれ。何も食べる気になれなくて、朝から水しか飲んでいない。

ご飯を食べない理由を聞かれて、昨日カフェバー『ブルーベル』で酔いつぶれたことを話したら、七海の笑いつばを刺激してしまったみたい。

「だつて、れいが、ザルのれいが酔いつぶれたなんて相当飲んだんでしょ。いやあ、酔いつぶれたれい、見てみたかっただな」

七海とは中学からの付き合いで、家もわりと近いし一番仲良い親友だと思う。背中に流した長い黒髪と、大きな黒目が印象的な綺麗め女子。私と違つてさばさばしてて、男子とも女子ともすぐに打ち解けてしまう羨ましい性格。人見知りで男性が苦手な私は、だいたいいつも七海の後ろに隠れて、七海を通して初めての人とは会話をする。つてか、そうじやないと、まともに話せないの。

一つ前の座席に机を挟んで座った七海は、頬杖をつきながら言つ。

「で、秀先輩に送つてもらつたつて？」

「それが、覚えてないんだ……秀先輩だつた気がするけど、秀先輩じゃない確率が高い。」

「私が私の事を迎えに来るはずがないでしょ？」

昨日は酔つ払つて現実と願望の境があおぼろげで、話しかけてきたのが秀先輩だつて思いこんでいたけど、冷静に考えてみれば秀先輩じゃない確率が高い。

だつて、秀先輩は私がブルーベルにいるなんて知らないだろうし、

迎えにくる理由がない。もし来たとしても私のアパートを知らない
はすだから、家まで送るのは無理だ……

「やつぱり夢だつたのかな……」

考えれば考えるほど、結論は夢つてことになる。

「じゃ、酔いつぶれでどうやつて帰つて来たの？」

「自力で　？」

そう答えて、苦笑する。自力は無理そうだけど、それ以外に考え
られないもの。

カフェバー『ブルーベル』は、私　羽鳥　れいが通う武藏野理
科大学と最寄りの運河駅の中間にある。

茶色を基調にして揃えられたアンティーク家具の店内は落ち着い
た雰囲気。コーヒー豆の種類を数多くそろえるコーヒー専門店なん
だけど、サイドメニュー やアルコールメニューが豊富で、特にニュ
ーヨークチーズケーキは最高においしくて、週に一回は食べに行つ
てるんじゃないかな。

初めてブルーベルに行つたのは一年前の夏。七海が「素敵なカフ
エを見つけた」と言つて私と七海と他に学科の友達が四人の計六人
で訪れた。利根運河沿いの道から一本裏道に入つた場所に、木々に
囲まれたオープンテラスがある喫茶店があつた。

黒い縁の硝子扉をあけると、西部劇に出てくるバーのような木の
床とカウンター、天井にはお洒落な茶色いライト付きのシーリング

ファンが取り付けられている。店内の至る所に観葉植物が置かれ、壁にはラベンダーブルー色のベルの形をしたスズランに似た花が描かれていた。

「ねえ、『J』が？」

「きやー、『J』を見たつ！」

友達がそわそわと囁く中、私はラベンダーブルーの花に見入つて壁に近寄る。壁一面に描かれた花はまるで本当にそこに咲き誇つているようで、匂い立つ美しさがある。

「『J』の絵、気に入つて頂けましたか？」

ふいに声をかけられて、びくりと肩を震わす。壁の絵から声のした方に視線を向けると、三十代半ばのがつしりとした体格で顎に鬚を生やし、艶やかな少し長めの黒髪を無造作に流した男性がカウンターからじつちに歩いてくる。

「えつと、あの……」

なんと答えたらいいか分からなくて、といふか話しかけられるとは思つてなかつたからてんぱつてしまつ。

「綺麗な花ですね……」

なんとかそつとつと、田元を和ませた男性が壁に視線を向ける。

“ブルーベル”といふイギリスで初夏を告げると言われている花ですよ。開花の時期になると森一面に咲き、ブルーの絨毯のようでも美しい風景になるんです

ブルーベル　お店の名前の由来が分かつて、男性がこの花をす
ごく好きだと言つ事が伝わつてくれる。

私は人見知りするし男性は苦手なんだけど、お互い花の描かれた
壁に視線を向けているから、緊張感が薄れる。

ブルーベルの壁画にはそれだけ魅力があつて、ついつい見とれて
しまう。しばらく一人して壁の絵を見つめていると、若い男性の声
が聞こえる。

「虎沢オーナー！　なに、お密をナンパしてるんですか？」
「ははっ、辰巳たつみじゃあるまいしナンパなんかしないよ」

オーナーと呼ばれた男性は声をかけてきた男性の首に腕を回して
体を引き寄せ、じゅれあつ。
えつ、ナンパ！？

その言葉にビクリしていると、オーナーがにこりと優しい笑みを
浮かべて私を見、窓側の席を顎で指す。

「お友達、あつちの席にいますよ
「あつ、ありがとうござこます」

私は慌ててお礼を言い、七海達が座る席へと向かった。

「わー、オーナーもイケメンつー！」
「私は、あの彼が格好いいと思つー！」

私は七海の隣の席　通路側から一畳に座る。注文をしてから、
みんなはそんな会話で盛り上がっている。

「ねえ、れいちゃん。さつき、オーナーと何話してたの？」

向かいに座る桃花ちゃんに聞かれて、私は首を傾げて答える。

「えっと、壁に描かれた花の名前を教えてもらつたの」

「それだけ？　れいちゃんはオーナーみたいなタイプが好みなの？」

と聞かれて……困つてしまつ。助けを求めるように隣の七海に視線を向けると。

「あー、ないない。れいは男性が苦手だから、好きなタイプとかないから」

助け船を出してくれたんだけど。

「えつ、そうなの？　れいちゃんって男性恐怖症！？」

なんか逆に興味を持たれてしまう。

「恐怖症って程のことではないんだけど、もともと人見知りだし、なんか男の人は苦手で、話すの緊張するつていうか……」

「も」も「も」と最後の方は声がしほんでくる。

「まあ、話すの緊張するつていうのは分かるけど……ほら、あの店員さんも、あの店員さんも、あっちの店員さんも……す」「ぐ格好良くない！？」　そういう風に思わない？」

桃花ちゃんに瞳をキラキラと輝かせて聞かれ、苦笑するしかない。あの店員さん つて言われても、私は視力が悪くて、そんなに

はっきり顔が見えないんだよね。コンタクトが眼鏡をしたらいんだけ、裸眼で生活しても少し見えにくいいだけで特別困ることはないし、授業の時しか眼鏡をかけていない。

だつて周りの人の顔が見えない方が、まだ少しは人見知りしないでいられるというか。

つてか、そつか。こここの店員さんはみんなイケメンなんだね……興味が惹かれた訳ではなくて、七海が「素敵なカフェ」と言った理由が分かつて納得する。七海は三度の「飯よりイケメンが大好き、美男子が大好きなんだ。

「男性を苦手になつたきつかけつてあるの？」

なぜか私の話は続行していたらしく、桃花ちゃんに聞かれて、私は記憶の手綱を引っ張つて高校生の時の記憶を引っ張り出す。

「高校生の時……名前を呼ばれて振り返りざまに好きでもない男子にキスされてね。それがファーストキスで、今では相手の名前も顔も思い出せないんだけど、もしかしたら、それが原因だったのかもしない」

正確には、もつと前から男の子は苦手だつた。ただそれまでは話したり一応出来てて、その出来事があつてからは、七海を間に挟んでじやないと男子とはまともに会話も出来なくなつてしまつた。話しかけられるとびくびくしちゃうし、田も見られなくて、すごく悪い態度になつちゃう。

「あー……」

私の話を聞いて、みんなが渋い顔をして憐みの視線を向ける。

「ファーストキスがそんな苦い思い出だつたら、男性恐怖症になつたのも頷けるかも」

桃花ちゃんが同情して頭を優しくなでてくれたんだけど、七海が余計な一言を言つ。

「そんな男性恐怖症のれいにはねえ、好きな人がちゃんとこるのよね~」

にあーっと頬を歪ませて口元に手を当てて横目で私を見る七海に、かあーっと顔が赤くなる。

「なつ、余計なこと言わないでよ……」

「お待たせ致しました」

七海の口を塞いだと伸ばした手を、男性の声が聞こえて、ぱつと引っこめる。

「モカ・クラシックでございます。紫陽花ブレンドでございます」

そう言つた店員の声は澄んでいて、隠れた七海の背中から向かいの席に座る三人に視線を向けると、みんなぽあーっと店員を眺めている。声もすこく素敵だけど、顔もきっと格好良いんだろうななんて想像して、まあ、興味ないけどねつて、テーブルに次々と置かれるコーヒーに視線を向ける。

店内だけではなく、コーヒーカップの一つ一つもデザインが違い、お洒落で可愛い。

「本日のおすすめブレンドでございます」

私の注文したコーヒーが置かれて、七海の背に隠していた顔を少しだけ覗かせて、湯気の立つコーヒーカップを眺める。

「アイスコーヒーでいります。」ゆづくりひづる

すべての注文を置き終え、お辞儀をして店員は戻つて行った。

「す、ぐ、こ、い、香、り、」

そう言つたのは私じゃなくて七海で、首を動かし七海の顔を見つめる。

その視線の先に、カウンターに戻つていく半袖の白いYシャツに黒ズボン、腰に黒いロングエプロンを巻いた男性の後ろ姿がある。遠田でも分かるさうさらの黒髪は上半分だけ ハーフアップつて言つのかな が結ばれている。

「あの店員さん、す、ぐ、こ、い、香、り、が、し、た、」

ぱつんと呟いた七海の言葉に、私は首を傾げた。

第2話 ラベンダーブルーの薰り（後書き）

人物紹介

猿渡 七海

れいの中学からの親友、イケメン大好き、武藏野理科大学二年

第3話 恋愛対象 星降りの丘

夏休みになり、サークルの合宿で群馬に行くことになる。

私が所属している天文研究部は一年から三年生まで合わせて三十人、学校に集合して大型バスを貸切り、合宿所へ向かう。日程は八月十一日から十四日までの三泊四日で、十一日に群馬天文台で行われるベルセウス座流星群の観測会に参加する。それ以外の日も夜は観測、日中は大学祭の展示物の作成をする。

全員参加のこの合宿、天体観測も楽しみなんだけど、私にはもう一つ楽しみがある

行きのバスの中、隣の窓側の席に座る七海は寝ちゃって、窓の外に視線を向けたままぼーっとしてた私の頭がぽんつと叩かれて、驚いて後ろを振り仰ぐ。

「羽鳥、手出して」

通路に立っている秀先輩の姿を見て、ドキンと胸が高鳴る。言わるままに両手を広げると、両手から零れるような量のキャンディーやラムネ、クッキーなどのお菓子を乗せてくれた。

「あげる」

にかつと白い歯を見せて爽やかに笑つて、通路を挟んだ斜め後ろの席に戻つていいく秀先輩の姿に胸が鳴り響く。

「あ……りがとうござまく」

秀先輩はすでに席に座つてて聞こえていなかつたとは思ひなび、お礼を言つて手のひらのお菓子を見つめる。

どうしてお菓子をくれたのか分からぬけど、秀先輩の優しい気持ちが詰まつていて、食べるのがもつたいたく感じてしまふ。

ちらつと後ろを振り向くと、通路側に座つた秀先輩と視線が合つてしまい、ぱつとそらす。

わあー、思いつきりそらしちやつたつ。嫌な子つて思われちやつたかな。

焦る気持ちにもつ一度振り返ると、秀先輩がじいーつと私を見てて、くすりと笑つた。

わつ、秀先輩に笑われちゃつた。

恥ずかしくて顔を真つ赤にしたまま前を向き、手のひらに視線を落とす。このままじゃ食べられないから、お菓子を一度膝の上に置いて、ラムネを一つ口に放り込む。

しゅわーっと溶けてしまつたラムネは甘酸っぱくて、心を温かくした。

残りのお菓子は鞄にしまつて、大切に食べよつと決める。

合宿所に着いて部屋割、荷物を運び終わると、まずはミーティング。十一月に行われる大学祭の展示物について何を作るか発表する。合宿の日程、一日目は夕飯まで展示物作成、夜は観測。二日目は午前中展示物作成、午後から群馬天文台見学と夜通し観測会。三日目は自由行動、夜は合宿打ち上げの飲み会。四日目は午前中展示物作成で昼食後帰宅。

ミーティングをしている一十畳の和室の部屋の上座に二年生が座つて、牛丸部長が説明をする。

「二日田自由行動の企画係、説明して」

部長が言いながら私と七海に視線を向け、部員の視線が集まる。

「はい。企画係の猿渡と羽鳥です」

七海が言つて、私はその横で俯いてお辞儀する。

「たんばり今日は玉原ラベンダーパークに行きます。十時ロビー集合、十時半から十一時まで自由時間、十一時から十三時まで昼食、その後合宿所へ戻ります。これがパンフレットで、数枚しかないので回してみてください。参加費用は入場料とバスのガソリン代で一千二百円です。参加する人は、今から回す名簿に名前を書いて下さい。参加表明は明日の午前中までにお願いします」

企画といつのは、毎年一年生の企画係がどこに行くか何をするかすべて企画する。二日田は朝四時まで天文台で観測会に参加して、合宿所に帰つてきてからは昼ごろまで寝ている人が多い。大学祭の展示物はグループでやつていて、だれかが寝ていると進まない。それで、起きている人が時間をもてあまさないようこの企画がある。企画係は一年一人でやるのがきまりで、七海が立候補して私も付き合つことになった。

ほんとはこんな人の前に出てやる仕事は苦手だからやりたくはないんだけど、いつも助けてもらつている七海のお願いを断ることは出来ない。

「一年は六時から夕飯の準備があるから遅れないよう。じゃ、夕飯まで解散」

牛丸部長が言つて、ぱらぱらと部員が散つていく中、七海は手元

に戻ってきた名簿を見ている。企画に参加する部員の名前が書かれている。

私は七海の横から名簿を見て、誰が参加するのか確認する。あつ、秀先輩参加だ。嬉しくて、自然と頬が緩んでしまう。はつとして隣に座る七海に視線を向けると、にたあーっと意地悪な笑みを浮かべてるから、慌てて顔を引き締める。

「良かつたね、先輩参加で」

でも、その言葉には素直に頷く。

天文研究部に入部したのも、七海が一緒に入ろうって言つてのがきっかけだった。私は何かサークルには入ろうとは思つてたけどどこのサークルがいいとかはなくて、七海が天文研究部の見学に行くと言うからついて行つた。

部室には牛丸先輩と犬飼先輩の一人だけがいた。室内の電気を消して、手作りプラネタリウムの試演していた。

「あのー、天文研究部に入りたいんですけど……」

暗幕を引かれて薄暗い室内に入り、七海が声をかける。私はその後ろについていく。

ぱつと部屋の電気が付けられて部屋の明るさに瞬いて、目の前に立っていたのが秀先輩だった。

「一年生？ 入部希望者？」

ふわりと人懐っこい笑顔を向けられてドキンとする。

普段は初対面の人のいきなり声をかけられたら恥ずかしくて七海の後ろに隠れるんだけど、ノンフレームの眼鏡の奥に見える優しげな瞳に吸い込まれそうになつて、見とれてしまった。

「はい、そうです。見学いいですか？」

「大歓迎だよ。俺は犬飼です、こっちが副部長の牛丸。真一、説明してやつて」

後半は牛丸先輩に言つたんだけど、きりつとした一重の牛丸先輩は抑揚のない声で。

「俺説明苦手だから、秀お願い」

そう言つて、机の上に置いていたプラネタリウムを丁寧に片し始めた。

真面目でクールな雰囲気の牛丸先輩と対照的に人懐っこい笑顔が印象的だつたからかもしれない、私は秀先輩に一目惚れ 初めて会つた日から惹かれ始めていた。

男性が苦手と言つても、恋愛に興味がない訳じやない。ただ今まで、男性とともに話す事が出来なくて、恋愛対象になる人がいなかつただけ。

入部すると、秀先輩とすぐに仲良くなつた。秀先輩は優しくいつも手際が悪い私を気遣つてくれて、秀先輩が相手なら七海を間に挟まなくともちゃんと話せた。

秀先輩が優しいのは私にだけじゃなくて、誰にでも優しいのは気づいている。私が特別とか、そんな勘違いはしていない。だけど。

七海に誘われて天文研究部に入った私は自分の意思で入つた訳じやなくて、天文のことは高校の授業の内容までしか知らないし、人

見知りの性格も手伝つて、あまり積極的に部活に参加していなかつた。

それが気に食わなかつたみたいで、一学年上の先輩からいじめ無視されたり、一人で掃除をさせられたりした時期があつた。そんな時、私を目の敵にする先輩から庇つてくれたのが秀先輩だつたから 好きな気持ちがどんどん大きくなつてしまつた。

秀先輩はいま三年生、今年の秋には部を引退してしまつた。そうしたら私と秀先輩の接点は何もなくなつてしまつ。そんなのは悲しそう。

だから、この合宿中に告白しようと決意したの。だけど、人見知りの私、四六時中部員がいる中で告白をする機会を見つけられるか分からなくて、悩んでいた私に七海が企画係になつて告白の協力をしてくれると言つた。

つまり 自由行動の企画の日、私と秀先輩が一人つきりになつて告白できるようにしてくれるので言つて言つた。

企画は徹夜明けの日と言つことで参加人数はそんなに多くない。合宿所よりも一人きりになるチャンスは多いはず。

秀先輩が私を好きかも知れないなんて自惚れではない。告白してこの恋が実る確率は低い。だけど、例え確立が低くても気持ちを伝えずになかつたことにすることは出来ない。

人を好きになつて、気持ちを伝えるだけでも 私にとつては進歩だから。この恋で、少しでも成長出来たらいいと思つてゐるの。

合宿二日目、昼食後に群馬展望台に行く。空はあいにくの曇り空で雨は降つていないので、星はとても見えそくはない。

観測の時間までは天文台の見学をし、東洋最大級の望遠鏡を見た

りして時間を潰す。

空が宵闇に包まれた頃、外の観測広場に寝転がって全天の夜空を見上げる。

左隣には七海が、右三十センチの所にはなぜか秀先輩が寝転がっている。少し手を伸ばしたら触れられそうな距離に心臓がバクバクしている。

昼間より雲が少くなり晴れ間が広がり十三夜月が顔を出す。空はどこまでも澄みきり、無数の星が瞬いている。

降つてきそうな星空に目を大きく見開き、両手を空に伸ばす。恋焦がれている輝く星に手が届きそうで

当然だけど星には手が届かなくて、空をむなしくかく。

右側からくすりと笑い声が聞こえて月明かりの闇の中、顔を右に向ける。

「何やつてるの、羽鳥」

秀先輩の純粋な笑い声が聞こえて、ドギマギする。

星を掴もうとしたなんて、子供じみたとこを見られて恥ずかしい。秀先輩は 星みたいに眩しく輝いていて、私には手の届かない人に感じる。それなのに今はこんなに近くに存在を感じて、愛おしさに胸がいっぱいになる。

寝転がつたままひたすら空を見上げ、時刻は日付をまわり十三日

午前一時頃。

キラッ と空に一条の煌きが走り抜ける。

「わあ つ！」

瞬間、広場に歓声があがる。

一つ、また一つと流星が出現し、星が夜空を走っていく。よく、流れ星が流れる間に三回願い事を唱えれば願いが叶うって

言つけれど。

たつた一瞬だけの輝きを見せ夜空に吸い込まれるように消えていく流星は、美しいけれどどこか儂くて 見入つてしまつて願い事を唱えようという気にはならなかつた。

「わあ っ！」

また一つ、走る星に広場がどよめき、感嘆の声が聞こえる。私も思わず声を出して空を見上げる。

「綺麗……」

仰向けに寝転がつた体の横に投げ出していた手が誰かの手と触れてしまつて、びくりと反応する。

右側を見なきでもそこにいるのが秀先輩だつて分かつて。秀先輩の手と触れてしまつたんだつて分かつて、鼓動が一気に早くなる。ふわっと、触れていた手の甲から手のひらに温もりが広がつて、秀先輩に手を握られた。

秀先輩 !?

突然手を握られて、てんぱつてしまつ。微動だに出来なくて固まつていると、再び流星が流れて広場に歓声が響き、すつと手が離れていった。

第3話 恋愛対象 星降りの丘（後書き）

人物紹介
いぬかい
犬飼 秀

武藏野理科大学三年、天文研究部副部長

第4話 恋愛対象 流星のよひ

十三日の早朝、流星群の観測を終えて合宿所に戻るバスの中、私は広げた右の手のひらに視線を落として、小さなため息を漏らす。天文台から合宿所まではバスで一十分も掛からないのに、部員のほとんどが寝てしまっている。徹夜で観測したのだから仕方がないのかもしれないけれど。

私も眠かったけど、あまりに胸が高鳴つて眠れない。

間違いじゃなかつたよね

気のせいじゃなかつたよね

自分に問いかけて、温もりの消えない手のひらを見つめる。流星のようほんの一瞬だつたけど、秀先輩は確かに私の手を握った。間違いとかじやなくて、私の手だつて分かつて握ったんだ

もしかして、秀先輩も私のこと

そんな甘い期待を胸に抱いてしまつて、大きく頭を左右に振る。ダメダメ、期待して振られたら、どんなに絶望が大きくなるか……でも、だけど。

心の中で葛藤が繰り広げられる。私が告白するのは、もう今日なんだ

合宿所に着いたのは五時少し前。朝食は七時から皆で食べるんだけど、この日は朝食の時間は決められていない。部員はすぐに部屋に戻つて仮眠をとるか、昼まで寝る。

私と七海は企画係だから集合時間の十時よりも少し早く準備をしなければならない。八時くらいまでは寝られるかな。

部屋は一年女子五人の1・2畳の畳部屋。部屋に帰つてくるなり、

みんな片付けもほどほどに布団を敷いて寝てしまう。

私も片づけを済ませて、携帯のアラームをセットして窓側に敷いた布団に横になつたんだけど、もやもやが頭の中から離れなくて、バスの中よりも完全に目が冴えてしまった。

遮光カーテンの引かれた窓の隙間から朝日が差し込み、室内はうつすらと明るい。

寝ようと思つて瞼を閉じても、色々考えてしまつし、瞼の裏は明るくて、到底眠れそうになかった。

私は音をたてないように静かに起き上がり、財布と携帯だけを小さな鞄に入れて立ち上がる。

確かに合宿所の近くに湖があるって言つてたな……

そんなことを思い出して、合宿所を出て歩き出す。

外はすでに日が昇り始めて、見上げると空の真ん中で夜空と朝空

がまじりあつて絶妙な色合いをしている。

合宿所の前の坂道を登り、畑の中のうねつた細い道を進んで、若葉が生い茂る林を抜けたところに細長い湖があつた。湖の際まで寄ると、ぴちゃぴちゃと水が打ち寄せてくる。靴が濡れないような位置を歩いて湖を一周して、しばらく時間を潰してから合宿所へと戻つた。

入り口の階段を軽快に駆け上がり、自動ドアをくぐつて、私はぴたつと足を止める。すぐ目の前のロビーランプで秀先輩がうた寝をしているのが視界に入つてビックリする。

秀先輩、どうしてこんなとこで

そう思いながら近づく。秀先輩は一人掛けのソファーの肘かけに寄りかかるように体が斜めに傾いで寝ている。間近で見た秀先輩の顔、眼鏡の下の睫毛がすごく長いことに気づいてほれぼれとしてしまう。

ああ、私は秀先輩のことが好きなんだ

愛おしい気持ちに突き動かされて、日に透けた色素の薄い髪の毛に手を伸ばす。少し癖のある髪の毛は外に向かつて跳ねている。ず

つと思つていた、秀先輩の髪の毛は柔らかそうつて。触つてみたくてうずうずして手を伸ばして、額にかかる髪に触れる直前。

「ん……」

ぴくつと肩を揺らしてみじろいだ秀先輩に、私はびっくりして手を引っ込め、慌てて部屋へと駆け戻つて行つた。

わつ、私つたら、何しようとしてたの？ 寝てる秀先輩の髪に触れようとしてたなんて、なんて恥ずかしいのかしら。自分の行為を思い返して、見る間に顔が真つ赤になつてくる。

よかつた、触れる前で。秀先輩が寝てくれて、良かつた。ほつと胸をなでおろして、扉を背に立つていた私は力が抜けてへなへなとその場にしゃがみこんだ。

集合時間の十時、企画に参加するのに集まつたのは十五人で、三年生は秀先輩の他に一人、二年が私と七海とあと一人、一年生が八人……

一年生が多いのは、若さのせいかしら。そんな事を考えて、自分がもう二十歳だということを実感して悲しくなる。

合宿所のマイクロバスを借りて、玉原ラベンダーパークに向けて出発する。山道を降りて登つて、予定より数分早く到着する。十時半前だというのに夏休みだからか、駐車場には多くの車が止まり、園内もそれなりに人が入つているようだ。

「では、十一時まで自由行動です。昼食場所はリフト降り場の側のレストハウスです。十二時にレストハウス前に集合して下さい」

ゲート前で私が人数分のチケットを買って渡して回っている間に、七海が手早く説明する。

近くにいた人から順番にチケットを渡し、他の三年生と一緒にいる秀先輩には目を見れずに渡してその場を素早く離れる。

展望台で手を繋がれた事も、朝のロビーで私から触れてしまつた事も夢か現実かよくわからないのに、胸のドキドキだけが現実だと告げていて、秀先輩の顔をまともに見られなかつた。

「時間厳守をお願いします。解散でーす」

七海の言葉で十五人の部員はゲートをぐぐり、ぱぱぱぱーと園内に散らばつていく。

ゲート入つてすぐ横で立ち止まり、パンフレットとチケットを鞄の中にしまつっていた私の腕を七海が力強く引っ張る。

「ほら、れい。秀先輩に声かけなよ」

七海は言いながら私達の少し先にいる秀先輩に視線を向け、私もつられて視線を向ける。瞬間。

こつちを見ていた秀先輩のこげ茶色の瞳と視線が合つ。

「あつ……」

視線があつただけでこんなにも意識してしまつて、体中が石になつたみたいに重くて動かない。

「ほらっ」

七海が急かすように私の背中を押すけれど、私は身じろぐ事さえ

出来なくて。

じつとこっちを見ている秀先輩の視線が突き刺されて、顔がどんどんほてつていいくのが分かる。

言わなきや そう思つのに、言葉が出てこなくて。

私と秀先輩の視線が交じわっていたのは、ほんの数秒だったのかかもしれない。だけど私にはすごく長く感じて。

「…………つ」

秀先輩がこっちに一步踏み出して何か言おうと口を開く。ドキンと胸が大きく飛び跳ねる。何を言われるのか期待と不安で胸が押しつぶされそいで、ぎゅっと瞳をつぶつて斜め横を向く。その瞬間。

「犬飼君、一緒に行こうよ」

他の三年生に声をかけられて、秀先輩はいてしまった。

しばらく俯いたまま黙つていると、七海が呆れた様なため息をつく。

「あーあ、行っちゃった。まあ、緊張するのは分かるけどね、頑張るんでしょっ」

私が緊張して声をかけられなかつたんだと思つて、七海が励ますように背中をばしばし叩く。

「いっ、痛い……七海」

本氣で痛くて、少し涙目になつて七海をしたから睨む。

頑張ると言つた私の背中を押してくれた七海の気持ちは嬉しいけれど、緊張してるんじやなくて気まずい……なんて言えなくて、複

雑な感情にはあーっとため息をついた。

「とりあえず私達も行こうか？」

時間がもつたいないという様に、七海が歩き出しながら言ひ。 「リフト乗る？ それとも歩いて行く？ 歩いて二十分くらいみたいだけだ」

リフトに乗るもの気持ち良さそうだなって思つたけど、リフトの列に視線を向けて、その中に秀先輩をいるのを見つけて ここから距離じや、先輩がこっちを見ているかなんて分からないのに見られている様な気がして、ぱっと視線をそらす。

「二十分ならすぐだよ、歩いてみよ」
「天気もいいし、散策しながら行きますか？」

秀先輩を避けた私の心には気づかずに、七海は軽快な声で言つて遊歩道を歩きだした。

目に飛び込む爽やかな緑に囲まれた板敷きの小道は緩やかな傾斜になつてゐる。雄大な自然に囲まれた遊歩道を登りきると、そこには一面のラベンダー畑。

ラベンダーブルーの絨毯のように、そろそろで紫色の小さな花が風に揺れている。

大きく深呼吸して、ラベンダーの香りを肺いっぱいに吸い込む。 すうーっとした匂いと甘い香りに心が満たされて、ぎゅっと目を閉じる。

何年ぶりだろうか

小学生の頃、家族旅行で行つた北海道で初めてラベンダー畑を見

てとても感動した。小さな花が丘一面に咲き誇つて、凜とした美しい景色が鮮やかで、甘さと爽やかさの調和のとれたフローラルな香りに一瞬で虜になってしまった。

お土産物屋さんでラベンダーの香り袋を買い、枕元や衣装棚に入れた。母に頼みこんでラベンダーの鉢植えを買って、それ毎年育てている。

私が一番大好きな花。心が癒される花。

あれ以来 ラベンダー畑に行くことはなくして。今回の合宿先が群馬と聞いて、前から言つてみたいと思つたんばらラベンダーパークが近くにある事を知つて、企画の行き先は『ここだ!』って即決した。

念願のラベンダー畑をもう一度見ることができて、嬉しくて仕方がなかった。

目を閉じて香りを満喫していた私は目を開けて、ラベンダーブルーの絨毯を見て頬がだらしなく緩んでしまう。

そういえば と、カフェ・ブルーベルの壁に書かれた絵を思い出す。あの絵に目を惹かれたのは、子供の時に見たラベンダー畑を思い出させたからかもしれない。だから、あの店に自然と足を運んでしまうのかもしれない。

そんなに広くもない園内。私達の後ろを歩いてきた一年生がやってきて、ラベンダー畑の前で一緒に写真を撮つたり、撮つてあげたりする。

秀先輩とも近くを通つたりして、何度も声をかけるチャンスはあつた。

私の気のせいじゃなければ、秀先輩も私に声をかけようという仕草を何度かしていった気がする。だけど。

あつという間に自由時間は終わり、昼食中も席が端と端で結局告白できないままに合宿所へ帰り、夜は合宿の打ち上げの飲み会

をじ。

合宿最終日、帰宅の日になってしまった。

第4話 恋愛対象 流星のようと（後書き）

人物紹介
牛丸 真一

武蔵野理科大学三年、天文研究部部長、秀の親友

気持ちを伝えないまま終わりにしたくない恋を見つけた。

その気持ちを伝えるだけでも、人見知りの私にとっては大きな進歩で。だから頑張らうって思ったの。それなのに

どうしても秀先輩のことを意識してしまって声をかけられなかつた。流星群の観察会から後 先輩とはほとんど話さず、もちろん一人きりになつて告白するなんて出来るわけがなかつた。

私のせいじゃなくて、秀先輩は飲み会中も私の方をじいーっと見てて。何度も声をかけられそうになつては、七海と話している振りやトイレに逃げたりしてしまつた。

七海はそんな私を緊張していると思っていたのか、ため息をついても、煽るような事を言つてくることはなくて、少しだけほつとしていた。

帰りのバスの中、眠くはなかつたけどほとんどの部員は寝てしまい、斜め後ろに座つた秀先輩が起きているのを感じて、なんだかいたたまれなくて寝たふりをした。

こんな風に逃げてばかりいてもどうしようもないのに、心が不安に押しつぶされそうで、秀先輩の顔をまともに見る事も出来なかつた。

「羽鳥つ！」

バスから降ろした鞄を持つて素早く校門に向かおつとした私の腕が力強く引かれ、ぴくりと足を止め、視線を足元に落とす。振り返らなくても、呼びとめた声が秀先輩だつて分かつてしまつて、切な

さと不安とない交ぜな気持ちで鼓動が早鐘を打つ。

「な、ん、ですか……？」

振り返る事も出来ず、震える声で聞き返すのがやつとだつた。

掴まれた腕から心臓の音が聞こえてしまいそうで、離してほしくてみじろぐと、察したように少し困ったような秀先輩の声が後ろから聞こえた。

「あつ、ああ、悪い。少し話があるんだけどいいか？」

有無を言わせない言い方ではなく気遣わしげな声に秀先輩の優しさが伝わって、心が切なく震える。

私はゆっくりと振り返り、秀先輩の顔ではなくて繋がれた手に視線を向けて、こくんと頷いた。

秀先輩はさりげなく私の手を離して歩き出し、私もその後、三歩離れた距離を歩く。

バスの中で牛丸部長の解散宣言がされ、バスの荷台から荷物を下ろした部員が次々と校門を出ていく中、私と秀先輩は逆方向 校舎へと向かって歩く。

途中、秀先輩は他の三年生に「どこ行くんだ?」「って声をかけられる」と、「ちよつと」と笑つて返した。

七海は私が秀先輩と一緒になのを見て、頑張れつとつうに手を振つてくれて、私は複雑な気持ちで少しだけ手を振り返し、秀先輩の後を追つた。

車両門からすぐ横にある部室棟の前に止まつたバスから、まっすぐ伸びる桜並木 今は青葉だけ夜で分からない を進み、食堂の手前で秀先輩は立ち止まつた。

お互い大きな鞄を地面に置くと、秀先輩が振り向いて私を見つめる。

呼び止めてこんなところに連れてきてまでする話ってなんだろう
そう考えて、合宿所でも頭を廻った期待と不安が渦を巻いてぐるぐると胸に押し寄せる。

秀先輩の目の前に立っているだけで緊張して、逃げてしまいたい衝動にかられる足を、必死にその場に繋ぎとめた。

「あの……」

「あつ……」

私と秀先輩が口を開いたのは同時だった。ぱつと顔を上げた私は秀先輩の瞳と視線があつて、お互い大きく目を見開く。

まさか秀先輩が何か言おうとしたのと被るとは思わなくて、ぱつが悪くて私は視線を横にそらしてきゅっと両方の手のひらを握り合わせる。

「その……」

秀先輩には珍しく歯切れ悪く「」もるから、思わず仰ぎ見てしまう。そこには星のような優しい煌めきの瞳があつて、ドキンッと大きく心が震える。

「天文台のことだけど……」

天文台? 初めは何の事を言いたいのか分からなくて すぐに手を握られた事だと気づいて、ぼぼつと湯気が顔から出やうなほど顔が赤くなつたのが自分でも分かつて、慌てて俯く。

「びっくりしただろ? 突然手を握つたりなんかして、ごめん。流星があまりに綺麗で興奮して……」

無邪気な子供みたいな理由で、秀先輩ひじこと思つて苦笑する。

「はい、驚きました」

温かくてくすぐつた氣持ちで胸がいっぱいになつて、くすぐりと笑つて頷いた。

「本当にありがとうございました。そのことをずっと謝つたくて」

私と同じように、秀先輩もずっと手を繋いだ事を氣にしてくれてたことに、気まずくて避けてしまつていたことが申し訳なくなる。気にしていません。嘘だけどそういつてこの話を終わらにじょりとしたんだけど。

「妹みたいに思つている羽鳥とは気まずくなりたくないんだ」

その言葉が鋭い刃物の様に胸に突き刺さる。ツキン、ツキンと胸が締めつけられて苦しくなる。

もしかしたら、秀先輩も私のことを好きでいてくれるかも知れない。意識してくれているのかも知れない。その淡い期待が、無残にぼろぼろと音を立てて崩れ落ちる。

妹みたい。その言葉で恋愛対象外だと言われていることが分かつてしまつて切なかつた。

「 」

秀先輩からそらしていた視線をくつと上げ、星の輝きの瞳をまつすぐに見据える。

「私は秀先輩が好きですっ」

気がついたら勢いで告白していた

田の前の秀先輩の瞳が驚きで大きく見開かれ、それから困ったように眉尻が下がるのを見て、ぎゅっと胸が痛み視界の端が滲みだす。こんな風に投げやりに言いつつもりじやなかつた。

もつと慈しみを込めて言いつつもりの言葉が、ぽろつと瞳から落ちる冷たい雫と一緒にこぼれ落ちた。

「……羽鳥、ありがと。だけど」

続きの言葉なんて聞かなくても想像が出来て、くしゃくしゃに顔を歪ませる。

「羽鳥のことは好きだけど、それは大事な後輩としてで」

困ったような秀先輩の言葉を最後まで聞かずに、私はその場をかけ出していた。

地面に置いた合宿の鞄も忘れ、手持ち鞄一つでただ無我夢中に走つていた

食堂の前からどこをどう走ったのか覚えていない。気がつけば、見慣れたウッドテラスの横の黒い縁の硝子扉を押し開け、右奥のラベンダーブルーの壁画の前の席に座つていた。

「いらっしゃいませ。ご注文は何になさいますか

お決まりのフレーズが遠くで聞こえても、私は何も答えられなかつた。

走つている間、瞳から涙が溢れて零れて夜風に飛ばされて、今はもう涙は出ていなかつたけど、ぼんやりとした視界の中にはラベンダー・ブルーの絨毯のようなブルーベルの絵だけがしつかりと写されていた。

子供の頃に見た北海道のラベンダー畑。

昨日見た玉原のラベンダー畑。

そのどちらよりも鮮明で匂い立つような美しさの絵に焦点の定まらない視線を向けて、テーブルに頬杖をついてふうーっと深呼吸の様な小さなため息をついた。

ラベンダーは甘くて爽やかな香りだけど、ブルーベルはどんな香りなのかしら。そんな事をぼんやりと考えた時。

甘く爽やかなラベンダーの香りではなく、香ばしさの中に気品に満ちた薔薇の花のような香りがふわりと漂つ。

すつと、頬杖をついたテーブルの端にコーヒー・カップが置かれ、そこからフローラルな香りが漂う事に気づいて顔を上げると、トレンチを脇に持つて虎沢オーナーが立つていた。

オーナーとは初めてお店に来た時少し話しただけなのに、その後足しげく通うようになった私にいつも話しかけてくれて、時々サービスもしてくれる。私にとつてオーナーは、七海を挟まずに話せる数少ない男性で信頼している人だつた。

「オーナー……」

オーナーは片眉を上げ心配そうな顔で私を見て、その時になつてお店に来てから一言も話していない事に気づく。

涙の後の残る頬を慌てて拭う。

オーナーの顔とテーブルの上のコーヒーとを見比べて、カップを手元に引き寄せて口をつける。カップを口元に近づけた瞬間、香ば

したの中にある花のような香りがふわりと鼻腔をくすぐり、馥郁たる香りが立ち込める。

口に含むと、果実酒の様な酸味と甘さとコクがほどよく調和された絶妙な味わいの「コーヒー」だった。

「INのコーヒーは……？」

今まで飲んだどのコーヒーとも違う味わいに首をかしげると、太陽の様なふわりとした笑みを浮かべてオーナーが言つ。

「ブルームーンブレンドです」

「ブルームーン……そんなブレンド、メニューにありましたっけ？」

週三回くらいは来ているから、メニューもほとんど覚えてしている。だけどそんなメニューはなかったはずで、確認しようとメニュー表に手を伸ばすと、オーナーが苦笑して首を振る。

「いえ、メニューにはありませんよ。うちの従業員がブレンドした試作品です。お味はいかがですか？」

試作品と聞いて片眉を上げ、それからすこし半分ほどの量になつているカップに視線を落とす。

「美味しいです。甘さとコクがちょうどよくて、香りもすこく良いし。私、好きです」

田を閉じてブレンンドコーヒーの香りを吸い込むと、さつきまで胸に渦巻いていた苦しい気持ちを吹き飛ばしてくれるよう気がする。オーナーは福福とした笑みを浮かべてカウンターへと戻つていく。私はブルームーンブレンドの香りを最後まで堪能した。

ずずつと鼻をすすって、今更だけテイッシュを取り出して鼻をかんで頬に残る涙の跡を拭う。オーナーには泣いた事に気づかれたかもしれないけど、仕方ないと思つてしまつた。

それよりも、失恋の辛さを消してしまひそなうな不思議な味わいのコーヒーをじいーつと見つめる。

こんなに美味しいコーヒーを作つたのはどんな人なんだろうといふ好奇心が湧いてくる。だけど。

ブー、ブーと鞄の中で携帯が振動し、取り出して画面を見てツキソと胸がまた痛み始める。

ディスプレイは秀先輩からの着信を知らせていた。

優しい秀先輩のことだから、話の途中で駆けだした私を心配しているんだろうと想像がつく。だけど今は、その優しささえひどく切なくて、私は泣きそうに顔を歪めて携帯を鞄の中に戻した。

ブー、ブーとバイブレーションがしばらく続き、やがて途切れてしまーと大きなため息をつく。

電話を無視するのはよくないつて分かつてゐるけど、今は秀先輩の口から聞くどんな言葉も失恋を思い知るだけで辛いから。とてもじやないけど電話に出ることは出来なかつた。

そうだ、私……失恋しちやつたんだ。

今頃になつてその事を自覚して、胸がじくじくと痛む。

叶う恋だとは思つていなかつた。両思いだなんてそんな期待はしていなかつた。だけど妹みたいといふ言葉は、好意を持つてもらつてるのは分かるけど、私が欲しい気持ちとは全く違う。愛情じゃない。恋愛対象としてさえ見られていなかつたことが、悲しすぎる。

もう涙は出ないと思つてゐたのに、ブルーベルの壁画に向けた視界の端がぼやけてきてくる。じょぼれになつた嗚咽を堪えて目元をぬぐおつした時。

その腕を後ろからぐいっと引かれ、反動で振り返つたそこには二十代くらいの男性が立つてゐた。驚いて目を瞬いた瞬間、ぽろつと

涙が零れ、はつと我に返ったんだけど。

「ちよつと俺こつきあつて」

声は綺麗なバリトン。あまり抑揚のない声からは感情は読みとれないのに、言葉と行動が強引に私を引っ張り、立ち上がらせる。

「えつ……」

人見知りとか男性が苦手とかそんなことを言つ間もなく、有無を言わさずお店から連れ出されてしまつて
わつ、私、どうなつちやうのあー？

第5話 恋愛対象外（後書き）

人物紹介
虎沢 誠一郎
カフェ・ブルーベルのオーナー、三十六歳

第6話 愛を奏でる天使 強引な人

私の腕を引いてずんずん歩く男性はすらりと背が高く、紺のカーポパンツに白いシャツ、ダイス模様の臙脂のカーディガンを着ている。艶めく漆黒の髪は肩につくくらい長くて、上半分だけ結んでいるのを、後ろから見上げる。

運河駅に着くと二人分の切符を買って電車に乗りこむ。どこに向かっているのかも分からぬのに、私は黙つて腕を引かれるままに従つていた。

突然、声をかけてきたこの人は強引に私の腕を引いて歩き出したのに、店を出て鞄を持つていないと気付いた私の鞄をちゃつかり持つてたり、黙々と歩いているけれど私の歩調に合わせてゆっくり歩いている事に気づいて、強引なのか優しいのかよく分からなくなつてしまつた。

いつもだつたら知らない人と二人きりなんて状況は絶対にありえない。人見知りで緊張しているから黙つて従つている訳じやない。失恋でやけっぱになつてているのとも少し違う。

ただ、電車の中で見たこの人の瞳が心配そうに私を見ているからなんとなくついて行つてもいいかなつて思ったの。

それに一人でいるのは辛いことばかりを考えてしまつて嫌だつたから……

運河駅から電車に乗り柏駅で降りる。土曜日の十九時過ぎ、お盆期間という事もあつて柏駅前のコンコースは学生や会社員、飲食店の勧誘の人でごつた返していた。

彼はその中を上手にすり抜け、私の手を引いて歩いて行く。

時々、すれ違う女性の囁きが聞こえ、何人の人が振り返つてこつちを見ている様な気がしたけれど、たぶん気のせいだろう、と思ふことにした。

東口を出て駅前の大通りをまっすぐ歩き、辺り着いた場所に私は睡然として大きく口を開いて入り口の前で立ち止まつたのだけれど、そんな私の様子には気づいていない彼にまたしても強引に腕を引かれ店内に足を踏み入れることになる。

自動ドアが開いた瞬間、耳を塞ぎたくなるような騒音と店内のBGMに、私は眉根を寄せる。

迷うことなく店内を進み、振り返つた彼の瞳が心なしか輝いているように見えて、眉間の皺を深くする。

「どうしますか？」

その質問の意味が分からなくて、そのまま聞き返す。

「どうしますかって……？」

彼も私の質問の意味が分からぬように首をかしげる。

「JFFのキャッチャーやりますか？ それともレースゲー？ 格ゲーがいいですか？ マジアカも楽しいですよね？」

「ね、と言われても……」

「このどこの日本語なのかどうかも分からぬ単語に私は首をひねる。

「あの……カクゲーってなんですか？」

分からぬから聞いてみただけど、彼がぽかんとした顔で私を

凝視するから、どうしていいか分からなくなってしまう。

「格闘ゲームのことですよ？ ゲームはあまりやりませんか……？」

少し困ったような声で彼が言つから、私は苦笑して首を横に振る。

「あまりというか……全然。ゲームセンターは一回は少し入口のあたりに入つただけで、今回が一回目です」「えつ、一回目ですか！？」

彼は目を見張り、私の手を握つていなしの方の手で困惑したように首を触つて横を向く。

あんまり彼が黙つているので、私は掴まれた手をちょっと引いて彼を見上げる。

「あの、どうしてゲームセンターに来たんですか？ なにか用事でもあるんですか？」

普通に疑問に思ったことを聞いただけなのに、彼ははつとしたようすに動きを止め、ぎこちない動きで俯いてしまう。何か気に障ることでも言つてしまつたのかと思ったら、顔を上げた彼はぱつが悪そくに額にかかつた髪をかきあげて皮肉気な笑みを浮かべる。

「ははつ……。いえ、俺が用事があつた訳じゃなくて」

そこで言葉を切り、顔を間近に近づけられる。うつとつすむよつな漆黒の瞳に真剣な光を帯びて私の瞳を覗きこむ。

「あなたが落ち込んでいるようだったので、ゲーセンにでも行けば気持ちを紛らわせられるかと思つたんですよ……」

口元に手を当てて、言い訳するように言つ彼の瞳が優しい光を宿していて、胸に温かいものが込み上げてくる。

私が落ち込んでいるからお店から連れ出してくれたの ？

そういえば 秀先輩の事で悲しかった心が、今は彼の行動の奇怪さに戸惑つて、すっかり失恋のことを忘れていた。

その時になつて、ずっと気つかかっていた違和感の正体に気づく。

「あなた、もしかして……」

至近距離にある彼の顔をさらに一步近づいて覗きこみ、バラバラになつていていた記憶のパズルがかちりとはまる音がする。

そうだ。見覚えのある顔だと思っていたのは、初めてカフェ・ブルーベルに行つた時、私と話しているオーナーに声をかけてきた従業員の人だつたからだ。

えつと、確か名前は

「たつみ、さん……？」

私の声に、たつみさんはぴくっと肩を揺らして星空のよつたな漆黒の瞳を大きく見開く。その瞳の奥には、焦がれるよつたな熱と何かを強く求めるよつたな光があつて、掘まれていた手にぎりゅうと力が込められる。

あれ、違つたのかな……？

私が首を傾げ尋ねよつと口を開くと、ぽつりと口に、惑いがちな声が聞こえる。

「どうして名前……思い出したんですか……？」

「えつと……オーナーが確かあなたのことたつみさんつて呼んでましたよね？ 違いましたか？」

私が困ったようにたつみさんを見上げると、一瞬鋭く瞳が光つて、宿っていた熱がすっと引いて涼やかな瞳になる。

「ああ……そんなことがありましたね」

たつみさんは皮肉気に笑うと大きく息を吐いて、綺麗な笑みを浮かべる。

お店からずっと掘まれていた手を離して私の正面に立つた辰巳さんが小首を傾げて私を見下ろし、やれやけの前髪が瞳の上で揺れる。

「自己紹介がまだでしたね。俺の名前は辰巳 かなで 奏です。よひじへ、

羽鳥さん

「あっ、はじめまして。私は羽鳥……って、あれ？」

差し出された手を掘もつとして、辰巳さんをぱよっと振り仰ぐ。

「どうして私の名前を知っているんですか……？」

喫茶店で何度も会っているとしても、名前を教えた覚えはなくて怪訝に見上げると、一瞬、寂しげに顔を曇らせてくすりと笑う。

「あなた、常連のお客様ですし。虎沢オーナーから聞きました

「あっ、そうなんですか……」

もつともな理由に納得して、警戒したのが少し恥ずかしくて俯きながら改めて差し出された手を握る。

辰巳さんはふわりと薫るような妖艶な笑みを浮かべて、私の手を握った。

「では氣を取り直して、羽鳥さんのゲームセンターと行きましょうか」

「えつ、えつ……一?」

また手を強引に引かれ、ゲームセンターの奥へと足を踏み入れた。

第6話 愛を奏でる天使 強引な人（後書き）

人物紹介
辰巳 奏

力フェ・ブルー・ベルのイケメン従業員

第7話 愛を奏でる天使 ガラスケースの秘密

店内のBGMと大音量の機械音に耳が痛かったのは最初のうちだけで、お店の中にはいつに耳を塞ぎたくなるような騒音はぜんぜん気にならなくなっていた。

「ゲーセンといえば、まずはJOJOキャッチャーですね」

そう言われて連れて行かれたのは店内入り口付近のJOJOキャッチャーコーナー。ぬいぐるみは小さいものから大きいもの、ぬいぐるみ以外にもフィギアや時計、香水、お菓子まであって、どんなものがあるのか眺めているだけでも楽しめた。

「あー、Jの猫……」

通り過ぎようとしたJOJOキャッターのガラスケースに手をついて中を覗きこむ。中に並べられているのは、だるまみたいな体型に短い手足、愛嬌のあるタレ田のメタボ猫のぬいぐるみ。

一年前から私の部屋に居座っている三毛柄のメタボ猫と同じ種類のぬいぐるみに、つい見入ってしまう。

「何か気になる物がありましたか？」

立ち止まつた私に辰巳さんが振り返つて聞いてくるから、私は頬をかいて苦笑する。

「いえ……持つていいぬいぐるみと同じのがあったので」

「これですか？」

ガラスケースの中を覗きこむ。

「CDFOキャッチャーはやつたことがあるんですね？」

「……？ ないですよ？」

断定的な質問に首を傾げた私は辰巳さんはちらりと見て、繋いでいた手を離して機械にお金を入れる。

「やつてみますか？」

「えつ！？」

「アームは最初のボタンで左へ、次のボタンで奥に動きます。猫の脇を狙うのがコツです。大丈夫、やつてみてください」

私の後ろに回った辰巳さんが、ボタンに恐る恐る伸ばした私の手に手を重ねて肩越しに話しかけるから、不覚にもドキドキしてしまう。

なつ、なにこの体勢 ！？

どうしようもない動悸にてんぱつて頭に真っ白になりかけるから、私は無理やり頭を動かす。

「」のドキドキはいきなり真後ろに立たれたからで、体が密着しているからで そんないい訳を頭の中でぐるぐる考えたんだけど、人見知りとか男性が苦手とかそういう理由は思いつかなかつた。

背中に全神経があるんじゃないかっていうくらい緊張して体がこわばつてしまふ。だけど

「あつ……」

ガラスケースの中で、アームに持ち上げられたメタボ猫が宙に浮

かびぼてんつと落ちる。落胆の声を上げて、ガラスケースの中に真剣なまなざしを向ける。

初めてやつたUFOキャッチャーでぬいぐるみがもうひょっとで取れそうだったから、気持ちが高ぶつて。

「あー、おしかつたですね」

その声に思わず振り向いたら、肩越しに花が綻ぶような笑みを浮かべている辰巳さんと視線があつてしまつて、かあーっと顔が赤くなるのが自分でも分かつて動搖する。

「そう、ですね……」

ぱつと視線をそらして、ガラスケースの中の落ちそつた場所に移動した白いメタボ猫を見つめ、しゅんとする。

初めてやつたのだから取れるとは思つていなかつたけれど、手の届きそうな場所に来たのに手が届かないのがもどかしくて、諦められなくてその場に立ちつくしていると。

「ちょっといいですか？」

辰巳さんに言われ、ガラスケースの前から横へと移動する。じゅらっとお金を入れて、慣れた手つきで操作ボタンを押す辰巳さんの瞳は真剣で、ガラスケースの中のメタボ猫じやなくて、彼の表情につい見入ってしまう。

悔しそうに唇をかんで、それからぱつと少年のよつに顔を輝かせるから、辰巳さんからガラスケースに視線を動かすと、アームに引っ掛けた白いメタボ猫が落ち、落ち口に引っ掛けっていた白いメタボ猫に当たつて二匹の猫が落ちていった。

取り出し口の前にかがみ一匹の白いメタボ猫を取り出した辰巳さ

んが、ふわりと薫るような妖艶な笑みを浮かべて私に差し出すから、心臓が早鐘を打ちはじめる。頭の片隅で微かに警戒音が鳴り響く。

「じゅぞ」

「えっと……」

私を見つめる瞳に言い知れぬ熱が宿っているから、ドキドキして言葉に詰まる。

「受け取って下さー。羽鳥さんのためにとったんですから」

そんな風に言われたら受け取らない訳にはいかなくて、恐る恐る手を伸ばしてぬいぐるみの一つを受け取る。

「ありがとうございます」

わざと胸の前でぬいぐるみを抱きしめて、心の底から感謝を述べる。手の届かないと思っていた存在が腕の中に確かにあって、愛しさに胸がいっぱいになつて瞼を閉じて頬を綻ばせる。

「じゅぞじゅぞ」

顔を上げると、辰巳さんは手に残ったもう一匹のメタボ猫を顔の前に掲げてから、すでに一匹の猫を抱える私の腕の上にぽんつと置くと、少年のようなあどけない笑顔で笑うから、とくとくと胸が跳ねる。

私は腕の上に乗せられた白猫を落とさないようつたずねみ、辰巳さんは差し出す。

「一つだけでじゅぞぶん嬉しいです。だから一つは辰巳さんのお家

に飾つて下さい、お揃いですね」

ただメタボ猫を取つて貰つたことが嬉しくて、顔の横でぬいぐるみを動かして笑いかけると、一瞬、辰巳さんが目を見張つてから差し出したぬいぐるみを受け取つた。

「分かりました、ちゃんと飾ります」

畏まつた言い方に笑みが漏れ、慌てて口元を押さえると視線が合う。はにかんだ笑みを浮かべた辰巳さんと一人でくすりと笑い合つた。

辰巳さんはお店を出た時の強引な雰囲気ではなく、優しく私の手を掴んで歩き出した。

「次は、クイズゲームなんてどうですか？」

頷き、手を引かれるまま歩く。辰巳さんのおすすめのクイズゲームをし、レースゲームをして、まだ夕食を食べてない事に気づいてゲームセンターの向かいにあるイタリアン料理店に向かつた。

ゲームセンターとは無縁の生活をしてきた私が初めてゲームセンターに行つたのは一年前。サークルの新入生歓迎会の飲み会と二次会のカラオケに行く間の時間つぶしに先輩達に連れられて行つたのだった。

先輩や同期がゲームセンターで遊ぶ中、私は初めて足を踏み入れたゲームセンターの大音量に戸惑い雰囲気に圧倒されて、同期と一緒に

緒にゲームしている七海から離れ店の外に出た。

外にはたばこを吸つている先輩が数人いたけど、人見知りの私は話しかけるなんて出来なくて、近くで夜風に当たつて一人で立つていた。

すると、私の頬にいきなりふわふわした物が押し当てられる。驚いて振り返ると、ふわりと人懐っこい笑顔を浮かべた先輩がすんぐりむつくりの三毛猫のぬいぐるみを私の頬に押し当てていた。

「ふふつ、驚いた？ 羽鳥にあげるよ、これ」

「ありがとう」」

緊張のせいか、違うもののせいなのか、ドキドキする心臓を押さえてぬいぐるみを受け取つた。

私よりも背の高い先輩は、少し腰をかがめて私と視線を合わせると、心配そうに眉尻を下げて尋ねる。

「ん？ 外にいるなんて具合でも悪い？」
「いえ、あの……」

ゲームセンターが初めてで慣れなくて そんなことすら言えなくてじどうもじどうしている私に、先輩は苛立つたりせず話しかけてくれる。

「たばこ吸つ……つてことはないか、まだ未成年だしな。どうした
？ 何かあつたのか？」

中学からの親友の七海さえ、私が初めてのゲームセンターで戸惑つていることに気づいていないのに、先輩だけが私の不安に気づいてくれて、胸にあたたかいものが込み上げてくる。
きっとその時には、秀先輩を好きになつていたんだと思つ

第7話 愛を奏でる天使 ガラスケースの秘密（後書き）

人物紹介

安孫子 桃花

れいの大学の友達、お団子頭

第8位 愛を奏でる天使 ハートブレーク

ゲームセンターの向かい、細いバス通りに面した建物の一階にあるイタリア料理のお店に入る。

時刻はすでに二十時半を過ぎていて、私はあまりお腹は空いていなかつたけれど、辰巳さんもそつとは限らないから飲食店に行くことになった。

細長い店内は黒塗りの床、白い壁の所々にレンガが埋められ、力 ウンターはチエス盤模様になつていてお洒落な雰囲気。木製のチョコレートブラウンの丸テーブルをはさんだ向かい側に辰巳さんが座つていてる。

メニュー表を広げると美味しそうな写真が載つてて、お腹すいてないとか言いながらエビとカニのトマトソースパスタとラザニアのハーフブレーントライムチューハイを頼んでしまった。

しばらくして料理が出てきて、辰巳さんの前に置かれたのがオムライス風グラタンと大盛りのカルボナーラで、その量の多さに目を見張る。

わあー、男の人つてこんなに食べるんだ。繁々とテーブルに並べられたお皿を眺めて、こんな風に男性と二人きりでご飯を食べるこ とが初めてと気づいて、また驚く。

親友の七海を挟まないで話せる男性なんて数人しかいないのに、人見知り体质で人と距離を置いてしまつ私の側に辰巳さんは一足飛びで近づいてきた。

まるで青空に浮かぶ月のように影もなく側に寄つてきて、それでいて包み込むように見守つてくれるような優しさがあるから、安心してしまうのかもしれない。強引な行動に戸惑うばかりで、男性に対する苦手意識や緊張することも忘れてて、気が付いたら普通

に話していた。

人見知りとか男性が苦手というのも、私の方から距離を置くから相手のことが分からなくて距離が縮まらない のかも知れない。人見知りと言つて他人と距離を置いていたのがなんだか恥ずかしくなつて、苦笑がもれる。

「どうしました？」

笑つている私を怪訝そうに片眉を上げて見る辰巳さんを見上げる。

「初対面の人とこんな風に外でご飯食べるのなんて初めてだから、不思議な感じがして」

店員さんが持つてきてくれたチューハイを一口飲んで苦笑すると、星空の瞳が一瞬揺らいだような気がする。

「そうなんですか……？」

「そう、なん、です。人見知りだし、男性とは本当に親しい人以外とは面と向かつて話せないし……」

お酒は一口飲んだだけで、酔つてもいいのに饒舌になるのは感傷に浸つていてるからなのかも知れない。

親しい人 そう言って頭の中に思い描いたのは、言うまでもなく秀先輩だった。だけど、もう秀先輩とは今まで通りに接するなんて出来そうになくて、顔を切なく歪ませて乾いた笑いが漏れる。

この間、ヤケ酒して酔いつぶれたばかりだという事も忘れて、誤魔化すようにチューハイをあおる。アルコールが一気に体中を廻り、ふわふわしていい気分になつて、へへへつと笑いながらお酒の追加を頼む。

その時、飲み物を何も頼んでいなかつた辰巳さんがビールを頼む

のをぼーとする頭で聞く。

私はラザニアを一口頬張つて、向かいに座る辰巳さんをじー一つと見る。

「辰巳さんつて不思議な人ですね。親しみやすいといつか話しやすいといつうか、今日が初めて話したなんて気がしないです」

ラザニアを食べながら言つと、辰巳さんは出されたビールをぐいっと半分ほど飲んでから、鮮やかな笑みを浮かべる。

「それなら 羽鳥さんのもやもや、俺に話してみるのはどうですか？」

思いもよらない提案にしばらく瞠目し、テーブルの上のお皿に視線を落としてフォークでラザニアをぐさりと刺す。

核心をつかれて胸が切なくざわついて、だけれどもそれが嫌ではなくて、ぽつりと小さな声で話しだす。

「失恋しました……わつき」

血虚的な笑みを浮かべて、傷ついた心に気づかれないようにラザニアをぱくぱく口に運びながら喋る。

「初めて好きになつた人だつたから、とても大切な気持ちで……もつとちやんと言つはずだつたんです。まつすぐに先輩の目を見て言つはずだつたんですよ。それなのに、先輩は私のことどう思つていたと思います？ 羽鳥のことは妹みたいに思つてる つて、完全に恋愛対象外としてしか見られてなかつたんですよ。どうしようもない失恋なんです……」

泣き笑いを浮かべて、へへっと変な笑いをする。

ラザニアから視線を上げると、丸椅子に深く腰掛け姿勢よく座つている辰巳さんが無表情で私を見ていて、だけれども瞳が優しく私を見つめているから、胸に溜まっていたドロドロしていたものがすう一つとじどりかへと消えていく。

もし辰巳さんの顔が痛ましげな表情だつたら、同情されているようで辛かつたけど、気持ちがとても楽になった。

三杯目になるチューハイのグラスを空にした私に、辰巳さんがぐすりと笑う。

「そんなに飲みたい気分だつたのなら、居酒屋にすれば良かつたですね。酒に付き合つてから出来ますよ」

「そうですね……」

大酒飲みと思われたことに苦笑して、あいまいに答える。

「辰巳さんはお酒好きなんですか？」

私に付き合つ様にビールを注文してたから、お酒を飲む方なのかどうか判断できなくて聞いたんだけど、一つ質問するとどんどんと疑問が湧いてくる。

「つとこりうか、辰巳さんはこくつなんですか？ ビール飲むるですから、もちろん二十歳は過ぎてますよね？」

「つかつかくらこ年上だつと思つていたけれど確認のため聞いてみる。

辰巳さんは数回目を瞬き、口元に微苦笑を浮かべて首を傾げる。

「二十歳ですよ」

「同じ年なんですか！？」

驚いた声を上げると、目を見張つてなにか諦めた様な寂しげなため息をつく。

「そうですよ、年上だと思つていたんですか？」

「一十一か一十二くらいかと思つていました。じゃあ辰巳さんは大学生ですか？」

質問責めにする私に少し困った顔をしながらも、辰巳さんは真摯に答えてくれる。

「大学には行つていません。高校卒業と同時にブルーベルに就職しました」

「えっ、そうなんですか？」

高校を卒業したら大学に行くのが当たり前だと思つていて、高校の友達も大学生か浪人生のどちらかが多いから、同じ年で働くこと驚きを隠せなかつた。

辰巳さんは目元に優しい笑みを浮かべて頷く。

「俺の夢はカフェで働く事なんです。だから少しでも多く実務経験を積みたくて大学には行かなかつたんです」

大学に行くのが当たり前だと思つていたのが恥ずかしくて、だけど夢だと言つた辰巳さんの口調は甘美な響きだけれども現実を見据えて着々と夢に近づいているのが伝わつてきた。

目標に向かつて着実に歩いている辰巳さんが、すこく誇らしげで眩しく感じた。

私なんて、理科が得意だからつて理由で薬剤師を目指して、大学

に入ることが当たり前だと思って高校卒業と同時に就職するという考えは全くなかつた。

同じ年なのに、なんだか口せんがすゞしく立派にみえて、へこんでしまつ。

失恋の辛い気持ちはどうかに消えたと思ったのに、違うもやもやが浮かんで気分がへこんでしまう。

「追加、頼みますか?」

思わず頷いてしまって、くすりと小さな忍び笑いが聞こえて顔を上げる。辰巳さんが星空の瞳を和ませて私を見つめる。

「どんな形で夢を追うかは人それぞれです。俺はたまたま高校卒業してすぐだつたけれど、羽鳥さんだつてちゃんと田標の為に大学に通つているのでしょうか？」

私の些細な気持ちの変化に気づいて辰巳さんが言つから、胸がぎゅーっと締め付けられる。

「恋だって そうですよ。羽鳥さんはちゃんと自分の気持ちを伝えられました。先輩だって、羽鳥さんの気持ちを聞いて嬉しかったはずですよ」

告白現場にいたわけでもないのに自信満々にそんなことを言つた、自分の瞳が泣きそうに揺れる。

「どういふ事もなんかありますよ。よく、頑張りましたね」

一つの言葉に慈しみが込められて、ぽろつと瞳の端から涙が

流れ落ちた。

もう涙なんて枯れるほど泣いたと思っていたのに……
私の想いは無駄なんかじやなかつた て、誰かに言つてほしか
つた。

今一番欲しい言葉を、辰巳さんがくれた。

肩を震わせて泣く私の頭を、辰巳さんが温かくて大きな手で静か
に撫でていく。最後の一滴が流れ落ちるまで、ただ優しく頭をなで
続けてくれた。

第9話 レシュノルティア れいの場合

合宿の最終日。失恋して落ち込んでいる私に気づいて連れ出してくれたのが、辰巳さんだつた。

行動は強引なのにちょっとした仕草に思いやりがあつて、私を見る瞳に優しい光を帶びているから、いつもだつたら緊張したり男性に対する苦手意識から話す事も出来ないのに、辰巳さんとは友達みたいに普通に話すことが出来ていた。

男性なのに男性つて意識する「」ことがなくて、だから自然と話すことが出来たのかもしねりない。

心にもやもやしていた気持ちを聞いてもらつて、「頑張つたね」って言つてもらつて、すぐ安心して泣いてしまつた私に、嫌味一つ言わずに、泣きやむまでずっと優しく頭を撫でてくれていた。

強引だし、見た目はクールでとつつきにくい感じがするのに、実は優しくて。

心を穏やかにする言葉をくれる人で。

私が心を許すには十分すぎるいい人だつたから。

泣きやんだ私に、辰巳さんはどこから取り出したのかハンカチを貸してくれて、夜遅いからと家まで送つてくれた。

「遅くなつてしまつて申し訳ありません」

「いえ、私こそ送つてもらつちゃつてすみません」

私のアパートの前まで送つてもらつて恐縮して頭を下げる、辰巳さんはふふつと皮肉気な笑みを浮かべる。

「いいんですよ、俺が連れまわしたんですよ。それに、俺の家もこの近くなので」

「やうなんですか？」

顔を上げて聞いた私に、辰巳さんは田元を細めて。

「やうなんですよ

今日何度もなるか分からないそのやう取りに、ビラからともなく笑みを浮かべる。

笑いが収まった頃、居住まごを正面に立つ辰巳さんを見

る。

「今日は本当にあつがとうございました」

改めてお礼を言つていなごとに辰巳にて、頭を下げる。

「どういたしまして」

辰巳さんは田元を和ませてふわっと微笑んだ。

「また、お店に来て下さこね」

「はい」

「お休みなさい」

「おやすみなさい」

そう言つて街灯と月明かりに照らされた夜道を歩き出した辰巳さんの背中をしばらく見送つて、アパートの二階へと続く階段を駆け上つた。

「の田まで、ほとんど辰巳さんのことを知らなかつたのに、私の

中で辰巳さんは友達といつポジションにすっかり落ち着いて信頼できる人になっていた。

三日後。大学に用事があつて、学校に行つたついでに図書館で休み中のレポートに必要な参考書を借りて、十一時少し過ぎた時間にカフェ・ブルーベルへと向かう。

学校がある期間は帰りにコーヒーを飲みに行くぐらいだけど、今みたいな夏休みで講義がない時期はランチを食べて、少し勉強したり読書したりしていくのが定番になっていた。

夏場はアルバイトで忙しくて、ランチを食べに来るのはすこく久しぶりだった。

黒塗りの縁のガラス扉を押しかけると、扉の上部に掛けられたパイプチャイムが涼やかな音色を奏でる。

「いらっしゃいませー」

八十席の店内にはオーナーの他に三人の従業員がいて、鈴の音に一斉に声が上がる。

店内にはランチ目的のお客がぱらぱら入っている。

私は従業員が案内に来る前に、一人で来る時の定位置となる絵の描かれた壁側、窓際の二人掛けの席へと進む。

椅子に座つたのとほぼ同時にテーブルにお冷の入つたグラスが置かれ、顔を上げると半袖の白いYシャツに黒ズボン、腰に黒いロングエプロンを巻いた辰巳さんが立つていて、警戒心を完全に解いた顔で微笑む。

「「んにむか」

「こりつしゃいませ。」んにむか、羽鳥さん

笑い返してくれた辰巳さんのトレーデマークのハーフアップされた髪の毛を見て、伸ばしているのかな なんて考える。

「「」注文はお決まりですか？」

辰巳さんがお冷を運んできたトレーンチを脇に持ち、営業スマイルで尋ねてくるから、慌ててメニュー表を開かずに注文する。

「今日のランチってなんですか？」

「ペンネパスタのカルボナーラでいいります」

「じゃー、それをお願ひします」

テーブルの上に腕を乗せて、頭で注文を考えながら辰巳さんを見上げる。自称常連と思つてこるくらいだからメニューはほとん覚えているわけで、メニュー表を開かずに注文することが出来る。ただメニューは時々変更になるから、注文後、料理が運ばれてくるまでの間に眺めたりする。

「お飲み物は何になさいますか？」

「……つ

聞かれて、おすすめブレンドと並んでと開いた口を止める。戸惑いがちに辰巳さんを見上げて。

「あの、以前オーナーに試作品のブレンドを頂いたんですけど、それってありますか？」

試作品の言葉に辰巳さんの片眉がぴくっと動いたのに気づいて、慌てて付け加える。

「あっ、なければいいんですつー」

ランチセットのドリンクは基本コーヒーならどの種類からも選べるんだけど、試作品はさすがに無理かなと肩をすぼめて返答を待っていると、掠れた小さな声で辰巳さんが聞き返す。

「試作品つー……もしかしてブルーミーンのことですか……？」

「はい」

頷いた私に、一瞬、眉間に皺を深く刻んだ辰巳さんは、直後には完璧な営業スマイルで。

「オーナーに確認してきますので、しばらくお待ちください」

丁寧に頭を下げてカウンターに戻つていくから、眉間の皺は私の見間違いかと思つてしまつた。

しばらくして戻つてきた辰巳さんに大丈夫と言われ、私はまたあの美味しい「コーヒー」が飲めることにうきうきして、その時辰巳さんが私をどんな顔で見ているかなんて気づきもしなかつた。

料理が運ばれてくるまでの間、私はさつき図書館で借りた参考書を全部机の上に出し、ルーズリーフを出して課題に取り掛かる。初めてすぐに店内にきいた冷房で体が冷え始めたのに気づいて、カーディガンを取り出して半袖の上に羽織る。

ルーズリーフには調べることが箇条書きされていて、それを見ながら参考書を端から読んでいく。しばらくして。

「お待たせ致しました」

その声に顔を上げると、辰巳さんが立っていてふわりと薫るよつな綺麗な笑みを浮かべる。手にはトレンチを持つていて、私は慌ててテーブルの上に広げた参考書とルーズリーフをまとめて鞄の中に片付ける。

それと入れ違いにテーブルに置かれた仕切りの付いた磁器の白いランチプレートにはペンネのカルボナーラとグリーンサラダが綺麗に盛り付けられている。

ホワイトソースと卵の匂いに混ざつてフローラルな香りが漂い、コトツとソーサーに乗ったコーヒーをカップが置かれる。

「あっ……ありがとうございます」

あの日、オーナーが出してくれたブルームーンブレンドを飲んだ瞬間、胸に渦巻いていた苦しい気持ちを吹き飛ばしてくれた。飲んだことのない不思議な味わいで、試作品じゃなくてちゃんとしたメニューになつたらしいのにと思つほど美味しかつた。

そのコーヒーをもう一度飲むことが出来て、逸る気持ちにカップに手を伸ばし、香ばしさの中に混ざつたフローラルな香りを肺いっぱいに吸い込んでからゆつくりと口をつける。

喉の奥に広がる程良い酸味と、コクと甘さのハーモニーにうつとりと目を細める。

「お味はいかがですか？」

オーナーにも聞かれた質問に、私は同じように答える。

「美味しいです。今まで飲んだどのコーヒーよりも美味しいくて、

私、好きです「

カップの中に揺らめく茶色い液体に視線を落として言つ。辰巳さん
の気配が和らいだ気がして仰ぎ見ると。

「じゃつくりお過いしください」

マニュアル的なセリフと動作でカウンターに戻つて行つてしまつた。

またしてもこのフレンドを作った人のことを聞きわびれてしまつて悔やむけれど、まあいつか、と思う。

コーヒーを置き、店内にぐるりと視線を向ける。

従業員はみんな男性で、「うちの従業員」というオーナーの言ひ方からしてフレンドしたのがオーナーではないことは分かっている。辰巳さんでも……ないのかな。そうしたら、他の従業員だとしたら、作つた人が誰か教えてもらつたとしても人見知りの私が話すことは出来ない。

きつとこの中の誰かなんだな そんな風に曖昧にするほうが、理想像が崩されなくていいように感じた。

ブルームーン ネットで調べたら、そのまま満月のことだったり、カクテルや薔薇の名前だったり。極めて稀な事、滅多にないという意味で使われる言葉らしい。

青い薔薇の別名がブルームーンで、青い薔薇を作ることは不可能とされていることからブルームーン=不可能つていう意味が含まれる。

そのことを知つて、なんだか既視感を覚える。

初めから不可能だと思っていたんだ だけど。

人工的に青い薔薇が作られるようになつて、不可能から奇跡という意味に変わつたという。

不可能だつた恋、だけど奇跡だつた恋

私の初恋、そして失恋を慰めてくれるような味。心をとろかすような馥郁たる香りに、ブルーミーンブレンドに惹かれない理由がなかつた。

ランチを食べながらそんなことを考えて、ふと視線をテーブルの脇に置かれた小型のスースケースに移し、口元をほじるばせた。こんな穏やかに気持ちになれたのは 本当にこのコーヒーのおかげなんだ。

第10話 レシュノルティア 笑顔の理由

食べ終わったランチ皿をテーブルの端に寄せ、再び参考書とルーズリーフを取り出して勉強を始める。参考書の一つを手前に引き寄せたばらばら捲って、目的のページを見つけてシャーペンを握つてルーズリーフに書き映す。

半袖の上に着たカーディガンの襟元を引き寄せ、前を合わせる。夏場に冷房のきいた喫茶店で長袖のカーディガンを着こんでコーヒーを飲むつていう図はどうかと思つけれど、家や図書館で勉強するよりもカフェcafeが落ち着くから。

それになにより、コーヒーが美味しい落着くこに来ずにはいられなかつた。

時々、参考書をめくる手を止めてコーヒーを飲む。カップが空になつたことに気づいて顔を上げると、ちょうど近くを通りかかった辰巳さんと視線が合つ。

トレンチの上に乗つている下げる食器をカウンターに置くと、近づいてきた。

「食器、お下げしてもよろしいですか？」

「はい」

「夏休みの宿題ですか？」

器用に片手で持つたトレンチに食器を下げる辰巳さんに聞かれ、くすりと笑う。

夏休みの宿題 といつ響きが懐かしくて。

「やうですよ」

「どこか旅行にでも行かれるんですか?」

唐突な質問に首を傾げて、辰巳さんの視線の先を追つてテーブルの脇に置かれた小型のスーツケースを見ている事に気がついて苦笑する。

「いえ、旅行じゃないです」

その言葉では説明不足に感じて付け加える。

「サークルの部室に置き忘れていた合宿の荷物を取つてきたんです
「置き忘れていた荷物……」

辰巳さんは怪訝に聞き返し、私はスーツケースを見つめてふわりと口元を綻ばす。

遡ること二日前 合宿の次の日。

お酒のせいなのか、失恋して泣いたせいなのか、体がだるくて。だけど重いしこりが解けて軽くなつた心でバイトに向かい、帰り支度をしている時に携帯のバイブレーションが鳴る。

カフェ・ブルーベルで秀先輩の電話を無視してから約一日、ずっと携帯電話に触れていなかつたことに気づいて慌てて携帯を開く。着信は七海からのメールだつたけど、それよりも早い時間 正確には十三日に着信が二件とメールが一件あつて、どれも秀先輩からだつた。

秀先輩の電話を無視してしまつた事に少しの罪悪感を覚え、躊躇

いながらメールを開く。着信は無視した一回目の着信の数分後、メールはそのすぐ後の時間だつた。

『From：犬飼秀先輩

subject：無題

本文：電話にでないから、心配でメールした。

学校に鞄を置き忘れていたから届けようと思つたんだけど、今は俺に会いたくないよな……

鞄は部室に置いたから安心して』

メールを読んで初めて、合宿に持つていったスープケースを食堂の前 秀先輩と話していた場所に置いたまま帰つてきてしまったことに気づく。

秀先輩から一回も着信があつたのは、鞄を忘れたことを伝えようとしてくれてたんだ。それなのに私つたらずつと電話を無視して。

秀先輩の気遣いにちくりと胸が痛む。

カーソルを動かすと、メールにはまだ続きがあつた。

『さつきは『めん……ありがとう。羽鳥が俺のことを好きでいてくれたなんて全然気づいていなくて、正直驚いたけど嬉しかつた。

羽鳥の気持ちには答えられないのに、今まで通り仲の良い関係でいられたらしいと思うのは俺のわがままかな……？』

秀先輩の言葉がじわりと胸に広がっていく。

失恋してしまつた

私の気持ちに秀先輩が答えてくれることはなかつたけれど

ちゃんと気づいて、受け止めてくれた。秀先輩なりに私との関係を『仲がいい』と思つてくれてて、これからもそうでありたいと思つてくれたことが嬉しかつた。

失恋してもう普通に話す事も出来ないとかと思つていたけれど、

秀先輩が今まで通りを望むのなら、それもいいか と思つ。

秀先輩が私に優しくしてくれるのが、妹みたいに可愛がつてくれてたからだつていう事実は寂しい。

私の好きと、秀先輩の好意は違うもので、その気持ちが交わることはないのは切ないけれど。

たとえ両思いになれなくても、今まで通りでいられるのなら、話す事も出来なくなるよりはいいと思つた。

秀先輩があまりに優しいから、このままでいいと思つた
失恋した夜からずっと胸にくすぐつていた重たい気持ちがすうー
つと爽やかな風に吹かれたようになくなつて、清々しい気持ちにな
る。

辰巳さんが頑張つたねつて慰めて励ましてくれたおかげもあると思つ。

私は勇気を出して、携帯の着信履歴を押して電話をかける。
プルルル、プルルル……と耳に小気味良い音が響く。
しばらく鳴つた後。

『もしもしし……?』

耳の奥で響く大好きな声に心を震わせて、瞼を閉じる。それから瞼をあけて言う。

「秀先輩ですか？ 羽鳥です」

緊張して声が震えるけれど、ギクシャクした言い方にならないよう心がけて、精一杯明るい声を出す。

「電話出れなくてすみません。鞠ありがとうございます、明日、取りに行きます」

『……つ

少しの沈黙の後、ふわっと温かな笑い声が聞こえて、胸に熱い物が込み上げてくる。

『メールちゃんと読んだんだな……安心したよ』

安心した その言葉が私自身を語り切るよひに感じて、秀先輩の優しさに胸が詰まって泣きそうになる。

こんなに好きな気持ち そう簡単になくせない、と思つた。秀先輩のことがどうしようもなく好きで、ずっとずっと、側で笑顔を見ていたいと思つてしまつ。気持ちを伝えるだけで精一杯だったはずなのに、失恋したのに。失恋したのに。欲深い自分に苦笑する。

「はい、『迷惑かけてすみません』

『いいんだよ。それより……』

そこで一度言葉を切つた秀先輩が、少し掠れた声で尋ねてくる。

『今度、一緒に出かけないか?』

そんな誘いを受けたのは初めてでぱっと顔を輝かせ、それから秀先輩が私のことを妹みたいと思っていることを思い出して、ぬかよろこびにならないように自分で自分で釘をさす。

後輩としてのお誘いなんだ、変に喜んじゃいけない

「はい、大丈夫ですよ。どこか行きたい場所があるんですか?」

嬉しい気持ちを隠して、平静を装いつ。

『うん…… そうだね、詳しい事はメールするよ』
「わかりました。じゃあ、失礼します」

『ああ。 またね、羽鳥』

名前を呼ばれただけで体の芯が震えてしまつ。

電話を切つて机に寄りかかり、はあー大きなため息をつく。座っていたのに緊張でいつの間にか立ち上がって電話していく、額に滲んだ汗を手の甲で拭う。手のひらに握りしめた携帯を見つめて、思わず笑みがこぼれる。

普通に話せた ただそれだけが嬉しくて、秀先輩の変わらない優しさが温かくて、出かけようと誘われたことが心を弾ませる。

「実は」の前お店に来た日は合宿の帰りだったんですね。ちよつといろいろあつて……」

そこで辰巳さんに向けて、あまり悪い笑みを浮かべる。

「慌てて学校を出てきたので鞄を忘れちゃったんですね。で、先輩が部屋に置いといてくれたのを今日取りに行って来たんですね」

いろいろイコール失恋だと気付いた辰巳さんが片眉を上げて心配そうに私を見つめるから。

「はは……、心配しないでください」

両手の指を伸ばしてから汲んで、額にあてる。その動作をゆっくり

りとやつて、口元を和ませる。

「まだ気持ちの整理がついたわけじゃないんです。好きな気持ちは変わらず私の中にあります。でも、辰巳さんに話を聞いてもらつて、すつきりました」

汲んだ手に視線を落としていた私は、ぱっと顔を上げて笑いかけた。

「落ち込んでなんていられないって思えたのは、辰巳さんのおかげです。ありがとうございます」

視線の先で、星空の瞳が大きく見開かれて和んだのを見る。

「俺は話を聞いただけですよ……」

謙遜する辰巳さんに、私は首を振る。

「話を聞いてもらつただけで嬉しかつたです。だって辰巳さんは、私の男友達第一号なんです」

胸を張つて誇らしげに言つて、私はその時の辰巳さんの一瞬の表情の変化に気づいていなかつた。

「友達第一号……」

ぱそつと返された言葉に、えへへつと笑つ。

「こんな風に話せる男の人つていなかつたんですよね。嬉しいなあ、辰巳さんと知り合えて、あつ……同じ年なのに辰巳“さん”つ

て呼び方は変かな。辰巳君か、奏君……とか?」

一人でぶちぶち言つて顔を上げると、辰巳さんがきょとんとした顔を私を見ているから、小首をかしげる。

「ダメ……ですか? 名前で呼ぶなんですか?」

尋ねると、数回目を瞬いてから辰巳さんが妖艶な笑みでにやりと笑う。

「構わないですよ、奏で。それよりも、同じ年なんですから敬語じやなくていいですよ?」

そう言いながらくすりと笑つた辰巳さんは、自分も敬語で話している事に気がついていないのだろうか……なんて疑問に思いながらも、うーんと顎に人差し指を当てるて考える。

「じゃ、奏。私のこいつもトの名前で呼んでいいからね」

「わかりました」

そう言つてなんとも言えない複雑な表情で笑つた奏を、ずっと忘れられなかつた。

第1-1話 レシュノルティア 招待状

私の男友達第一号の辰巳さん じゃなくて奏とは、喫茶店で会うと話すだけの関係。

男友達なんて大げさで、男とか女とか関係なくてようは友人なんだよね。人見知りする私は女友達も両手で数えられるくらいだし、その中で親しいのも数人で、奏は親しい友人の分類にはいる。

喫茶店に行くと必ず話しかけてくれて なぜか他の人と一緒の時は話しかけてこなくて、一人の時だけなんだけど 暇を見つけては話し相手になってくれる。

「喋つてて大丈夫？」

そう聞くと必ず、振り返つてカウンターにいるマスターを見て肩をすくめる。

「大丈夫ですよ。でも……そんなに気になるのなら、早番の口でお茶して頂けますか？」

薰るような笑顔でお茶に誘われて、私はくすりと笑う。

「コーヒー飲みに来ているのに、またお茶するの？」

笑つて言つと、奏は首を傾げてそうですね……と口の中であざき。

「では、また夕飯と一緒に食べに行きましょ。今度は居酒屋なんてどうですか？」

完全に大酒飲みと誤解されていることに苦笑して、眉尻を下げる。私には同じ年だからと言つて下の名前で呼び捨てにさせて敬語もやめさせたのに、奏は相変わらず敬語で話しかけてくる。だけその話し方は、わざと敬語にしていると言つよりは元からそういう喋り方なのか、職業柄沁みついてしまった喋り方に思えて、嫌な気はしなかつた。

そのくせ

「れい？ 聞いていますか？」

名前はしつかり下の名前で読んでくるから、照れくさくて困つてしまつ。

「あつ……うん、聞いてるよ。えつと、奏はいつ早番なの？ 私は夕方空いてるのはね……」

言いながら、誤魔化すように鞄から手帳を取り出して八月のページを開いて絶句する。

「あー……」

苦笑した私の頭の上から、奏がテーブルの上に広げた手帳を遠慮がちに覗きこんで来る。

今日は八月二十三日で、残りの八月はびっしり予定が埋められてる。まず明日から五日間は連續でバイト、二十九日はサークルの日でサークルが終わってから実家に帰つてこつちに帰つて来るのは三十一日の予定。

「予定つまつてますね」

手帳から視線を上げた奏に言われ、頷く。

夏場はとにかくバイト三昧で忙しい。週一回サークルもあるし、課題も少ない訳じゃないから、バイトから帰つてくれれば夜は勉強しなければならない。逆に言えば、自分次第でいくらでも時間は作れると言つこと……

「今日はバイト休みだから大丈夫だけど、奏は今田は早番じゃないよね？」

基本、奏は一日通しで仕事で、早番は週に一回あるかないかだった。

「ええ、今日は違うので終わるのは二十一時すぎると思います」

渋い顔で言つ奏に、今日を逃したらしづらへ予定が合わない」とを察する。

「いいよ、二十一時すぎでも。その頃、また来るよ」

私は言しながら腕時計にむりむりと視線を向け、空になつたコーヒーカップをソーサーに置く。

「そんな遅い時間に悪いですよ……」

「大丈夫だよ」

「ですか……？」

へりつと笑つた私を、奏は怪訝そうに眉根を寄せ、はあーっとため息をつく。

「じゃあ、オーナーには伝えておきますから少し早めに来て店内で待つて下さい。外で待たれるのは心配で落ち着きませんから」

奏の心配症に、そんな心配しなくても子供じゃないんだから大丈夫なのって思つ。

「うん……」

上田使いで奏を見ていると、奏の瞳がきらりと鋭く光る。

「あっ、うん、わかった。そりあるから」

慌てて同意する私を見て、奏は瞳から威圧感を消して尋ねる。

「ところで、れいは何のバイトをしているんですか？」

「『ねんつー』

奏の声に被さつて、私は叫ぶ。腕時計を見ながら慌てて反対側の椅子に置いていた鞄に手を伸ばして立ち上がる。

「もう、ちょっと行かないとい……これから用事があるから、また後でね

私は慌てて会計を済ませてお店を飛び出した。

今日は課題を一緒にせざるために七海や学科の友達と学校で会う約

束をしていて、学校に行く前にコーヒーだけ飲みにお店に寄ったのだった。

みんなとの待ち合せは十三時なんだけど、その前に七海と学食でランチを食べる約束をしてくる。待ち合せの十一時まであと十分しかなくて、私は早足で学校に向かう。

八月のお盆を過ぎてから少しすつ涼しくなると毎日残暑が厳しく田中も夜も、汗ばむ暑さだった。

照りつける太陽から顔を隠すように額に腕を当てて校門をくぐり、まっすぐ伸びる並木を抜けて学食に入る。

すでに七海は来てて、全面ガラス張りの窓側の席に座っている。私は気づいて手を振る。

「れいー！」

「ごめん、遅くなつて」

「ちよつとでしょ。お毎買いに行つたか」

七海は学食の壁掛け時計を見てにくすりと笑う。席から立ち、食堂入り口にあるショーケースと券売機の方へ向かう。

夏休み中は本当は食堂も休みなんだけど、この時期は補講があるので食堂も空いている。

私は椅子の上に鞄を置いて財布だけ取りだすと、七海と一緒に券売機に向かう。

「課題終わりだつ？」

日替わりランチや定番のAランチ、Bランチが並んでいるショーケースに視線を向けながら七海に聞かれ、私は肩をすくめる。

「やつてはいるナビ、バイトが忙しくてなかなか……」

「例の夏場限定期のバイト まだ続けるの?」

「うん」

頷いて券売機にお金を入れてボタンを押す私の横で、七海は呆れ半分、感心半分でため息をつく。

「よく続くね、それにせんせん焼けてないのが私には不思議でしょ
うがなによ……」

券売機から出てきたお釣りを取るためにしゃがんだ七海に視線を
向けて肩をすくめる。七海も同じようにし、一人で受取カウンター
へと向かう。

「それよつせ……」

食券をカウンターに出した七海がちらりと私を見て遠慮がちに言
う。

「先輩とどうなったの?」

私だけに聞こえるような小さな声で七海が言つ。
学食には私たち以外にもちらほらと人がいる。話が聞かれる程側
にいる人はいないけど、七海は氣を使って、秀先輩 じゃなくて
先輩と言つた。

私も七海も、食堂のおばちゃんが出してくれた日替わりランチの
トレーを受け取つて、席の方に視線を向けて歩きながら小声で話す。

「う……ん……」

躊躇いがちに言葉を切つた私に、七海はちらりと視線を向けてか

ら、静かに席に座る。

七海には合宿の次の日にメールで秀先輩とどうなったのか聞かれただけど、会った時に話すと返信をしていた。

合宿中に告白するという私の決意を知っているし応援してくれて、バスを降りた私と秀先輩が一緒に歩いて行くところを見ていた七海は、とても気になつていていた。

失恋した なんて言いくらいけど、ちやんと言わなきゃいけないよね。

「実はね……」

ランチに視線を落したまま、あの日秀先輩と話したことすべて伝え、ゆっくりと視線を上げて向かいに座る七海を見る。

「……とにかくで、失恋しちゃいました」

眉尻を上げて笑うと、七海が眉根を寄せて私をじーっと見据える。

「そつか、上手くいくと思ってたんだけどな。でも……その割には元気ね、れい」

心配そうに私を見る七海に、苦笑する。

口ロッケを食べて箸を置き、手を組んで窓の外に広がる青空を見る。

「うーん、直後はね、すごくショックだつたし悲しかつたけど、いじつこりあつて気持ちの整理がついたの」

「ふーん……すつきりした顔してるものね」

七海が澄んだ瞳で私を見つめ、くすりと笑つ。

「告白も、無駄じやなかつたみたいね」

その言葉に、えつと七海に視線を向ける。

「れいせ、合宿の前に言つてたでしょ。気持ちを伝えるだけでも私には大進歩だつて、この恋で成長出来たらいいつて」

頬杖をついて喋る七海が、口元を綻ばせる。称賛するよひに田を細めるから、なんだか心がくすぐつたくなる。

だけど

「やうだね……」

私は微笑み、七海を見る。

初めての恋 秋になつたら秀先輩は引退してしまい、そうした接点はなくなり会つこともなくなつてしまつ。それが嫌で告白を決意して。

結果は振られちゃつたけど、気持ちを伝えることが出来ただけでも私にはすゞことなんだ。

望んでいた答えは貰えなかつたけれど、秀先輩がただの後輩よりももつと親しく私のことを思つてくれていたことが分かつただけでも 無駄なんかじやなかつた。

一瞬で私の心のしこりを解きほびく言葉を言つてしまう七海のことを、正面からまつすぐに見る。なんて良い友達をもつたんだろう。私はおもわずにこにこしてしまい、怪訝に私を見る七海の視線に気づいて、ランチを食べて誤魔化した。

私がランチを食べ始めたのを見て、七海も箸を持つて味噌汁を飲み。

「で、どうするの?」

お椀を置いた七海に聞かれ、私はきょとんと首をかしげる。

「どうするって……?」

「秀先輩のことだよつー。」

びしつとお箸で指されて、たじろぐ。

「先輩のこと……?」

いまいち何を言われているのか理解していない私に気づいて、七海が大きなため息をついて話しだす。

「振られて、気持ちの整理がついたって言つてたけど、諦めるの? つてか諦められるの? もっと積極的に行つたら、これから好きになつてもらえるかもよ?」

あらためて聞かれて、私は少し考えてから自分の気持ちを正直に話す。

「秀先輩のことは……まだ好きだよ。振られても気持ちは変わらない……」

「なら……」

「つ

ぱっと顔を輝かせて七海が急かすように咄嗟から、私は首を横に

振る。

「でも、両思いになつて付き合いたいとか、そういうのはないの。

先輩は私のこと妹みたいな存在つて言つてくれて、引退しても時々会えるなら、それでいいの」

「それって辛くない……？」

七海に聞かれ、私は考えて肩をすくめる。

「分かんない、辛いかもね。でも、秀先輩を好きな気持ちはそんな簡単に消えないと思うから、今はこの状況で満足だよ」

「れいの言つことも分かるけどさあー、見込みがない恋は諦めたら？」

？ そう言つ時は新しい出会いとかがあれば吹っ切れるんじゃない？」

七海がそう言つのは私のことを心配してくれてだつて分かるけど、私は恋とかそんなに興味がないっていつていうか、いまはこの気持ちを抱えるだけで手一杯だからなあ。

私は苦笑して。

「そうかなあ……」

つて、曖昧に相づちを打つた。

昼食後、図書館に行き桃花ちゃんなどの学科の友達四人と合流して課題をやる。お喋りしたり参考本を探したりして、あつという間に閉館の十七時になってしまった。

みんなで駅に向かって歩きながら、七海が私の予定を聞いてくる。

「れい、来週の水曜日つて予定空いてる？」

「来週つて三十一日？……なら空いてるかな？」

「予定もあるの？」

曖昧に答えた私に、七海が片眉を上げて聞く。

「うん、一十九日から三十一日まで実家に帰る予定なんだ」「三十一日には戻つて来るんでしょ？ ならうどいわ。夜、予定明けといでよ」

「ん？ うん、いいよ」

ちよつとひまつて言葉になにか引っ掛かるけど、私は頷いて三十一日は早めに帰つてくることを決めた。

駅でみんなと分かれた後、側の本屋に少し寄つてからアパートに戻り、二十時四十五分くらいにカフェ・ブルーベルに向かう。

最初は夕飯の約束だつたけど、遅い時間になつたし、二十一時まで仕事をしている奏は当然夕方くらいに休憩が入つていてその時すでに夕飯を食べているだらうと思う。だけど、食べないでいてくれてるかも……と思うと夕飯を食べていののか迷つて、結局食べなかつた。

お店の中に入ると、閉店間際のにお客さんがまだ残つていた。奏を探して店内をぐるつと見回すけど見当たらなくて、どうしようと立ちつくしていると、側にいた短い髪をつんつんと立てた店員さんが近づいてくる。

「申し訳ありません、お客様。まもなく閉店でラストオーダーは終了してしまつたんですよ」

奏と同じく高い店員さんを見上げて、緊張で背中がピシピシする。お客として来たのなら、別に緊張なんてしないで注文できるのに、今はお客として来た訳じゃないから人見知りで緊張して上手く話せなかつた。

「あの……えつと、かなつ……辰巳さんの……」

男の人と話す時はだいたい七海が間に入つてくれるから、こんな風に男性と話すのはすゞい久しぶりで、余計意識して目を見れなくなる。

自分で何が言いたいのか分からなくなつて、かあーっと顔を赤くして俯くと、店員さんが「ああ……」と言つ。

「奏にお客が来るつて言つてたの、君のことかな？」

顔を指さして聞かれ、慌てて頷く。

「君、れいちゃん？」

店員さんは顎に手を当てて言つ。私がもう一度頷くと、彼は私の頭からつま先まで見て「ふーん」とて言つていたずら少年のような顔でにやつと笑う。

そんな風にじろじろ見られたら居心地が悪くて、視線を落とす。

「奏は今お得意さんの接待でちょっと出でるよ。奥で待たせるように言われてるから、こいつち。おこで」

お得意様の接待　？　喫茶店の従業員でそんなのがあるの？　疑問に思いながらも、手招きされて私は慌てて店員さんの後を追つた。

案内されたのは、従業員用の控室で、壁側に縦長のロッカー、中央に簡素な作業テーブルが置かれている。

テーブルの横に置かれたパイプ椅子の一つに座つてしまらくすると、廊下からがやがやと話声が聞こえて、開かれた扉にぱつと顔を上げると男性が一人入つてきて、一気に体がこわばる。

入ってきた男性も、中に私がいるとは思わなかつたみたいで目を見開き、片眉を上げてとんつと扉にもたれかかる。

「君、だれ？」

二十代後半くらいの男性に聞かれて、私は慌てて立ち上がる。

「あの……」

その時、やつや潔内してくれた店員さんがロッカールームに入ってきた、緊張した空気を破るように手を振つて私と男性の間に入つて来る。

「あー卯月さん、この子は秦のお姫さんだよ。ちよつかい出すととばっかりが俺に来るからやめて下れこよ」

からかいつような口調で卯月さんと呼んだ男性に話す。

「へー、秦の姫ね……」

そう言つて卯月さんも私を品定めするように上から下まで眺めて、くすりと笑う。

わー、なんだかすゞぐ居心地悪い……

体を縮めて、すとんと椅子に座る。すると、もう一人、卯月さんの後ろにいた高校生くらいの男の子がロッカーに向かいながら話す。

「秦さんのお姫さん? 珍しいね、秦さんに女性のお姫さんなんて。でもや……」

そう言つて、天使のよつた可憐な笑顔でにこつと笑つて。

「俺達、これから着替えるんだけど」

言いながらロングエプロンの腰ひもをするすると解いて近くの椅子にかけ、こっちを振り返つてシャツのボタンに手をかける。

「そこにいて着替えを見るつもり?」

その言葉にはつと立ち上がる つ

ここは従業員のロッカールームで、この三人が従業員で仕事が終わって着替えに来たことに気づいて、私は慌てて鞄を胸の前に抱きしめて部屋を飛び出した。

閉まる扉の中から、くすくすという笑い声が聞こえる。からかわれたんだって気づいたけど、その時には顔から火が出そうなほど真っ赤になっていた。

はあーっと大きなため息をついて、客席の方で待つていよつと歩き出した時、声をかけられてぱっと顔を上げる。

「れい? 客席にいないと思つたら、こんなところにどうしたんですか?」

見上げると、そこには秦とオーナーがいた。

「えつと、ロッカールームで待つてるよつて言われたんですけど、従業員の方が着替えるみたいなので……」

尻すぼみに声を小さくして言つと、秦とオーナーが顔を見合させて眉間に皺を寄せる。

「あいつ……」

顎に手を当てて秦が低い声で唸る。

どうしたのだろうと見上げるとオーナーと視線があつて、オーナーが苦笑いして肩をすくめる。

「奏は君が来たら従業員ロッカーじゃなくて客席で待たせるように言つていたんだよ」

その言い方が、手違いじゃなくてわざと私をロッカーに行かせたと聞こえて、目を見張る。

入り口で声をかけてきて従業員ロッカーに案内してくれた男性を思い出す。

あの人

卯月さんつて従業員の人から庇つてくれたから良い人だと思つてたけど、ロッカーに案内したこと自体がわざとだつたの！？

私にちよつかい出すととばっちらりが自分に来るとか言つてたのに、私がロッカールームにいれば他の従業員に絡まれるつて分かつてて私を連れていつたの……！？

ひくりと頬を引きつらせて、後ろの従業員ロッカーをちらりと振り返る。

扉越しに、三人の男性の声が聞こえてきてぎゅっと眉根を寄せる。七海いわく　こここの従業員はみんなイケメンだつて言うけれど、なんだか性格が意地悪な人が多い気がして、ますます男性が苦手になりそうだった。

第12話 レシュノルティア コーヒープリンス（後書き）

人物紹介
卯月 元
はじめ
カフェ・ブルーベルのイケメン従業員、二十七歳

照明が半分落とされた客席に座つて待つていると、しばらくして私服に着替えた奏が小走りで掛けてくる。

今日の奏はブルーデニムのジーンズに、白黒ボーダーのTシャツの上に五分丈のグレーのカーディガンを羽織っている。

「お待たせしました」

言いながら、頭越しに扉を押しかけて押さえてくれている奏を仰ぎみると、眉尻を下げてちょっと困ったような顔をしている。

奏が半歩先を歩きながら夜道を進む。

「すみませんでした、俺がいない間に隼人が 従業員がご迷惑をかけたみたいで」

隼人と呼んだのは、あの短髪の人かしら。きっとロッカールームで話したわよね、どんな風に説明したのかな と不安に思つ。

「えつと……大丈夫だよ」

ぎこちなく言つた私をちらつと振り返り、奏が大きなため息をつく。

「うちの従業員はみんな男ですからね、男性が苦手だと言つていたれいはロッカールームなんていられないだろと思つたから客席で待たすように言つたんですけど……すみません、俺がもつとちゃんと

しておけば不愉快な思いをさせないですんだのに……」「

首を触りながら、心苦しそうに言つた秦の気遣いに胸がほかほかとする。

男性が苦手つて言つたのなんて話の流れで一回言つただけなのに、ちゃんと覚えていてくれたことが嬉しい。

秦はいつも敬語でしゃんとしていてあまり口数が多くなくてクールな感じだけど、さりげない優しさがいつも心に沁みる。

しばらくバス通りを歩いて、そいつえはどこに向かっているのか聞いていなかつたことに気づくけど、秦が黙つて歩いているからなんとなく聞けなくてただついて行く。

歩いている道はいつもアパートから学校まで行く道で、このままもう少し行つた所を右に曲がれば私のアパートだと考えていた時、バス通りから横の道に曲がる。突き当たり丁字路の手前のアパートに入つていく秦は、一階の一番奥の扉の前で立ち止まりズボンの中から鍵を取り出して開ける。

私は秦から三歩離れたところで立ち止まる。

「どういだ

扉を押さえて振り返つた秦はそれだけで絵になるほど美しくて、薰るような笑みを浮かべている。

だけどそれよりも　秦のアパートに連れて来られたことに気づいて慌てる。

そういえば、家に送つてもうつた時に近所つて言つてたな　と思いつ出す。

でも、なんで家なのかな……夕飯食べに行くんじゃないのかな？　ていうか、男の人の部屋にこんな時間にお邪魔するなんてどうなんだろう……

頭の中をいろんな思考が渦巻きその場で躊躇していると、秦が困

つたようにくすくすと笑う。

「そんなに警戒しないで下せー」

そう言つた奏がなんだか悲しそうな顔で首をかしげているから、私はぐつとお腹に力を込めて一步踏み出す。

「お邪魔します……」

言いながら玄関に入り、その瞬間、ふわりと爽やかなフローラルな香りが漂つてきて靴棚の上に視線を向けると、刈り取られたラベンダーの花が束ねられ逆さに吊るしてあるのが視界に入りこむ。

「ラベンダー……」

大好きな花 のドライフラワー作りかけ？ に見とれて靴を脱がすにいと、扉を閉めようと中に入ってきた奏が気づいて、「あつ……」と言つ。

「ラベンダー好きなの？」

私が振り返つて聞くと、奏は少し困ったように肩をすくめる。

「俺が……というよりは知人が好きでその影響ですかね……」

歯切れ悪く言つ奏に気づかず、ほくほくと笑みをこぼす。

「私もラベンダー好きよ。爽やかな香りはなんとも言えないし、風にそよぐ姿が清楚で大好きなの。うちにも鉢があつて、いまは遅咲きのプロパンスがまだ咲いているんだ」

呑むされたラベンダーの穂先に指先で触れ、ふふっと笑う。

「これはオカムラサキかな…… イングリッシュショ系は色が濃くて香りがとくに良いわよね。ラベンダーと言つたら代表的なのがこれだけど、私はラバンディン系も好きよ。春先のシルバーに輝く葉色もなんとも言えなく素敵よ」

ベジベジと喋つてしまつたことに気がついて、口元に手を当てる。

「……好きなんですね」

なんだか切ない瞳で言われ、ドキンッとしちまつ。

「さあ、いつまでも玄関ではなくて、遠慮なく上がつてください」

奏に促され、改めてお邪魔しますと言つて靴を脱いで部屋に上がり、出されたスリッパを貸してもらひ。

部屋はワンルーム。玄関からさらに扉を進むと、左手にL型キッチン、十畳のリビングダイニングには一人掛けのダイニングテーブルとお洒落なソファーとラグマット。壁側の本棚には本と瓶に詰められたコーヒー豆がディスプレイの様に綺麗に飾られている。

リビングダイニングには三枚引き違い扉があつて、奥に一部屋あることが分かる。

キッチンカウンターには、見た事もないコーヒーマシンの様なものが置かれている。

本棚の本は「コーヒー や料理の本ばかりだし、豆といいマシーンといい、家でもそういう勉強している事が分かつて感心してしまつ。

室内は綺麗に片づけられていて、私のイメージする男性の部屋とはだいぶ印象が違くて驚いてしまう。

「 どうか、男性の部屋に来たこと自体が初めてだったと気づいて、僅かに頬が紅潮する。 」

「 その辺に適当に座つて下せー 」

そう言つて奏は奥の部屋に鞄を置きに行つてしまつた。

私は鞄を床に置き、ソファーに座る。改めて部屋をぐるりと見回して、茶色を基調にした室内の中に、違和感のある物に目を止める。それは本棚の横、壁に掛けられたハンガーに結わかれた紫色の女性のハンカチ。

あつ……

と思つた時、奥の部屋から出てきた奏が血相を変えてハンガーを背中に隠す。

「 見ましたか …… ? 」

あまりに真剣な顔で聞かれて、私はくすりと肩を震わせて笑う。

「 うん、見ちゃつた 」

肩をすくめて謝ると、奏の瞳が揺れて切なさを帶びるから、その表情で察する。

あのハンカチ、何なんだろうって思つたけど、こんなに必死で隠したがるなんて好きな子のなんだろうなつて思つ。

きっと奏はその子のことが好きで、すゞく好きで、だからいつも目の届くところに結わいているのだろう。

そういえば と、玄関での会話を思い出す。

ラベンダーが好きな知人がいるつて言つてたけど、きっとその人が奏の好きな人なんだ。ラベンダー色のハンカチなんて、まさにぴつたりでしょ。

それに、私が失恋した時に慰めてくれたのも奏が恋をしているからでいつもだったら人の恋バナとかぜんぜん興味がないのに、なぜだか奏のことには興味が惹かれて、うきうきと瞳を輝かせて聞いてしまう。

「ねえ、あれって奏の好きな人の？」

奏が大きく目を見開き、その空色の瞳が切なげに揺れる。

「……そう、ですよ」

睫毛を伏せて言つた奏がなんだか艶っぽくて見入つてしまつ。

「そつかー、やつぱり奏には好きな人がいるんだね。失恋した私が言つのもなんだけど、奏の恋が実つてくれる嬉しさ」

心からそう思つて言つと、奏は複雑そうな表情で笑つてカウンターに向かう。

「コーヒー飲みますか？」

「えつと、今はいらない、かな……」

言つたのと同時に、ぐぐうーと腹の虫が盛大な悲鳴を上げる。

「あやつ……」

慌ててお腹を押さえるけれど、押さえたくらいでは音は鳴りやまない。

ぐうー、あやあやあやあやあ……

お腹を押さえたまま、涙目で顔を上げると、ぽかんとした顔で奏が私を見ていて、次の瞬間、ふっと吹き出した。

「あっ、すみません。あまりに軽快な音だったの……もしかして、夕食食べていなーいんですか?」

その質問に片眉を上げる。

「もしかして奏は食べた……? 初めに夕飯食べよつて話だつたから食べていーのかどうか迷つてるうちに食べそこなつちやつたのよ……」

ふてくされて言つと、奏が近寄つてきて。

「『じめん……俺があいまいに約束したからですね。実は俺も夕飯食いつぱぐれでまだなんですよ』

申し訳なさそうに言つた奏と田があつて、しばらぐの沈黙を挟んで。

「じゃあ、これからでも居酒屋に行く?」「居酒屋に行きますか?」

私と奏の声が被さつて、二人顔を見合させて笑いだす。

いつもは一步以上の距離を保つていて、奏が私との距離を一步、一步と詰めてくるから、ぴくりと肩を揺らす。

そつと伸ばされた手に手を握られて、ドキンッと大きく胸が跳ねる。

いくら奏が友人で緊張しないといつても、突然のスキンシップには免疫がなくてドギマギしてしまつ。

「れいはもう夕飯をすませていると思っていたので、家でローハーでも飲みながら話をしようと思つたんですねけど……お店を出る前に確認しておけばよかったです」

すまなそうに言い、奏は握った手を胸の高さに持ち上げてきゅうと力を込める。

「遅くなつてしましましたが、夕飯、一緒に食べに行つて頂けますか？」

改まつた言い方に微笑をこぼし、私は頷いた。

第13話 レシュノルティア 奏の場合（後書き）

人物紹介
馬渡 隼人
カフェ・ブルーベルのイケメン従業員、二十歳、大学一年生

「じゃあ、また来るからね。体に気をつけてね」

振り返つて言うと、玄関から出てきたお母さんが苦笑する。

「はいはい。いちいち帰つてこなくともお母さん達は大丈夫だから、交通費が無駄じゃない……」

「無駄じゃないよ、お母さんとお姉ちゃんと会いたかったし。また来るからね」

笑い返して言うと、お母さんは呆れた様なため息をつく。

「はいはい。いつのことは心配しなくていいから、れいもちゃんといい飯食べてしっかり勉強するのよ」

「うん。お姉ちゃんとよろしくね」

「はいはい」

適当に相づちをうつお母さんと手を振つて、駅に向かつて歩き出す。

一日前、バイト後に実家のある群馬県桐生に正用ぶりに戻つてきて、昨日はお盆過ぎけりつたけどお父さんのお墓参りして、お母さんとお姉ちゃんと久しぶりに外食して買い物した。

うちは お父さんは私が小学校の時に亡くなつて、高校三年生だった七つ年の姉は大学進学を一時は諦めたんだけど薬剤師になりたいって奨学金で大学に進学、今は薬剤師として小児科に勤めている。

もともとパートをしていたお母さんは上手く家計をやりくりして、県内に住む父方の実家から援助も受けつつ、私達姉妹を育ってくれた。

裕福ではなくて金銭的に切りつめて生活してきたけれど、のほほんとしたお母さんとおつとりしたお姉ちゃんを見て育つたから、お金に困つているという実感はいまいちなかつた。

だから、ほんやりとだけ姉みたいな薬剤師になりたいなと思つていた。

高校生になつた頃は、さすがに家計の事情も理解できる年頃になつて、バイトを始める。大学は行かずに就職してもいいかなと思つたけど、やりたいことがあるならちゃんと大学に行きなさいつてお母さんに言われて、大学進学を決めそれからは必死に勉強した。

本当は学校も実家から通つつもりだったけど、二時間半は遠いと言つてお母さんとお姉ちゃんが一人暮らし様の資金を溜めていくくれた。

だから私はしつかり勉強しなくちゃいけなくて、奨学金を返すためにも、それと同時に大学生になつたのだから生活費と学費くらい自分で出そつと長期休暇はバイトに精を出している。

桐生駅に着いて腕時計と時刻表を見比べる。今は十五時四十八分で、小山行きの電車は五十三分に来る。

七海には柏駅に十九時に入るように言われて、ここから柏までは一時間半くらいだから、少し早めに着くかなと思つて電車が来るのを待つ。

電車に乗つて座席に座ると、さつきまでぜんぜん眠くなんかなかつたのに、急激な睡魔に襲われてうとうとし始める。

最近朝から晩までバイクで帰ってきてからは課題やつて、睡眠時間が少なかつたな……と気づく。次の乗り換えまで一時間あるし寝てもいいかな

そう思つた次の瞬間には乗り換えの小山に着いて慌てて電車を降りる。

半分ううとしながら柏駅に着いたのは、十八時四十分頃だった。改札を出てすぐのところに七海がいるのを見つけて駆け寄ると、横に桃花ちゃんと舞ちゃんがいることに気づいてちょっと驚く。

「おっ、来たよ、れい」

はつらつとした声で言つたのは舞ちゃん。彼女も同じ学科の友達でいつも集まる六人グループのまとめ役的な存在さらさらの茶髪ショートヘア、前髪をピンで止めている。普段はジーンズが多いのに、今日はオレンジのフレアスカートにミルクティー色のブラウスを合わせたフロミニーンなカンジ。

「れい、早かつたね。これなら時間十分あるね」

意味深にここにこと言つ七海を見れば、バックプリーシの白のミニスカートに青系統の花柄のシフォンブラウスを着ている。舞ちゃんと違つて七海はいつもフロミニーン系のファッションドけど、いつもより気合が入つている様な気がする……その手には大きな鞄が……嫌な予感に、ぱつと横に立つお団子ヘアがトレードマークの桃花ちゃんを見てから自分の服を見下ろして愕然とする。

いつもガーリーな桃花ちゃんでさえお団子にふわふわのシュシュをして、赤系のチェック柄のジャンパースカートと白いブラウスを合わせた姿で、いつもよりお洒落をしている事が伝わってくる。

それに引き換え私は 実家帰りということで大きめの鞄と手提げ鞄を持ち、黒の細身のパンツに紺地に花柄のTシャツのカジュア

ルな格好。イタリアンでも食べに行くのかなってくらいお洒落している三人とは、私だけが場違いな格好をしている。

あつ

……

以前にも一度だけ同じ日にあつてているから、私はすぐに今の状況を理解して、回れ右して足早に改札に逃げ込もうとしたんだけど

「れい、待つたつ！」

七海は私が逃げるのを予想済みの様にぐつと掴んだ手に力を入れてにやりと嫌な笑みを浮かべる。

「さあ、お着替えに行きましょつかね？」

「やつ……、やだ……」

七海に掴まれた腕を勢いよく振り払おうとしたんだけど、必死の抵抗も空しく、反対側から七海よりも意味ありげな笑みを浮かべた舞ちゃんに腕を掴まれる。ずるずると引きずられるようにして、そびのパウダールームに引きずられて行く。

「はい、これに着替えで」

七海に袋を押し付けられて、着替え台のあるトイレの個室に押し込められる。

私は渋々鍵をかける。袋の中身を見て、はあーっと大きなため息をつく。

遡ること一年前、そういうえばその時も夏休み中だった。七海に突然遊ぼうって呼び出されて行つたら私以外はみんなお洒落していく。その時はどうしたんだろうって首を傾げていたら、ちょっとトイレ

行こうつて連れていかれて 今と同じ状況に。

着替えて、これから合コンだつて言われて啞然としたつけかな……
まったく同じ手に引っ掛けた自分に苦笑する。まあ、合コンなんて行つても、人見知りアンド男性が苦手な私は人数合わせでしかないから渋々ついて行つたんだよね。合コンなんて行つたことなかつたし、興味がないと言つたら嘘になるし。

だけどね……、合コンに行つて後悔しましたよ。男の子がべたべた触つてきたり話しかけてきたりして、とてもじゃないけれど耐えられませんでした。

七海もその様子を見て、ごめんつて苦笑してたから、もう一度と合コンの誘いはないと思つてたのに
はあー。もう一度大きなため息をついて、今更嫌なんて言えない状況に諦めて、着替えることにした。

合コンなんて伝えていないから私がめちゃくちゃ普段着で来ることも想定内で、七海の普段着を用意して来てくれる訳だけど……

「ちょっと七海！？ これ、スカートの丈短すぎない！？」

着替えて、スカートの裾を押さえながら絶叫する。用意された服は黒地に赤とオレンジの花柄のワンピース。胸元から裾にかけて中央に一本の黒いレースが施され、胸下で切り替えのついた細身のシフォン生地。それでもってミニスカート……

「短くない、短くない」

個室の外から素っ気ない声が返つてきて私は、はあーっと肩を下ろす。

なんだろう……、去年用意されてた服は、ここまで気合いが入つた感じじゃなかつたのに。だって、この服、七海が着てるのなんて数回しか見たことないよ！？

力チャヤリと鍵を外して外に出ると、今度は瞳を輝かせた舞ちゃんに腕を引かれてパウダールームの椅子に座らされる。

「今日も化粧しないね」

いやっと舞ちゃんに笑われ、ちょっと機嫌が悪くなる。頬を膨らませてそっぽを向くと、顎をぐこつと掴まれて正面を向かされる。

「はいはい、前向いて。目、つぶつて」

わざと鞄から化粧ポーチを出した舞ちゃんに言われ目を開じると、下地、ファンデーションを手際よく塗つていく。

「だつて、化粧品買つ余裕なんてないし……」

愚痴ると、舞ちゃんがふつて鼻で笑つ。

「まあ、れいはそのままで可愛いからいいと思つけど、二十歳過ぎたんだから少しくらい化粧してもいいんじゃない？」

「そのうちね……」

気のない返事をすると。

「はい、出来た」

舞ちゃんに言われ目を開ける。目の前の鏡の中……は全然見えなくて、化粧で変わったのかどうかいまいち実感なくて首をかしげると、背後に回つて髪の毛をいじり始めた舞ちゃんが苦笑する。

「あーあ、せつかく可愛くしてあげたのに、本人は見えてないなん

てもつたいないなあ」「

言こながら下半分の毛を残して、サイドの毛束を三つ編みにして後ろで束ねてシルバーの花型のクリップをつける。

「眼鏡したら？」

横で出来上がるのを待つていた七海に言われて、せつかく舞ちゃんがやつてくれたからと思い、手鞠から授業で使つてゐる茶色い縁の眼鏡を取り出す。まともないからと言つて肩までの天パをいつもは後ろでまともていいるけれど、いまはその髪が下ろされて、栗毛の髪がくねくねとうねつていて、まるで自分じゃないみたいな格好に、照れ臭くなる。

「いいじやん、いいじやん！　れい、可愛いー。わすが舞ちゃんー。」

私と舞ちゃんに贅辞を言つてから、ぐつと姿勢を伸ばして七海が力強く言つ。

「じゃ、行きますか？」「

化粧をしてくる自分をちゃんと見るのは初めてで、その時の私はちゅうとまーつとしていたんだと想つ。

着いた場所は、お洒落なイタリアンバー。

天井の高い店内は広く長テーブルが置かれたフロアの奥にはカウンター席がある。電球色の間接照明で薄暗く落ち着いた雰囲気で、「イタリアンでも食べに行くのかな」って思ったのはあながち間違いではなかつたみたい。

前回の合コンはカラオケだつたけど、今回はディナーなのかなと思つ。

七海が店員さんに予約名を告げると、八人掛けの長テーブルへと案内してくれた。

私は一番後ろからついて行く。案内された席で七海と舞ちゃんがなにか話して、一列に並んで座るのかと思ったら、一席ずつ開けて交互に座る。

まだ男性陣は来ていないので、テーブルの上にはナップキンが綺麗に八つ並んでいるだけだった。

「何時に待ち合わせなの？」

なんとなく気になつて、向かい側対角線上に座る七海に聞く。

「十九時半よ、もう少しで来るんじゃない？」

腕時計で時間を確認するとまだ十九時十五分で、早く来ていることに気づく。

私と一つ席を空けて座つた舞ちゃんが、前髪を直しながら七海に聞く。

「今日来るのって七海の友達って言つてたよね？ どんな人達？」
「幹事は高校の友達の未至磨みじまって言つて今は江戸川台大学に通つて
る一年生、同じ年ね」

みしま君と聞いて、私は首をかしげる。

「他のメンバーは大学の友達って言つてたかな」

顎に人差し指を当てて話す七海に、私は尋ねる。

「ね、七海。みしま君って、あの未至磨君？」
「そうそう、高二の時同じクラスだった未至磨」
「そういえば、七海ちゃんとれいちゃんは同じ高校なのよね」

桃花ちゃんに聞かれて頷く。

未至磨君 漢字がすごく特徴的だったから覚えてる。中学・
高校と一緒にクラスも何度も一緒になったことがある。その未至磨
君が近くの大学に通つているなんて知らない驚く。

「七海、未至磨君と連絡取つてたの？」
「えー、違うよ。この間たまたま会つてた……」

たまたま会つて、合図しようつて流れになるのがすここと感心
してしまつ。

「あつ、来た来た」

七海の声に入り口を振り返つて、数秒、目を瞬く。

「こんばんはー」「どうもー」

「今日はよろしくお願ひします」

三人が立ち上がりにこやかな笑顔で男性陣に挨拶する中、私は一人、立ち上がりそびれて座つたまま呆然とする。

「かな……」

やつとのことで言つた言葉が、他の人の声に書き消される。

「あれ、君、れいちゃん?」

爽やかな声に顔を上げると、つんつんと短髪を立たせた男性が私に近づいてきて、腰をかがめて顔を覗きこむ。
確か、隼人さん……

「やつぱり、そうだ。店に来た時と雰囲気が違うからあれつて思つたけど、今日は眼鏡で知的な感じだね」

言われて初めて、眼鏡をかけっぱなしだったことに気づく
今日はやけに周りの景色が鮮明に見えると思つたら、パウダーネームで眼鏡かけた時外し忘れていたんだ。

「なんだ? 隼人、知り合い?」

その声に顔を上げると高校生の時よりも少し大人っぽくなつた末至磨君ともう一人の男性、それから 奏が驚いたような顔で立つていた。

「じゃー、順番に自己紹介とこい」とど、まずは俺から。未至磨
諒、江戸川台大学社会学部経営社会学科に通つ一年生です。猿渡と
は中高が同じでした」

ブイサインで周りを見回し、人好きのする笑顔を浮かべる未至磨
君。

「猿渡 七海です。未至磨とは高校の同級生で今は武藏野理科大学
薬学部に通つてこま」

「猪瀬 馨、諒と同じ学科で、趣味はサッカーです。よろしく」
「兎澤 舞です。七海と同じく薬学生です」

向かい側中央に座る未至磨君から反時計回りに自己紹介が始まる。
舞ちゃんが挨拶終わつて、私と舞ちゃんの間 隣に座る人物に
視線を向ける。

「はじめまして、辰巳 奏と申します。武藏野理科大学の近くの喫
茶店で働いています」

綺麗に頭を下げて姿勢を正した奏に、みんなが「ああ、ブルーベ
ルの……」と言つた表情になる。

私はちらつと横に座る奏を見て、ただ呆然とする。
まさかこんな所で奏と会うとは思わなくて、偶然にびつくりして、
自己紹介が自分の番に回つてきた事に気づかず奏をじーーっと見
ていたら。

じつを見た奏の空色の瞳と視線があつて、はつとする。

「れいの番よ」

七海に言われ慌てて名前を名乗る。

「あ、あの……えっと、羽鳥 れいです……」

みんなの視線が全部私に集まつていて、ぼぼっと頭から湯気が出
そつた。程緊張して名前を言うだけで精一杯だった。

「れいは人見知りするのよ、ちょっと緊張しているだけだから、ね
つ」

「あー、羽鳥さんとも高校一緒にたよね。俺のこと覚えてる?」

七海のフォローに未至磨君がくすりと笑つて話しかける。

「うん……覚えてるよ……」

消え入りそうな小さな声で俯いて答えると、未至磨君があどけな
い笑顔を見せる。

「あははっ、恥ずかしがり屋なのは変わつてないね」

未至磨君の一言で場が和み、次の人へと自己紹介のバトンが渡さ
れる。

「江戸川台大社会学部経営社会学科二年、馬渡 隼人。ブルーベル
でバイトしてるから、女の子達とは会つた事あるかもね~」

俯いていた視線をそおーと上げて、向かい側に座る隼人さんを
見る。隼人さんは軽い口調で挨拶して、全員に視線を配り、最後に
私に視線を向けて、くすりと意地悪な笑みを浮かべる。

「安孫子 桃花です。よろしくお願いします」

桃花ちゃんの挨拶で自己紹介が終わり、乾杯用のビールを頼んで乾杯する。

「カンパニー！」

しばらくするとコースの料理が運ばれてきて、それぞれが近くの席の人と話しだす。

私はビルを数口飲んで置く。

「……れい、エーハートンさんですか？」

隣に姿勢正しく座っている奏が口を向かずに小声で言い、私はうつむいて震つた。

「えっと、七海に騙されて連れて来られたの……」

戸惑いがちに咳くと、呆れたようなため息をついて。

「やつぱり、そんなことですか……」

つてこのやうなことはいつになく。

「まさかreiがいるとは思わなくて、最初すぐに気が付きましたんでし
たよ」

ああ、私がいた事に驚いたのか。そういえば、最初も私を見て固
まってたし……
そんなに私って合コンに不釣り合いかな……？

「人見知りのれいがいるなんて……やっぱり猿渡さんが……」

奏が独り言のように何か言つてて、私はよく聞き取れなかつた。困つて奏をじいーつと見つめると、じつちを向いた奏と視線が合つてドキンっとする。

初めて眼鏡越しで見る奏は、イケメン店員と七海達が騒ぐだけあつて、端正な顔立ちをしてゐる。きりつとした一重、通つた鼻梁、薄く形の良い唇、そして一番目を引くのは羨ましいくらいサラサラの黒髪。肩につくくらいの長さの髪をハーフアップで結んでゐる。いまどき長髪なんてつて思うけど、それさえも魅力にしている。今日の奏の格好は、細身のベージュの綿パンツに白のシャツ、青と黒のチェックのストールを首からかけている。胸の前でストールの裾が揺れている。

「眼鏡……かけているなんて珍しいですね」

尋ねられて、眼鏡のテンプルに指を当てて眼鏡をはずす。

「そうだね。いつもは授業の時しかかけてないんだけど」「視力悪いんですか？」

「うん。裸眼でこの距離だと、奏の顔もぼんやりかな」

苦笑しながら眼鏡を畳んでしまおうとした私の手に、奏が手を重ねる。

「しまつんですか？……そのままかけていて下さこ

その言葉にキョトンとして首をかしげる。だけど眼鏡を外していりし店内が薄暗いせいで、いまいち奏の表情がよみとれない。

「でも、いつもかけていないから眼鏡かけていると変な感じがして……」

眼鏡かけている事をすっかり忘れていたのに、そういうつて誤魔化す。眼鏡をかけていると周りが見えすぎて、この状況でいつも以上に緊張しないでいることが出来ない。

「お願いします、眼鏡をかけていて下さい」

表情は分からなかつたけど切ない声で懇願され、私はしぶしぶ眼鏡をかけ直した。

眼鏡をかけてふつと顔を上げると正面に座っていた隼人さんと曰があつて、含みのある笑みを浮かべて私を見た。

「ねつ、れいちゃんつてさ、よくブルーベルに来ているよね。存在感薄いからいままであんまり氣づかなかつたけど、いつも壁側に座る子でしょ？」

悪気のない笑顔で存在感がないとずけずけ言われ……ちょっと顔を引きつらせる。

そりやあ、私は特別可愛いわけでもないし、服だつていつも地味だし、注文する時以外は従業員の人とは目も合わせないし最低限の会話すらしないけど……いつもはつきり存在感がないって言われるとい、へこんでしまう。

「はあ……」

あいまいに領き返すと、隣に座つている奏が隼人さんの言葉を咎めるように強口調で言つ。

「隼人、その言い方は失礼だろ？　だいたいお前は　」

そう言つて隼人さんに食つてかかるうとした時。着信音が流れ、奏がズボンのポケットから携帯を取り出して僅かに目を見開く。

「ちょっと電話がかかってきたので失礼します……もしもし」

みんなに頭を下げる立ちあがり、店内の静かな場所に移動しながら携帯を耳に押し当てる。

奏が席を立つたのをきつかけに、桃花ちゃんと舞ちゃんがお手洗いに席を立つ。

人数が減り、隣に座っていた桃花ちゃんがいながら、隼人さんが席を立つて奏の席に移動してきた。
なつ、なんで私の隣に座るの！？

「奏つてうるわいよな、小姑みたいだと思わないか？」

爽やかだけど少し癖のある笑顔で言った隼人さんに、私はもじもじと霸氣のない声で答える。

「そんなことないと思つけど……」「ふーん……」

そう言つた私を隼人さんはじいーっと見つめて、にやつと意地悪な笑みを浮かべる。

「れいちゃんつてさ、奏と仲良いよな。この間も店に奏のこと迎えに来てたし。あつ、もしかして奏のこと好きとか？」

質問責めにあって、恥ずかしくていたたまれなくて、その言葉に必死で首を振る。

「やつ、違つ……」

「どうをどう解釈したら私が奏を好きつてことになるのか理解できなくて慌てて否定する。

私が好きなのは今でも秀先輩だし、奏には好きな人がいるって言つていた。変な誤解をされは奏にも迷惑になるし、一生懸命否定したんだけど私の必死さなんて気にとめた様子も無く。

「そ？ まつ、違つていうならいいけど

つて、あつさり話をぶつ切りにされちゃう。
誤解されなかつたのはよかつたんだけど、そつもあつさりされると呆けてしまつ。話がどんどん飛んでいつついていけない。だつて

「じゃあさ、俺と付き合わない？」

なんて、いきなり喧嘩のよ……

「俺、れいちゃんに興味があるんだよね」

ええ つ！？

突然のことに驚いたんだけど、その後も質問責めに合ひ まあ、ほとんど答えられなかつたけど 隼人さんが私に抱いている好意は恋愛感情というよりも好奇心のようだつた。

「じゃ、アドレス教えてよ」

慣れた仕草で腰を浮かしてズボンの後ろポケットから携帯を取り出した隼人さんは、遠心力で折りたたみ式の携帯を開くとすつと私の方へ向ける。

教えるなんて言つてないのに携帯を向けられ、私は渋々鞄から携

帯を取り出す。

「私のアドレスなんて聞いても仕様がないのに……」

ひとりごちた言葉を聞かれてしまったみたいで、隼人さんがきょとんと首をかしげる。

「なんで？　俺、アドレス教えてもらつた子にはマメにメールするよ？」

アドレス教えてもらつた子。　その発言からは、明らかにたくさんの方の子からアドレスを聞いていることが分かつて、私は顔を引きつらせる。

「メール……なんてしなくていいです……」

「ん？　メールは苦手？　じゃあ、電話の方がいい？　付き合いはじめは電話よりもメールの方がいいと思うけど……あつ、『テートにも誘うよ』

隼人さんが満面の笑みでなんか意味不明な事言つているから、私は適当に相づち打つて聞き流すことにした。

お手洗いから戻つてきた桃花ちゃんと舞ちゃんは、隼人さんが席を移動しているのを見て元の席とは違う席に座つて、微妙に他の人達も席を移動した。

電話を終えて帰つて来た奏は最初に七海が座つていた席、私からは一番遠い席に座つていた。

薄暗い路地

壁に追い詰められた私の前のいるのは隼人さんで、顔の横に手をついて私との距離を詰めてくる。

「あ、あの……隼人さん？ あの……」

てんぱつて話しかける私に、隼人は意地悪な笑みを浮かべて言つ。

「いいから黙つて 」

言いながらどんどん顔を近づけてきて、息が触れそうな距離になる……

いつ、嫌あ ！？
なんなの、どうしてこんなことになつてるの ！？

時は遡つて、数十分前。

時刻は二十一時半を過ぎ、ディナー合コンを終えてみんなは一次会のカラオケに行くという。

私は明日も朝からバイトだし、連日のバイト続きによる疲れと合コンの気疲れで頭痛がしてきて、二次会には行かずに帰ると告げる。七海は渋い顔をしたけど、もともと騙して合コンに連れて來たのだし最終的には帰ることを許してくれた。

お会計を済ませてお店を出た後、お手洗いに寄つてから帰ることにした。緊張でトイレに行きたかったけど、隼人さんがずっと話しかけてくるからなかなかタイミングが掴めなくてずっと行けなかつたんだよね。

洗つた手をハンカチで拭いてお店の廊下を進みお店を出ると、お

店の壁にもたれかかって隼人さんが立っていた。

眼鏡越しに見る隼人さんは、七海いわく“イケメン店員”そろいのブルーベルで働いているだけあって、奏にも負けないくらいの綺麗な顔をしている。大きめの瞳は茶色がかっていて、きりっとした眉と不遜に微笑む唇が魅力的。

右膝を折つて足裏を壁につけ、だるそうに立つてゐるその姿さえ絵になつていて、通り過ぎる女性がちらちら振り返つていく。

「隼人さん……どうしたの？」

みんなはもう二度会の場所に移動していると思つていたから、そこにはいるはずのない隼人さんがいて驚く。

「ん？　れいちゃんのこと待つていたんだ」

爽やかな笑顔でそんなことを言われて、心臓が大きく飛び跳ねる。

「えつ！？」

思わず大きな声を出すると、隼人さんはふつと吹き出してにやにやと意地悪な笑みを浮かべる。

「からかつたのね……？」

からかわれただけだと分かつても、心臓が早鐘を打つて顔は真つ赤になつしまう。

人見知りだし男の人は苦手で、滅多に男の人と話すことがない私は、待つてた　て言われるだけでドキドキしてしまう。

意地悪な笑みのまま、隼人さんは少し腰をかがめて私の顔を下から覗きこむ。

「からかってないよ。待つてたって言つたのは、ほんと」

「えつ、あつ…… そうなの？ あれ？ 私は一次会行かないよ？」

「うん、知つてゐる、帰るんでしょ。送つてくよ」

そう言つて壁につけていた足裏をぐつと蹴り、私の前に歩み出る。自然な仕草で手を握られて、私は引っ張られるように歩きだす。

えつ、ええ ！？

男の人に手を繋がれて歩くのなんて初めてで、心臓か破裂しそうなほどドキドキする。

そう考えて、奏に手を繋がれたことがあつたのを思い出すけど、あの時は精神的に滅入つていてドキドキするとかそんな状況じゃなかつたし、あまりの強引さに気が動転していただけだつた。

あの時の奏の強引つぶりを思い出して、初対面の印象と今ではだいぶ違うことに苦笑する。

隼人は優しく腕を掴み、少し歩くのは早いけど時々振り返つて私のことを気にしてくれる。しばらく手を繋がれて歩いて、「あれ？」と首をかしげる。

「あの、隼人さん？ 駅、いつちじやないよ？」

大通りを外れて、路地に進んでいく隼人に声をかけたんだけど、隼人はちらつと振り返つただけで何も答えてくれなかつた。やつと止まつてくれたと思つた時には、なぜか壁に追い詰められていて

「れいちゃん、俺と付き合わない？」

合コンの時も言われたセリフに、不覚にも胸がドキンと跳ねてしまつ。

だつて間近に綺麗な顔を近づけられて、うつとりするような甘い声、少し意地悪な笑みを向けられてドギマギせずにほいられなかつた。

答えのをイエスだと思つたのか一歩一歩と距離を詰められ、後ずさつた私の背中が壁についてしまつ。

「あつ、あの……隼人さん？ あの……」

てんぱつてる私に隼人は意地悪な笑みを浮かべて言つ。

「いいから黙つて 」

僅かに目を細め、艶っぽい声で言いながらどんどん顔を近づけてくる。

息が触れそうな距離になり、唇が触れそうな距離にて、私はまごつと目を瞑つた

第1-6話 恋色ダイス 誘惑の時雨（後書き）

「ランキングに参加しています。」

「小説家になろう「勝手にランキング」せみじかと押して頂けると嬉しいです（^ ^）」

第17話 恋色ダイス 思い出のかなた

「おい、何やつてんだつ……！？」

突然聞こえた荒々しい声に、ぎゅっと瞑つていた目を開くと険しい表情の奏が隼人さんの胸ぐらを掴んでいて、ぎょっとする。

「えつ、奏……！？」

いつもと話し方が違うから、奏の声だとは思わなくて目を見開いて驚く。

私が制止する間もなく、奏のパンチが隼人さんの顔面に命中する。ボコッ、ドッターン　　っ！

大きな音を響かして隼人さんが路地に倒れ込む。

「きやーつー？」

いきなり殴りとばしたりするから驚いて悲鳴をあげる。

床に片膝を立てて起き上がった隼人さんは、口の端からつっすらと血が滲んでいる。

「あつ……隼人さん、大丈夫ですか？」

口の中が切れて血が出てる隼人さんに駆け寄りうとしたら、後ろから強引に腕を引かれて奏の胸の中に押さえこまれる。

「やつ……なにー？　奏ー？」

突然のことに驚いて振り仰ぐと奏が見た事もないような怖い顔を
しているから、ドキンッと大きく胸が跳ねる。

奏は私を片腕で抱きこむようにし一瞥すると、隼人さんに視線を
向ける。

「隼人、お前、れいに何したか分かつてるとか？」

怒りに震える声で言つた奏に、隼人はべつと床に血を吐いて
手の甲で口元を拭うと皮肉的な笑みを浮かべる。

「何つて まだ何もしてないだろ。だいたい俺とれいちゃんが何
しようが、奏には関係ないよなあ ？」

奏は何か言い返そうとしたのをやめてきゅっと強く奥歯を噛みし
める。そのまま黙り込んだ奏に対し、隼人は大きなため息を
つくと立ち上がり、ぱんぱんとお尻をはたいて呆れた声を出す。

「奏 独占欲丸出しだな……」

そう言つた隼人は、私にすまなそうな視線を向けて路地を出
て行つてしまつた。

私は隼人の言葉の意味が分からなくて、思考が止まる。

しばらくその場に呆けたように立ちつくしていた私は、はつと我
に返つて恐る恐る奏に声をかける。

「えつと、奏 ？ そろそろ離してくれるかな……」

私はずっと奏の腕に包まれるように抱えられ、背中には奏の厚い胸が密着している。冷静になつた瞬間、奏のことを意識してしまつて頭から湯気が出そうだった。

体を離してほしくて言ったのに、なぜか腕にぎゅーっと力を籠められて強く抱きしめられる。

ドキンッ

大きく胸が震え、体の中心が疼く。

前にも感じた鼓動の早さに警戒音が響いて、どうにか腕を離してもらおうとしたら

「れい、好きだ 」

肩越しに切なく震える声で奏に言われ、ぎゅっと胸が締め付けられる。

自分の聞いた言葉が信じられなくて、ビックリするもなく鼓動が早鐘を打つ。

「俺じゃダメなの？ いつも君の事を考えているのに 」

奏は囁くよつて言つと、私の髪の毛を優しく手つきで梳く。

髪の毛に指をからめられた瞬間、体中の神経が髪の毛にあるんじやないかつくくらい敏感になつて、体の中央から甘い痺れが広がつていく。

奏が、私のことを、好き ？

そのことに思考が囚われ、頭が上手く回らない。

だつて、私と奏が知り合つたのはつっここの間で、数回しか話したことがないくて、お互いのことをそんなに知らない。

それに私が好きなのは秀先輩で、奏が好きなのは

そう考えて、奏の部屋で見たラベンダー色のハンカチと、血相を変えてハンカチを隠した時の切なさに揺れる奏の顔を思い出して、

一気に頭に血がのぼる。

胸の上に回された奏の腕の温かい熱に吸い寄せられるように伸び、そうとしていた手で、乱暴に奏の腕を掴んで自分の体からひきはがす。

振り向きざま、きつと苛立ちを宿した瞳で奏を睨みつけ、私は駆けだしていた

なんなの、奏は！？

私のことが好きって、奏にはちゃんと好きな人がいるくせに。どうしてあんな嘘をつくるの！？

真剣な瞳、あまりにも綺麗なバリトンで好きって言われたらどんな女の子だつてくらくらしちゃうに決まっている。

だから私の心が揺さぶられたのは、決して奏を好きだからじゃない

思わず奏の手に伸ばしてしまったのだって、深い意味はないんだ。私が好きなのは秀先輩で、奏のことはただの友達としか見ていない

必死に心の中で否定しながら、私の頬に一筋の涙が溺れ落ちる。それならどうして、私はこんなに傷ついているのだろうからかわれたんだつて気づいて、苛立ちと同じくらい悲しかった。信頼していた奏に裏切られたようで、なにも言い返すことが出来なかつた。

私は泣きながら、無我夢中で駅に向かつて走った

好き そう告白されて逃げ出すのはこれが二度目だ……

どこをどう走ったのか、街灯に照らされた見知らぬ住宅街の小道をだんだんとスピードを緩めて走るのをやめた。

しばらくそのまま歩いて、ふつとそんなことを考えて高一の最悪の記憶を思い出してしまった。

振り返りざまにキスをされ、好きだと言われた高一の春。彼のことは印象的だった目にかかる黒くて量のある前髪は覚えているけど、それ以外のことは顔も名前も覚えていない。もともと同じクラスと言つてもほとんど話したことなくて、いきなり好きだなんて言われてからかわれたのかと思つたくらい、彼との接点はなくて

そういえば、彼について一つ思い出した

逃げ帰つた家で一晩中彼のことを考えていた。なぜ告白したのか、私のどこが好きなのか、明日はどんな顔をして会つたらいいのかほとんど話したことがない人に告白されて動搖する心の中に少しは嬉しい気持ちもあつたのかもしれないけど、私はそれに気づかないくらいキスされたことに衝撃を受けていた。

とにかく、教室で彼と視線があつたらいたたまれなくてどうしたらいいのかとそればかり考えて、ほとんど眠れなかつただけだ。

翌日登校すると、彼は転校したと担任の先生が言つた。

転校のことを知つていたのは誰もいなくて もしかしたら親しい友達は知つていたのかもしれないけど 教室中がざわめいたのを……思い出した。

確かに、彼が転校のことを言つのをその日まで担任に口止めしていなかったらしい。

私はさんざん、彼とどんな顔をして会つたらいいのか悩んだのに、彼は教室から いなくなつてしまつた。

もし、彼が転校しないでキスのことを謝つてきたり、そうでなくとも話しかけられていたら こんなふつに告白とキスが最悪の記憶として深く脳裏に刻まれることはなかつたかもしれない。

はあー……

とぼとぼと重たい足取りを止め、私は大きなため息をつく。
夜空を見上げると、纖維のよつこ細い月が寂しげに空に浮かんで
る。

あの時はただキスされたことがショックで逃げ出したけど、今は
どうして奏から逃げ出しあってしまったのだろうか……
奏のこと思い出して、ため息をもう一度つく。頬に触ると、
さつきまで流れていた涙がまたこぼれはじめて、思わず嗚咽を漏ら
す。

「うう……うう……

纖月に照らされた夜空に、ただ静かに嗚咽が消えて行った。

朝、鏡の中に写る自分は、泣きすぎて目が腫れていて火照つてだるそうな顔をしている。

ピピピピピッ……

脇に挟んだ体温計から音がして取り出すると、小さな液晶には「三十九度六分」の数字

なんだかだるくて頭が痛いから、風邪じやないことを確かめるために熱を計ったのに、予想外の熱の高さに目のがくらぐらする。今日も朝からバイトだったけど、さすがにこの熱じや行けないよね……

私は仕方なくバイト先に休むことを伝え、もう一度布団の中にもぐって寝ることにした。

遮光カーテンをひいていても隙間から差し込む光に部屋は明るい。一度寝から目が覚めると、汗をぐっしょりかいていて気持ち悪くてシャワーを浴びて着替えることにする。少しお腹もすいてきて、朝から何も食べてないことに気づいて起きたついでに冷凍ごはんでおじやを作つて遅い朝食兼昼食にする。

テレビをつけながら雑貨屋で買った一九九五円の長方形の折りたたみ机におじやの入ったお椀を置いて食べて、食べ終わつた時ふつと思い立つてクローゼットをあさる。

確か、この辺りに……

昨日からもやもやした物が胸の底に溜まつてて、それを解消するために半畳のクローゼットの奥からガムテープで口を閉じた段ボール箱を引っ張り出し、その中から重厚なえんじ色のアルバムを取り

出した。

私は告白した次の日に転校していつた彼が同じ中学だつたことを思い出して、アルバムで確認すれば、胸に溜まつたもやもやがなくなるかもしぬないと思つたの。

朦朧とする頭で重みのあるアルバムを抱え、クローゼットの前からベッドに移動する。ベッドの下に座つて寄りかかり、立てた膝の上でアルバムを開く。

何枚かページをめくつて、三年一組のページで手を止める。四組まである中、私は一組で、中学の頃の自分の写真が載つていて、同じページには七海も載つてゐる。

私はゆっくりとページをめくり、一組三組と一人一人の顔写真を見て、記憶の中の彼と一致するか確認していく。

一組と三組の中には彼はいなくて、四組を開く。

端から顔写真を見ていく、一つの写真にびっくりと眉を動かす。黒くうつとうしい量の前髪が目にかかり、黒ぶちの眼鏡をかけた

少年

記憶の中の彼よりも少し幼い雰囲気だけど、間違いなく彼だと思った。それと同時に視界に入った文字に衝撃を受ける。

眼鏡をかけた少年の顔写真の下には“辰巳 奏”と書かれていた。

か、なで！？

私と奏は中学校が同じだつた？

ううん、それよりも奏があの男の子！？

私に告白してきた男の子は奏だつたの！？

だつて、奏は眼鏡はかけてないし、髪の毛だつてこんなにもつさりしていない。写真の男の子は眼鏡と前髪で瞳がよく見えないけれど、写真と今の容姿とはあまりにかけ離れていて、とても同一人物とは思えなかつた。

ぐらりと歪む視界の端で、見知つたもう一つの名前を見つけて、大きく胸が跳ねる。

未至磨君も三年四組

未至磨君と奏は同じクラスだったことがあって、転校した後も連絡を取り合う仲だったから、奏は合コンに来ていたの？

昨日は合コンに騙されて連れて行かれたショックと男の子がいて緊張して、そこに奏が現れた驚きで未至磨君との関係とか全然考えなかつたけど、二人の間になにかしらの関係がないと合コンに誘つたりしないわよね……

他のメンバーの隼人さんと猪瀬君は未至磨君と同じ大学の同じ学部だつて言つていた。奏は大学に行つてないから大学の知り合いつことはないし、隼人さんに誘われてつていうのもなんか違うカンジがする。そう、だつて、奏と未至磨君は親しい間柄みたいだつた。普通に話していたし……やつぱり、二人は同級生で親友で奏は私と同級生だつた……

アルバムの写真に写る“辰巳 奏”が同姓同名の別人かもと考えたけど、未至磨君と同級生ということから、私の知つている奏との辰巳奏が同一人物という事実に繋がる。

つまり、高校生の時に告白してきたのは奏で……私のファーストキスの相手も

そこまで考えてぐらんと激しい目眩がして、一度思考を止めて、お椀を片づけベッドに潜り込む。

もう一度寝直したら、少しばは頭の中が整理されるかもしけないそう思つたのに、奏のことが頭から離れない。

奏と私が同中出身。高一の時は同じクラスで、告白してきて奏は今でも私を好きなのかな？

そんなことを考えてしまつて、ぼつと顔に火がついたように真つ赤になつてしまつ。

やつ、やだな……そんなことないよね、今更。

そうよ、だつて奏には好きな人がいるもの。奏の部屋で見たラベンダー色のハンカチと、血相を変えてハンカチを隠した時の切なさに揺れる奏の顔を思い出して、一気に顔の火照りが引いていく。

そもそも、同級生って気づいていたなら喫茶店で会つた時に言つてくれるはずよ。そうじゃなくても、同級生だつたつて知らせる機会はたくさんあつたでしょ？

じゃあ、奏は私と同級生だつたつて気づいていないの？

そう考えて、矛盾点に気づく。

違う　奏ははじめから私だつて気づいていたんだわ。だからあの日、秀先輩に失恋して泣いていた私を強引に連れ出した。それなら、どうして？　どうして、同級生だつたつて言わないの？

一つ答えが分かると、一つ分からなくなつてしまつ。

ただ、眩暈のする頭とだるい体で考えついた結論は、奏が私のことを微塵も好きじやないということ

高校の時、告白されて答えずに逃げてしまつた私を、今でも好きなわけがない。それに奏には好きな人がいるのを知つていて。だから、奏の告白は嫌がらせで　告白から逃げた私への復讐のための告白だったのよ。

あの告白の彼が奏だと気づいていない私にもう一度同じことをして、困つている私を見て笑つていてるに違ひないわ

こんなことならアルバムを開かなければ良かつた。こんな記憶なら思い出さなければ良かつた

奏が同級生で、告白してきた男の子だつたなんて思い出さなければ、笑つて奏の告白を冗談にすることが出来たのに悲しくて切なくて、心が傷ついてしまつた。

こんなことつてあんまりよ。復讐のために、好きでもない子に気のあるそぶりを見せて告白するなんて、最低な人間のすることだわ

朦朧とする意識の中、ざわざわと胸が波立つて、閉じた瞳から涙が一筋流れ落ちた

その日の夜、私の熱は四十度を越え、ふらふらの状態のまま誰にも連絡を取れず、病院にも行けず、三日間音信不通となつた

風邪をひいてから五日目。七海と会つ約束をしていたのだけど、電源が落ちた携帯にも気づかず放置していたから、連絡の全く取れない私のことを心配してアパートに尋ねてきてくれた。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「うん、もう熱は微熱くらいまで下がったから……」

熱と頭痛だけで病院に行かずに家に寝てれば治ると思つたら、予想外に長引いてしまつた。私はパジャマの上にカーティガンを羽織つて、咳はでてなかつたけど念のためにマスクをしてる。へりへりと喋る私を見て、七海は片眉を上げる。

「ちやんと病院に行かないからこいつことになるのよ」

「はーい」

「もひ、ちやんと聞こてるの?」

コンビニで買つてきてくれたお弁当をレンジで温めながら、七海が苛立ちを露わに行つてくる。

私は手に持つたあつあつのココアに口をつけて、こじりと微笑む。

「うん」

面倒くさくて病院に行かなかつたつて言つたけど、本當はお金をかけたくなかつたことに気づいている七海が、それでもあえてそこを突つ込んでこない優しさに、口元が緩んでしまう。

まあ、初日に病院に行かなかつた理由はそれだけど、次の日から倒れて病院に行く気力もなかつたというのは本当だけど。

温めたお弁当を持って、七海が向かいに座る。お弁当を食べながらじばらく話した時。

「体調良くなつたならさ　」

七海が意味深に言つから、私はお弁当から顔を上げて七海を見る。

「ブルーベル、一緒に行こ」

ブルーベルにはよく七海と一緒に行くけれど、なんとなく誘われたことに違和感を覚えて七海をじいーっと見つめていると、その顔が徐々に赤くなる。

「実はね……好きな人が出来たの……」

その言葉にどきりとする。

「えつ……それって……」

もしかして、奏　?

第1-8話 恋色ダイス 星が丘ララバイ（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう「勝手にランキング」」まじかと押して頂けると嬉しいです（^ ^）

第19話 恋色ダイス 心の扉を叩く音

合コンで、七海は奏と隣の席に座つて、仲良さそうに話していたのを思い出して、胸がちくちくと痛む。奏のことが好きなの そう尋ねようとしたのに、言葉が出てこない。

「実はね……卯月さんっていう従業員の人」

七海が頬を染めて言つて、私は聞き覚えのある名前に気づかれないようになに安堵のため息をつくる。

「ああ、そんな人いたね……」

ロッカールームで会つた卯月さんを思い出して顔を覗めると、七海が訝しんで私を見る。

「ちょっと！ れい、卯月さんと知り合いなの！？ 男性苦手のくせにいつ知り合つたのよー？」

机の上に手をついて顔を近づけてすごい剣幕で問い合わせられて、私は体をひいて七海から距離をとる。

「えつ……知り合いじゃないよ。ぜんぜん、知らない人」

ぜんぜん知らない人ではないけれど、たった数分会つただけで知り合いとは言えないよね。

両手を勢いよく振つて否定する私に、七海が片眉を上げて座ります。

「そう? まあ、そうよね、れいが男の人の知り合いがいるわけないよね」

なんだかその言葉に棘があつて、でもその通りだから言つて返せないけど。

「いいの、私は男の人なんて興味ないもの……」

「それよつと、一緒に行つてくれるよね?」

女友達も男友達も多くて、誰とでも気さくに話せる七海だけど、好きな人の前ではすぐ緊張して一人だとまともに話せなくなるらしい 私からしたら、ぜんぜんまともだと思うけど。

だから七海に好きな人が出来ると、私は好きな人に会う七海に引っ張られてついていく。私が一緒に行つても、どうせ間を取り持つたり話しに加わるなんてことは出来ないのに、なぜか私を連れていくのよね。

まあ、一緒に行くだけで、特に私はなにかをしなければいけない訳じゃないからいいんだけど。でもね、今回は……

「ごめん……私、行けない

「えつ、どうして!?

予想外の返答に七海がすっとんきょうな声を上げる。

「ブルーベルには 行きたくないの」

決意も固く言い切った私に、七海が訝しげに片眉を上げる。

「なに なんかあつたの?」

週三回以上通う行きつけの喫茶店にいきなり行きたくないなんて
言いだせば、なにがあると思うのが普通だよね。

だけど、奏が同級生だったことや、ファーストキスの相手だった
とか、復讐とか

今は全部を話す気にはなれなくて、私は曖昧に首をかしげる。

「ん 、今度、話すね」

七海は私が話したくなのを悟って、ふうーっとため息をつく。

「わかった、言いたくなつたら聞かせてね。ブルーベルには、桃ち
ゃんか舞、誘うよ」

「うん、ごめんね」

それから一週間が経ち後期講義が始まつて大学に行くようになつ
たけど、私は一度もブルーベルには行かなかつた。

そしてあの日から、私の微熱は続いていた

「れい? もう講義終わつたよ?」

「きやつ……」

視界に七海の顔のアップがいきなり入りこんで、私は驚きで身をひいて背もたれにしたたかに背中をぶつける。

「なにやつてゐの……？」

呆れた顔で七海に言われ、私は笑つて誤魔化す。

「えへへ……」

七海は机に片手をつき、もう一方に手を腰に手を当ててため息をつく。

「最近のれいはずつとほんやりしてゐるね」

ずっと続く微熱のせいなのか、違うなにかのせいなのか
ただ、気持ちの整理がつかなくて、ずっと心にもやもやした黒い塊が残つていた。

奏がどういうつもりであんなことを言つたのかが分からぬ。分からぬなら、直接本人に会つて聞けばいいのかもしけないけど……会いたくなかった。

奏のことを考えてちくちく痛む胸に翻弄される。

私は今でも、あの時から逃げ続けているのかもしけない
このままではダメだつて分かつてているのに、一步を踏み出すだけの勇気がなかつた。

もし本当に復讐だつたら、私は……

それなのに、今、私はどうしてこんなところにいるの！？
ブルーベルは家から大学の間にはなくて、大学よりむしろ駅に向

かつた大通りから一本外れたところにある。

駅に用事があつて行かなければならぬ時も、なるべくブルーベルに近寄らない道を選んでいたのに、七海に引つ張られてブルーベルの並ぶ通りを歩いていた。

「ちょっと、七海っ！ 新しく見つけたお店に連れて行ってくれるつて話しだったじゃない！？」この辺りに新しいお店なんて――

「のままもう少し進めば、ブルーベルについてしまう。私は必死に抵抗して足を踏ん張り、腕をひく七海から逃れようとする。私はブルーベルには行きたくないのよ。どうして連れて行こうとするのぉ――！？」

引っ張り合いになつてた腕を急に七海に離されて、私はバランスを失つて後ろに数歩よろける。

「もうっ！ まだブルーベルには行かないとか言つているの？ あんなに気に入つて通つてたのに、何が気に入らないわけ！？」
「なについて……」

それは奏に会いたくないからよ

そう言つてしまひたかったけど、言えなくてぐつと唇をかみしめて俯くと、七海が腰に手を当てて大きなため息をつく。

「まだ、話せる状態じゃないわけ――？」

ちりつと顔を上げて七海の顔を見ると、心配そうな光を宿した目をすがめて私を見ているから、言葉で伝える代わりに小さく頷く。

「はあ――……分かった、せつかく卯月さんと仲良くなつたかられいに紹介しようつと思つたけど、また今度にする

卯月さんを紹介　　というのがなんだかものすごく嫌で、私は顔を顰めて七海を見る。

「私に紹介されても困るんだけど……」

一度話した時の印象が悪かったというのもあるけど、男の人を紹介されても緊張して話せないから困るというのもある。

「まあ、そういうだけ。卯月さんが今度は友達も連れておいでって言うから……」

七海は最近、以前の私のように一人でブルーベルに通っているらしい。

でもそれって、営業で言われただけじゃ……

七海もそれに気づいていて、私を無理やり誘ったのかな。それなら一緒にに行ってあげるべきかな。でも、だけど

「ごめん、今は無理……」

心苦しくて申し訳なくて、私は俯いて言う。

「分かった　無理やり連れて来てごめんね、じゃ、また明日
「うん、また学校でね」

七海は笑顔で手を振って、ブルーベルまで小走りに駆けて行く。黒縁の硝子扉の中に消えていく七海の姿を見送り、掠れていくパイプチャイムの涼やかな音色を聞いて、家に帰ろうと踵を返した時。

「れい」

「 つ 」

そこにいた人物に、私は言葉を失つて口元に手を当てる。

奏

後ろに立っていた奏は、喫茶店の制服の上に羽織った紺色のスウェット素材のカーディガンのポケットに手を入れてスーパーのビール袋を下げていた。

私はきゅっと唇をかみしめて奏から視線をそらすと、俯いたまま奏の横を足早に通り過ぎようとして 腕を強く引かれ、住宅の間の小道に連れ込まれてしまった。

「 やつ、 痛い なにする…… の…… 」

きつと苛立つた視線を奏に向けると、そこには威圧的な瞳が鋭い光を宿してきらりと光る。

ぞわつと背筋に冷たいものが這い上がり、体が震える。

「 どうして、店に来ないんですか？」

冷えた氷の様な声に、私は視線を合わせずに答える。

「 バイトと課題が忙しかったの…… 」

「 それだけですか？」

「 奏には関係ないでしょ、あつ 」

「 の腕を強く引きあげられて、無理やり顔を上げさせられる。間近に妖艶な光を宿した瞳があつて、不覚にもドキドキしてしまって、今度は反対側に視線をそらす。

「 関係ない ？」 ならどうして、俺のことを見ないんですか？」

核心をつかれて、胸がじくじくと痛む。だけど

「俺がなにかした?」

奏のその言葉に、胸にずっと押しどどめていた気持ちが涙と一緒に溢れだす。

「なにかしたか、ですって？ そんなの、したじゃない。さんざん、人の気持ちを振りまわして」

私の言葉が言い終わらない内に、顔を無理やりあげさせられて腕を掴んだもう片方の手で私の頸を掴む。至近距離で奏の星空のような漆黒の瞳と視線が絡む。その瞳の奥には、焦がれるような熱と何かを強く求めるような光があつて、胸が苦しくなる。

瞬きをした一瞬の隙に奏の唇を押しあてられて、一秒後にキスをされたと気づいて、思考が急速に回り始める。

「やつ

掴まっていた腕を強く振り払う。私の瞳は溢れてくる涙で霞み、溢れてくる感情のまま叫んでいた。

「復讐なら、もう十分でしょ！？」

自分で言つた言葉に胸が切り裂かれるように痛んで涙が止まらない。

奏には好きな人がいるのに、どうしてキスなんかするの

本当に嫌がらせ……復讐のためなの

違う つて、奏の口からその言葉を聞けたなら、渦巻いている

気持ちも不安な気持ちもすべてなかつたことに出るのに
私の見つめる先で、奏の瞳が見開かれ切なく揺れるから　違う
つて言ってくれないから

「どうしてこんなことをするの……ひどい、奏のこと信じていたの
に　」

私は泣き叫んでその場を駆けだした。
信じていた友人に裏切られたから　？
どうして気づかれたんだって、奏の表情が驚いていたから　？
違う、そんなんじゃなくて私は　……
胸に押し寄せてくるもどかしい気持ちに、胸が苦しかった。

第20話 恋色ダイス 好きなのかもしれない

ずっと溜めこんでいた気持ちをぶちまけてすつきりしたはずなのに、涙が後から後から溢れて来て、止まらなかつた。
また逃げ出してしまつた そのことに罪悪感がつのり、自分の想像通り奏が復讐のために私に近づいたんだと知つて 胸が引き裂かれるように痛んだ。

失恋した日の出会いすら計画的なものだと思うと、胸のもやもやが大きくなる。

あの優しさも、すべては偽りだつたの ？
もう何もかもが信じられなくて、ただ苦しくて
その日、私は再び熱で寝込んでしまつた。

十月、秋らしい陽気になり、昼間でも長袖ではないと肌寒く感じる日が多くなつてきた。

改札前の柱の銀縁に映つた顔を覗きこみ、乱れた前髪を横に流してリップを塗りなおす。

「羽鳥っ！ ごめん、待つたか？」

改札を抜け駆け寄つてきた秀先輩を見て、私は慌ててリップを鞄にしまつ。目元を和ませて首を横に振る。

「いいえ、私もいましたところです」

「高橋先生、話しだすと長くていつもゼリの時間長引くんだけ……」

首を触りながら苦笑す秀先輩に、私も笑い返す。

「そうですね、講義もいつも休み時間潰れちゃうんですよ」

そう言つて、改札前からコンコースを渡つて駅前の画材屋さんに入る。

今日は秀先輩と待ち合わせて一人で買い物

夏合宿の告白の後、私と秀先輩はギクシャクすることもなく、今まで通りの関係を続けていた。仲のいい先輩と後輩 だけど一つだけ違うのは約束をしたこと。

『今度、一緒に出かけないか?』

秀先輩のその言葉が嬉しくて、消せない気持ちが膨らむのが分かった。

見たい映画があつてのお誘いだったのだけど、私が風邪で寝込んだりいろいろあって予定が合わなくて、のびのびになつていた“お出かけ”が今日というわけ。

「でも、すみません……私の買出しに付き合つて貰う形になつてしまつて……」

一画材屋に入り、店内中央のエスカレーターに乗つて前に立つ秀先輩を見上げる。

秀先輩は夏休み明けに研究室の配属が発表されて、ゼミが始まり卒業研究に向けて忙しくなる時期でなかなか一人の予定が合わなくて、やつと合つたのが今日だったのだけど、私の買出しをするとい

う用事に秀先輩について来てもらう形になってしまった。

おまけに買出しとというのがサークルの歓送会の備品で秀先輩

は歓送される立場なのに買出しに付き合わせるってどうなの！？

「……………」

肩を落として沈んでいる私を見て、秀先輩はふわりと優しい笑みを浮かべて、ぽんぽんっと大きな手で頭を撫でてくれた。

「気にするな、俺もちよびっこで買いたい物あつたからさ。でも

「

そう言つて、秀先輩が口元に拳を当てて咳払いをする。

「本当は映画とかに、羽鳥と一緒に行きたかったけどな…………」

掠れた声で、少し頬を染めて言つた秀先輩の言葉に、私は胸がきゅーんと締め付けられる。

わっ

「私も秀先輩と映画行きたい…………です」

そんなことを言つてしまつて、かあーっと顔が赤くなるのが分かつて俯く。

今まで通りの関係 それでも少し変わったことがある。

なんだか秀先輩が私に向ける瞳が柔らかくて、私だけは特別なんじやないかつて、自惚れてしまいそうになる。

今までも時々はメールをしていたけど、ほとんどがサークルの連絡だった。でも出かける約束をしてからはお互いの予定の確認とか些細なことだけど、個人的な内容のメールのやり取りをするようになった。

妹みたいな存在だと言われた時は、恋愛対象として見られていいことに落胆したけれど、妹でも秀先輩の中では特別な存在でいられるならそれでいいかもしだいと思つた。

初めての気持ち、淡く切なく大切な私の恋だつた

振られて傷ついて、だけど秀先輩を困らせたくて言つた訳じやない。今までの関係を壊したかった訳じやない。少しでも前に進めれば、人見知りで男性が苦手でいつも逃げてばかりいる自分も少しは成長出来るかもしだいと思つて

どうしようもない失恋に、はじめは悲しくて何もかもが受け入れられなくて。だけど。

『どうしようもなくなんかありますよ。よく、頑張りましたね』

そう言つてくれた奏の言葉で救われた。

秀先輩を好きな気持ちはそう簡単には消せなくて、ただ好きな気持ちを持ち続けるいいんだと重た。

優しく頭を撫でられるような、心をとろかすような言葉で励ましてくれたから、前向きになれたんだ

奏のおかげなんだよ　心中で亥いて、胸がぎゅっと締め付けられる。

それなのに、もう奏と普通に接することは出来ない。

復讐のためだけに奏は私に近づいて、好きだと心にもない事を言つて私をからかつて

許せないとかそんな気持ちよりもなによりも、悲しくて苦しかつた。

ねえ、奏　失恋をして時に慰めてくれたあの優しさも、全部ぜんぶ嘘だつたの　?

「……羽鳥？」

急に声をかけられて、考え込んでしまっていたことに気づいてはつとまる。目の前に秀先輩の心配そうな顔が覗きこんでて、私は慌てて尋ねる。

「あっ、なんですか、秀先輩」

正面に立った秀先輩は少し腰をかがめて私と目線の高さを同じにすると、その瞳に真剣な光を宿す。

「大丈夫か……？」

それが何に対する大丈夫と聞かれたのか分からなくて、首をかしげる。秀先輩を安心させるように笑顔を作ったんだけど、なんか上手く笑えなくて泣きそうになる。

大好きな秀先輩と一緒に初めてのお出かけなのに、私の頭の中は奏のことでいっぱいだった。

こんなに好きな秀先輩を目の前にして、心が弾まない。笑顔を作りうとして、私にやつてるんだろ……

私は泣き笑いのような笑みを浮かべて秀先輩を見る。

「大丈夫ですよ」

ぜんぜん大丈夫じゃないけど、秀先輩に話す気にはなれなくてそういう言つしかなかつた。

秀先輩は大丈夫じゃないことに気づきながらも、それ以上詮索しないでいてくれた。その優しさが胸に沁み入る。それなのに、考えるのは奏のことだった

第20話 恋色ダイス 好きなかもしれない（後書き）

更新遅くなつてすみません^__^
ちゅうじゅう執筆してるので、『氣長にお待へたださー！

ランキングに参加してます。

「小説家になろう 勝手にランキング」まひつと押して頂けると嬉しいです。

第21話 恋色ダイス 恋を始める距離

沈んだ気持ちで買出しを終えて電車に乗り込む。画材店があつたのは学校がある運河駅から五駅離れた柏駅で、現地待ち合わせだから駅で分かれるのかと思つたら秀先輩は買った物を学校まで運ぶと言つてくれた。

「どうせ、俺もサークルに顔出すから」

そう言つた秀先輩の顔がなんだか寂しげに見えたのは気のせいだらうか……

部室に着くと七海が一人で雑誌を読んでいた。

「あれ？ れい、今日はギリギリに来るつて言つてなかつた？」

「あー、うん、そつなんだけど……」

歯切れ悪く言つて部室に入つた私の後ろにいる人物を見て、七海が大きく目を見開く。

「えつ、あつ……秀先輩、こんにちは」

言いながら姿勢を正して頭を下げる。

三年生は十月の歓送会を終えて引退といつことになつていて、実際は夏の合宿を最後に研究室が忙しくて来なくなる人が多い。

九月からは三年生の出席は減つて、一年生が最上級学年といつこ

とになつていて、目の前に現れた秀先輩に驚き、窓いでいた事への少しの後ろめたさから七海は居住まいを正した。

「こんなにむちむ、猿渡。今日は俺もサークルに出ようと思つてね
「あつ、そうだったんですね

どもる七海にふわりといつもの優しい笑みを浮かべた秀先輩は、部室の奥へと行く。

「ちょっと……れい、どうこういふことはよー? なんで秀先輩と一緒に来たのー?」

肩の服を掴まれて側に引き寄せられ、七海に小声で尋ねられる。その瞳は好奇心を丸出しで、私は思わず苦笑する。

「えつと、かくかくしかじかで 欽送会の買出しを手伝つてもらいました」

手に持つていたビニール袋を持ち上げて、ペニッと頭を下げる。部室の奥に行つていた秀先輩が顔を出し。

「羽鳥、この荷物はここへんに置いておけばいいかな?」

そう言つて手に持つていた大容量のビニール袋を奥の空いでいる棚へと置く。

「はいっ、荷物持つて頂いてありがとうございました
「いいえ、こちらこそ

秀先輩は星の輝きの瞳を和ませ優しい笑みを浮かべるから、私も

つられて微笑み、一人の間にほんわかした雰囲気が流れる。
だけど、そんなことに気づいていない七海が私と秀先輩の交わる
視線の中に入り込んでくる。

「あつと、購買部に用事があるの忘れてた、れいもついて来て。秀
先輩、すみません、サークル始まる時間には戻るので、お願ひしま
すつ」

そう言つた七海は、有無を言わせずに私の腕を引っ張つて部室を
出て行つた。

「ちよつと、なに? どうこう? こと? ビウしてれいと秀先輩が一
緒に買出し行つてるのよー?」

購買部と隣接する学食の一席で、興奮気味に捲し立てる七海を上
目使いに見て、私はお茶を静かにする。

「だからね、秀先輩と一緒に出かけよつて言われてて、本当は映
画に行く予定だつたんだけど予定が合わなくてのびのびになつて、
これ以上伸ばすのもあれだしつてなつて、今日私が柏に行く用事が
あるつて言つたら一緒に行こうつてことになつたの。それで買出し
手伝つてもうつて、サークル出るからつて部室まで荷物持つてもら
つて……」

順序立てて説明する私の言葉を遮つて、七海は悩ましげに額に手
を当てる。

「なにそれ……れいつて秀先輩に振られたんじやなかつた?」
「うん……」

「でも、二人で出かけたいって言われたんだよね？ 秀先輩はれいのこと好きって事じやないの？」

真剣な表情で言った七海を私は呆然と見つめ、それからあいまいに笑って首をかしげる。

「さうだいじやう」

「どうだらうつて、なによー。やる気ないわねえ……れいさ、夏休みにこのままの関係でいいって言ったじやない？ 振られても好きな気持ちは変わらないって。引退してからも時々会えればいいって言つたじや、そんな悠長なこと言つてたら、そのつけあつと後悔するよ」

後悔

七海の御葉がなにか幽い深い炎が匂う。

「今までいたらダメ
じくと痛み始める。
なんだか警告にも似た言葉が胸がじく

「私はさ、れいには幸せになつてほしいと思つて辛い恋なら諦めなつて言つたよ。新しい恋を見つけるために嘘ついて合コンにも連れて行つたけどね 前言撤回つ！ きつとね、秀先輩はれいに告白されて女性として意識するようになつたんだよつ」

「そんな、七海の買いかぶり過ぎだよ……」

先輩が私に少しでも好意をよせてくれてたら嬉しい。だけど、それは七海の想像の域を出ないとこの話で、私は苦笑する。

「そんなことないつてつ！ げんに、今日だつて一人で出かけたらデートだよ！ デートに誘うなんて好きだからだよ。先輩はまだ自分の気持ちの変化に気づいていないだけで、妹よりももつと特別

にれいのことを見てると思つよー！」

自信満々に言つた七海が、私と視線があつて首をかしげる。

「れい ？」

その時の私はどんな顔をしてたんだろうか？ 諦めた顔、嬉しい顔、悲しい顔 そのどれもだつたかもしれない。

七海が片眉を上げて、訝しげに私を見据える。

「なに？ なにかあつたの ？」

秀先輩のことよりも、今、私の胸に占拠した気持ちがどんどん大きくなつて苦しかつた。

「七海……私、ね……聞いてほしこ」とがあるの……」

掠れた声を必死に絞り出す。泣きそついで唇をきつく結んでから、顔を上げて七海に話し始めた。

「ブルーベルの従業員の 辰巳さんって分かる？」

「ああ、同じ中学出身の辰巳君のこと？」

「七海、気づいていたの！？ ブルーベルで働いてるのが同級生だつて……」

「ううん、まさか。お店で会つた時はぜんぜん気づいてなかつたよ。だから今こんで話した時に彼から言われてびっくりしたわ。辰巳君とは中一の時同じクラスだつたけど、その時と印象が違すぎるぜんぜん気づかなかつた。すごいイケメンになつたよね」

七海が奏に気づいていたのか確かめたかったんだけど、気づいていなかつたと聞いて私だけじゃなかつたんだとなんだか安心する。

「で、辰巳君がどうかしたの？」

きょとんとした顔で尋ねる七海に、私はどう話を切り出そうかと戸惑う。

私が奏と初めて同じクラスになつたのは高一の時で、その時七海と私はクラスが別だつたから、奏が転校したことも、最悪の記憶の告白相手が奏だとも七海は知らない。

だけど、七海がたつた一度同じクラスになつただけの奏のことを、今の奏とすぐに一致しないにしてもしっかりと覚えていたことに驚く。私なんて告白された時点でだつて奏と同中だつたことも知らなかつたのに

まあ、私は人見知りで人の顔と名前を覚えるが苦手ではあつたけど。

黙り込んでしまつた私に、七海は急かすでもなく辛抱強く待つてくれた。そんな七海の優しさに、私は思い切つてすべてを打ち明けることにした。

高一の時告白してきたのが奏だつたこと、再会し一度目の告白をされたこと

「復讐されたのよ」

私の言葉に、ずっと静かに聞いていた七海の瞳が鋭い光を帯びてギラリと光る。

しばらく黙り込んだ七海は、顔を上げて私をまつすぐに見つめる。

「そうかな　？　辰巳君つてそういうことする人には思えないけど？」

あまりに意外な言葉に、私は数回目を瞬く。

「一度しかクラス一緒になったことないし、そんなに話した記憶ないけど。彼ってさ、真面目で思いやりのある人だつたと思うよ。合コンで会つた時も、すごく感じ良かつたし、悪だくみとかして人を騙すようには見えない……」

「だけど　」

首を傾げて言つ七海の声に被さつて、私は悲痛な声を上げる。

「そうとしか思えないよ。奏には好きな人がいるつて言つてたんだよ？ それなのに私に好きだとか言つてキスするなんておかしい……」

心が張り裂けそうな悲鳴のよつた声で言つた私を、七海が真つ正面から見据えてくる。私はなんだか胸がドキドキとして、背筋がざわざわする。七海はふうーっと大きなため息をついて俯き、上げた顔には複雑な笑みを浮かべていた。

「辰巳君のこと　好きなんでしょう？」

呆れた様な口調で七海が言い、すつと私にハンカチを差し出した。ラベンダー色の四隅に刺繡の施されたハンカチ。見覚えのあるそのハンカチを見つめ、七海を見上げる。

「れい、泣いてる　秀先輩のこと話す時はそんな顔しなかつたね。好きに……なつちゃつたんだね、辰巳君のこと」

七海に言われてはじめて、自分が泣いていることに気づく。差し

出されたハンカチを受け取つて、目元を拭う。私が落ち着くのを待つて、七海が苦笑する。

「ずっと悩んでたのは辰巳君のこと? ブルーベルに行かないって言つたのも辰巳君に会いたくないから?」

私は喋つたら、また涙がこぼれてきそうで、頷くだけで返事をする。

「悩んでるなら、私がいつでも話聞くし相談に乗る。でも、もやもや悩んでるだけじゃ何も解決しないんだよ? 怖くつてもさ、本人にちゃんと聞いてはつきりさせた方がいいよ。何か事情があったのかもよ? ねつ、辰巳君に会いに行きな」

諭すような静かな七海の声に、目元をハンカチで押さえる。その裏側で涙が溢れてくる。私は小さく頷いて、決意を固める。はつきりさせる。

ブルーベルに行くわ

どうしてこう神様はいじわるなんだろうか
やつと決心して奏に会いに来てみれば、奏はバイトを辞めた後で連絡が取れなくなってしまった。

なんで辞めたのか聞いたのだけど卯月さんは理由までは知らないつていうし、奏に会うために声をかけた時は平氣だったけど、男性苦手意識がうずうずと顔を出してそれ以上卯月さんと話すことは出来なくて、そそくさとブルーベルを後にした。

喫茶店で働くのが夢だと言っていた奏がブルーベルを辞めた。なんで？ 思い当る答えは一つ。私への復讐が終わったから姿を消した

再びどりどりとした感情が這い上がってきて、奏への不信感が募る。

奏から直接聞くまでは、奏を信じると決めたのに。

失恋の時に気分転換にゲーセンに連れて行ってくれたこと。真剣に自分の心配をしていてくれたこと。あの時の奏の優しさが嘘だとは思えなくて、奏の口から直接違うって聞けたらいいと思った。だけど。

奏が突然姿を消してしまって、もうなにを信じればいいのか分からなくなってしまった。

七海や合コンで奏と会っている桃花ちゃんと舞ちゃんにも確かめ

たけど、奏とアドレスを交換している人はいなかつた。

学食でみんなでお昼を食べて、お昼時間が過ぎて三限目の講義がある桃花ちゃんと舞ちゃんを見送つて、講義がない私と七海は学食に残つていた。

「未至磨に聞いてみよつか？」

奏がブルーベルを辞めていて連絡が取れなくなつたことを聞いた七海が提案してくれたのだけど、私は首を横に振る。

「ううん、いや

「なんで~、辰巳君を合図に呼ぶくじいなら未至磨は連絡先知つてるとと思ひよ?」

不満そうに眉根を寄せた七海に、私は苦笑する。

奏の連絡先は知りたい。だけど、七海と未至磨君経由で聞くのは、なんだか奏のことを詮索しているみたいで嫌だつた。せめて私が未至磨君に直接聞ければいいのだけど。そう考えて、ある人のことを思い出す。

「ほんとに 聞かなくていいの?」

「うん、ちょっと心当たりがあるから、そこを当たつてみるね」

そう言つて、私は席を立つた。

プルルルル……

規則的な機械音に、どんどん鼓動が速くなつていいく。

人見知りの私だけど、電話も苦手……

顔が見えないんだから、直接話すよりはましでしょって思われがちだけど、顔が見えないと言葉だけから相手の真意を計らなくちゃいけなくて、すじぐどきどきする。

『もしもーし?』

突然聞こえた男性の声に、大きく胸が跳ねる。

『もつしもーし? れいちゃん?』

少年っぽいおどけた口調に、間違いなく電話をかけた相手に繋がつたことを知つて、胸をなでおろす。

「あの……隼人さんですか?」

『そうだけど、なに? 間違えて俺にかけちゃつた? れいちゃんから電話でびびつたんだけど……』

「えつと、間違いじゃないです。隼人さんにちょっとお聞きしたいことがあります」

私は胸元で拳を作り、決意の代わりにぎゅっと力を込める。

「辰巳さんの連絡先を教えてほしいんですが 『

電話をかけた先は隼人さん。初対面でからかわれて印象最悪で、合コンの時もなんだか軽いノリについていけないし、危うく迫られてキスされそうにもなつたりしたけど……去り際のすまなそうにした隼人さんの顔を思い出して、悪い人とは思えなかつた。

もちろん、あの時はビックリしたし、強引さに戸惑つたりしたけど、奏のことを直接聞けるのは隼人さんだけだつたから。

合コンでアドレスを交換したものの、その後一度も連絡を取つてないのに、こんなこと聞くのはどうかとも思つたけど、隼人さんに聞く以外、いい方法が思いつかなくて

『いいよ、奏のアドレス教えても。つてか、あんなに仲良さそうに見えて知らなかつたことにビックリ。でも交換条件ね。俺と一日デートしよう。そしたらアドレス教えてあげるよ』

にやりと不敵な笑みを浮かべた様な口調の隼人さんに　実際は電話越しから表情は分からぬけど、私はその交換条件を飲むことにした。

「いやー、れいちゃんから電話かかつてきた時はほんとビックリ。ほら、合コンの時に俺ちょっと酔つてて悪ふざけが過ぎたつていうか」

壁際には追い込まれ、無理やりキスをしようとしたのを悪ふざけの一言で片づけてしまう隼人さんには苦笑するしかなかつたけど、今日会つて最初に謝つてもらつてるから、路地でのことはなかつたことにしようとしたの。

「いいですよ、もう謝つてもらつたし……」

「でもさ、俺に怒つてブルーベルにしばらく来なかつたんじやない

の？」

映画館に併設の喫茶店、丸テーブルを挟んで向かいに座る隼人さんが上目使いに私の顔を覗きこむ。なんだか子犬が怒られて耳を垂れ下げしょんぼりしているみたいな顔をされて、私が悪いことしてゐみたいな罪悪感が押し寄せる。

「えっと、違いますよ？ ブルーベルに行かなかつたのは

奏を避けてたからだけど

「ずっと風邪気味だつたのと、夏休みの課題が終わらなくて忙しかつたんです」

「そりなんだ？」

その一言でぱっと顔を輝かせて、きらきらと瞳を輝かせる隼人さんを見て、なんだか脱力してしまつ。

「デートなんて言われたから、どんなここに連れて行かれるのかと思えば、普通に……といつても、私にとつてこれが初デートになるのかな？？」 映画見て、喫茶店でお茶して、この後はぶらぶらウインドーショッピングの予定らしい。

人見知りだし男性が苦手な私は、数回話しただけの隼人さんと一緒に過ごして平静でいられるかどうかすっごく不安だったけど、なんのことはない。隼人さんはちょっとちやめつけがあるけど普通に良い人で、今まで男性と一括りにして苦手意識を持っていたことが申し訳なくなる。

「じゃ、行こうか？」

そう言つて席を立つた隼人は、あの時のように自然に手を握つて私の半歩前を歩きだす。

大きな手に包まれた自分の手を見て心臓がドキドキと鼓動を打つけど、こんな時にも考えてしまうのは奏のことだった……

隼人の手は大きくて少し硬くてごつごつしている。だけど奏の手は指が長くて綺麗ですべすべの肌だった。

映画館を出て、駅の反対側にあるショッピングモールに入りぶらぶらと歩く。

時々、隼人が興味の惹かれたお店に私を引っ張つて行つては帽子や眼鏡を試着したり、CDショップで視聴したりした。

このまま普通に楽しい一日が終わるはずだったのに、視界の端に探していた人影を見つけて振り返る。

横顔だけど、間違えるはずがない。通つた鼻筋、長身、それからなによりもさらさらの黒髪をハーフアップに結んでいるのは　奏に違ひなかつた。

奏がいた。こんな近くにいた

そう思つた次の瞬間、私は見つめてしまった。

お店から出てきた綺麗な女性が奏に駆けより、奏が何か話して見たこともないような笑みを女性に向けているのをちくんつと胸に何かが突き刺さる。

ああ……きっとあの人が奏の好きな人なんだろうな……

胸の痛みに　奏を好きだと言う自分の気持ちに気づいた瞬間、私の恋は終わつてしまつた。

ベッドに寄りかかって天井を見上げた私は、携帯の画面に映し出された番号を見つめて大きなため息をつく。

「はあ～～……」

パチンと鈍い音を立てて携帯を閉じると、立ち上がりながら側に置いてある鞄に放り投げて鞄を拾い上げる。スカートの皺を伸ばして、壁付きのハンガーからスーツの上着を外して袖を通して、その上に黒のトレンチコートを羽織る。

季節は秋から冬に移り変わろうとしていて、上着なしでは寒い日が多くなってきた。

今日は天文研究部歓送会。柏駅と豊四季駅の間にある料亭ときわで行われ、送る側の一・二年はスーツなのだ。

七海いわく文化会なのに体育会みたいなノリみたいで疲れるといふけど、天文研究部を作った第一期の部長さんがこういうノリが好きだったみたいで、以後代々受け継がれている伝統だつたりする。

まあ、年に何回もあるわけじゃないし、部活というよりもサークルのくくりになる天文研究部はこういう時でもないと全員が集まることがないから私は好きだけど。

部屋を出て学校に向かって歩き出した私は、コートの上から巻いたストールに顔をうずめる。もつ日が暮れかかっていて、顔にかかる風がひんやりと冷たい。西の空を赤く染める夕陽がセンチメンタルな気持ちにさせる。

結局 隼人さんとの一日デートの終わりに奏の電話番号とメールアドレスを教えてもらったのに、連絡することは出来なかつた。

奏がなんで私にあんな嘘をついたのか。どうして同級生だと黙っていたのか。いろいろと聞きたいことはあつたけど、なんだかすべてがどうでもよくなってしまった

もし奏に何か事情があつたのだとしても、奏が私に好きだと言った言葉は嘘で、その唯一の真実に胸が切なく締め付けられる。

奏にはちゃんと好きな人がいて、その人に愛おしそうに笑いかけて一緒に歩いているのを見てしまつたから。その時の光景を思い出して、視界の端ににじむ涙を誤魔化すように俯き、道路を歩く人とすれ違う。

奏に好きだと言われて心が揺さぶられたのが、奏を好きだからじやなかつたら良かつたのに

自分の気持ちに気づく前だつたら、こんなに傷つかないで済んだのかも知れない。

今更そんなことを考えたつて、好きになつてしまつた気持ちはどうしようもないのに、心が痛いつて叫んでいてどうしようもなかつた。

こんなに心が痛むのは、信頼していた奏に裏切られたからじゃない、奏の言葉が嘘だつたから悲しかつたんだ。かき乱された心が切なく痛んで、溢れてくる涙を必死に堪えて唇とぎゅっと噛みしめる。

後悔してるわけじゃない

例え、好きだと言つた言葉が嘘だつたとしても、失恋した私を連れ出してくれた優しさや頑張つたねつて言つてくれた奏の強さが嘘だとは思えないから。

奏の優しさに慰められたのは事実で、奏のおかげで秀先輩への気持ちに一区切りつけられた。

復讐のために近づいたのだとしても、奏のすべてが嘘だつたとは思えなくて、好きにならなければ良かつたなんて思わない。

復讐されたことに気がつかずに奏のこと好きになつちやうなんて、私、なんてバカなんだろう。

一人、ストールの下の口元に苦笑を浮かべて泣き笑う。

だけど、これがきっと好きって気持ち。自分の意志とは関係なく、気づいたら好きになつていて、その人のことを考へるだけで胸がほかほか温かくなつて、そして切なくしめつけられる

裏切られた悲しみ。失恋の痛み。今はまだ、すべてをなかつたことには出来ないけど、いつか奏と再び出会う時には、笑顔でまた会えたらしいと思う。

長い時間かけてゆつくりと、ちょっとはみ出した気持ちが友達の好きに戻る時にはきっと笑顔で会えると思つから

校門をくぐり、すぐ横にある部室棟に向かう。校内は土曜日で生徒の姿はほとんどなく、静けさに包まれていた。部室棟に着くと、開けはなたれた軽音部が扉から楽器の音が聞こえてくる。冷たい空気を振動する音がどこか寂しげで、胸がくすぐられる。

細長い部室棟を進み、中央の階段を登つて一階にある天文研究部に行く。ドアノブに手をかけて鍵が空いていることに気づいて、首をかしげる。

今日は十八時から歓送会で、今は十六時を過ぎたところ。一年生と手伝いのある一年は十七時に料亭ときわに集合で、この間買出した荷物を取りに来た私以外にこの時間に部室に人がいるなんて思いもしなくて不審に思う。

ゆっくりとドアを引きあけると、入つてすぐ右側の椅子に座つている秀先輩と視線があつて、ドキンと胸が高鳴る。

「えつ……秀先輩……？」

私の小さな驚きの声が聞こえたのか、秀先輩はくすりと笑い、手に持つていた雑誌を閉じる。

「やあ、羽鳥」

ふわりと薫る優しい笑みを浮かべた秀先輩を見つめながら部室に入り、後ろ手で扉を閉める。

「こんにちは。秀先輩……どうして部室に……？」

「ん？ ああ、俺はさつきまでゼミがあつたんだ。教授が来週出張でいなかから土曜なのに講義で学校」

肩をすくめて秀先輩は言い、苦笑いを浮かべる。

「で、歓送会まだ時間があるから部室で暇つぶし」

そう言つて持ち上げた本は、部室に置いてある天体関係の雑誌。去年までは、今の四年生が自費で買つていたものを部室に置いていたのだけど、その先輩が引退した後も雑誌を読みたいと言つ意見が多くて部費で購読することになった。

「そりなんですか、私は荷物を取りに寄つたんです」

奥の棚を指さして、一緒に買出しに言つた時に秀先輩が持つてくれた買い物袋を取り出す。

右手に手提げ鞄と大きな紙袋を一つ、左手に一つ持つて部室を出て行こうとすると、秀先輩に呼び止められてしまう。

「待つて、俺も一緒に行くよ。その荷物は一人では持てないだろ？」「えつ、でも、まだかなり時間ありますよ？」

一人で持つていくつもりだったからきょとんと首を傾げて尋ねた私を、秀先輩はきまり悪そうに見て唇を動かす。首をかきながら

度落とした視線をあげて、その瞳を複雑な光を宿して立ち上がる。

「いいんだ、羽鳥を待っていたから……」

掠れた小さな声だつたけれどやんと聞こえて、秀先輩の言葉に胸が大きく跳ねる。

「秀先輩　？」

戸惑いがちに見上げると、切ない笑みを浮かべた秀先輩が無言で私に近づく。左手に持っていた紙袋一つをさりげない仕草で取り、私の頭越しに部室の扉を押しあけて微笑む。

「行こうか　？」

私は静かに頷き、部室を出る。

待っていた　　そう聞こえたのは間違いじゃなかつたのか確かめたかつたけど、なんだか秀先輩の切ない表情に胸が締め付けられて聞き返すことが出来なかつた。

学校を出て駅まで歩き、電車に乗つて豊四季駅から料亭ときわに向かう。その間、秀先輩とはたわいもない話をして、あつという間についてしまつた。

部室で見た切ない顔が見間違いだつたかのよう、秀先輩は何事もなかつたようにいつものふわりと和やかな笑みを浮かべているし。本当に氣のせいだつたかもと思つたのだけど。

「すみませんっ！　歓送会の主役に荷物運びなどさせてしまつて……

…

料亭ときわの入り口よりも少し外れたところで、持つてもらつて

いた紙袋を受け取った私は恐縮して何度も頭を下げる。

荷物を持つてもらつたことだけでなく、ときわまで来たの中に中は準備中で入れず、時間を潰すために駅に戻つて十八時頃にまた来ると秀先輩に言わされて、迷惑ばかりかけてしまつたことに本当に申し訳なくなる。

「本当にすみません……」

「いいんだよ、俺が運ぶつて言つたんだから羽鳥が謝ることない」

「でも……」

「それより、そろそろ中に入らないと、それ、待ってるんじゃない

そう言つて、体の前に回した両手で持つ紙袋三つを視線で指す。

「あつ……」

私はぱっと顔をあげて、後方にあるときわに視線を向ける。それから秀先輩をまっすぐ見上げ。

「荷物持つて頂いてありがとうございます、じゃあ準備してきます

ね

「ああ

お辞儀をしてから秀先輩に背を向ける。紙袋を左右の手に持ち、ときわの入り口をくぐろうとした時
ぐいっと腕を掴まれて後ろに引っ張られるから、私は驚いて後ろを仰ぎ見る。

息が触れそうな距離に秀先輩の端正な顔があつて、甘やかな眼差しがまっすぐに私をみつめていて、胸がきゅっとなる。

「羽鳥

」

呼びとめられたのは数秒の出来事なのに、永遠のよつよづく感じ
る。

「歓送会の後に話があるんだ

」

濃くなり始めたブルーの窓にほの白に下弦の月が浮かんでいた。

「羽鳥、好きだ」

一瞬、なんと言われたのか頭がついていけなくて呆けてしまったのだけど、私をまっすぐに見つめる秀先輩の瞳があまりにも真剣で、わずかに頬を染めてはにかむ笑顔はいつもの秀先輩よりも子供っぽく感じる。

歓送会の後に話がある そう言って呼び出した秀先輩の用件は、思いもかけないものだった。

歓送会から二次会へと向かう途中、七海には後から二次会に行くと告げて、通りかかった線路沿いの公園に秀先輩と一人で向かう。夜の公園には誰もいなくて、電灯に照らされた遊具がきらめく。遊具の横を通り過ぎ、空き地の横に並ぶベンチの側で立ち止まつた秀先輩が振り向いて、長い影が伸びる。漆黒の夜空に浮かぶ下弦の月は静かな音色を奏でている。長い沈黙の後、秀先輩の唇がゆっくりと動く。

「今さらと思うかもしれないけど、羽鳥が俺のこと好きだつて言ってくれてすごく嬉しかった。妹みたいに思っているから今までの関係を続けたいって言つたのは俺だけど、部も引退して先輩後輩としてのままじゃだんだん会うこともなくなつて そう考えたらそんなのは嫌だった。もっと羽鳥のことを知りたいし、側にいたい。好きだつて気づいたんだ」

まさか好きだと言われるなんて思つてもみなくて、体中に甘い痺
れが広がつて嬉しくて涙が溢れてくる。

「秀先輩……」

滲む視界に大好きな秀先輩が映る。

「羽鳥はもう俺のこと好きじゃないかもしれないけど」

あまり悪そうに田元を細める秀先輩に、私は思い切り首を左右に
振る。

そんなことない。秀先輩のことは今でも好きで、大好きで。だけ
ど

胸におしよせる感情に言葉が上手く出てこなくて、ぎゅっと唇を
かみしめる。

「羽鳥　？」

その時の私はどんな顔をしていたのだろうか。秀先輩は心配そう
に私の顔を覗きこみ、ぽんぽんっと大きな手で頭を一度なでると優
しく切ない笑みを浮かべる。

「俺のこと……まだ好きでいてくれてる?」

静かな問いかけに、私は縦に首を振る。

「俺と……付き合つてくれる?」

少しの間をおいて、小さく横に首を振る。

秀先輩が好き。だけど心を締めるのは奏の存在で

でも奏への気持ちは諦めなければいけないものだと知っているから、まだ恋とも呼べないこの小さな気持ちにちゃんと向き合つだけの時間が必要で。中途半端な気持ちでは、秀先輩と付き合つなんて出来なかつた。

秀先輩は複雑な笑みを浮かべて、首をかしげる。

「俺に……見込みはある？ 先輩とか後輩とか関係なく、これからも一緒に出かけてくれる？」

見込みとかは分からぬけど、純粋に、秀先輩と一緒に出かけたいと思つた。約束していた映画はまだ見ていないし、秀先輩と一緒になら楽しいと思つたから。私は秀先輩に笑いかける。

「はい」

私と秀先輩は以前よりもメールや電話のやり取りが増えて、休み時間が合えば学校で会い、休みの日には一緒にでかけるようになつた。

距離感は先輩後輩の関係とあまり変わつていなかもしれないけれど、サークルで顔を合わせなくなつた代わりのように「一人きりで会う時間が増えて、徐々に一人の関係は変わつていつるのかもしない」。

先輩は私が保留にした答えについて催促するようなことはなくて、その話に触れることもなかつた。

奏のことやいろいろ相談に乗つてもらつた七海には、秀先輩に告白されたことをすべて話した。

買出しに付き合つてもらつたと知つた時の七海はもつと積極的になるべきだつて煽つたけど、今回はそんなふうには言わなかつた。ただ静かに話を聞いて、気遣わしげに私を見つめる。

「れいが決めたことなら、私が口出しすることじやないし。それに今のれいはしつかり前を見てる それならいいと思つ」

つてはにかんだ笑みを浮かべた。

前を向いているのかは自分では分からぬけど、以前のように奏のことどうだうだ悩むこともなくなつて、秀先輩と過ごす時間は穏やかに過ぎていく。

秋風に舞う色づいた葉がカサカサと音を立てて、胸が疼く時もある。結局、奏に何も聞けなくて後悔というか心残りはあつて、だけど。いつか、からず奏に会う時があるような気がして、それが何年後かは分からぬけどその予感に胸が跳ねる。

秀先輩のことは好きだけど、奏のことも気になつて。中途半端な気持ちは嫌だとか思いながら、友達以上恋人未満の関係が一月半続き、季節はすつかり秋から冬へ。街はクリスマスカラーに染まつていた。

「あ～、やつと終わつたあ……」

一限終業のチャイムの音に重なつて、七海が机に伏して脱力する。それを見て横に座つていた桃花ちゃんと舞ちゃんが苦笑する。

「これで明日からは晴れて冬休みかあー」

「今年はついてないね、せつかくの祝日で二連休なのに月曜日の振り替えで講義なんて。祝日が増えてもこれじゃ意味ないよね」

桃花ちゃんに同意して私は頷く。

今日は十一月二十一日、世間は三連休でお休みムードなのに、うちの大学は普通に講義がある。クリスマス前とこいつともあって、今日の講義に不満な人は多いと思つ。

「あ、じゃあ、私は行くね」

慌ただしく教科書を鞄に閉まつて立ち上がったのは舞ちゃんと桃花ちゃん。

「え、今日はお昼食べて行かないの？」

「じめん、これから約束あるんだ。またね」

尋ねた私に早口で答えた舞ちゃんは、扉に向かって歩き出す。その後ろ姿はステップを踏んでいる。

未だに机に突っ伏したままの七海は、顔だけを私に向ける。

「舞は彼氏と一緒に三日で旅行なんだつて。桃ちゃんは実家に帰るみたいよ」

「へえー、そうなんだ。今講義終わつたばかりなのに、みんな多忙だね」

「ほんやつとそんなことを言つて、あいつと顔を吊つ上げた七海に叱責される。

「れいつたら、なにとぼけたこと言つてゐるのよー。当たり前でしょ、明日はクリスマスイブ！ 彼氏持ちはみんな忙しいのよー」

「七海も忙しきの?」

机をばしばし叩きながら力説する七海の迫力に気圧されながらなんとなく聞き返してしまった私は、鋭い視線で一睨みされて顔を強張らせる。

「……っ」

無言の七海の返事にしまったと思い、だけど言つてしまつたことは取り消せなくて冷や汗が額に溢れてくる。

「えつと……」

七海は相変わらずブルーベルに一人で通つてゐるらしいが、卯月さんの反応はいまいち良くないらしい。
何か言わなければと思つて口を開くけど、何を言へばいいのかさっぱり思いつかなくて、結局口を閉じる。

そんな私を、机に伏したままの七海が上目使いに見上げ、真摯な瞳を向ける。

「他人事みたいに言つてるけど、れいはデートじゃないの?」
「えつと、秀先輩とは明日会つ約束はしてるけど、私のデートと
いうか……」

「こによじこによと口もつて答える私を見て、七海は体を起こす。
お昼時間とこづこともあり、講義室の中にはすでに私と七海以外の生徒はいなくなつていた。

「付き合つてなくとも、一人で出かけるならデートだつて、言つた
じやない」

抑揚のない声で言った七海の言葉に、私は胸がひやりとする。

「ちょうど私も先輩も見たい映画があつたからお台場に行く」と云つただけだよ……」

数回瞬いて、困ったように笑つ私に、七海ははつきりと言つて切る。

「クリスマスデートでしょ」

その言葉がずきんと胸に突き刺さる。
秀先輩がなにも言つてこないからつて、ずっとこのままいい訳
がないことは分かっている。

一十四日が近づくにつれて、あいまいな私と秀先輩の関係をはつきりさせなければいけないとひしひしと感じて辛かった。

中途半端は嫌だと思いながら、秀先輩の優しさに甘えて。付き合えないとか思いながら、秀先輩と一人で何度も出かけて期待を持たせて、自分の気持ちに気づかないふりをして

秀先輩と両思いになつて付き合うなんて、ずっと夢みたいことだと思っていた。その夢が目の前にちらついているのに、私は見えない影に焦がれてしまう。会いたいと思つてしまふ気持ちを、どうしようも出来なかつた

第24話 届かない一等星 てのひらの星（後書き）

「ランキングに参加しています。

「小説家になろう」 勝手に「ランキング」 まけっと押して頂けると嬉しいです。

窓から差し込む太陽の光はまぶしくて、部屋の中はきらきらと輝いているように見える。まるでこれから初めてのデートに行くような胸の高鳴りに、知らず頬が綻んでしまう。

鏡の前に立った私は、念入りに服装をチェックする。もつ何日も前から悩みに悩んで今日のコーディネートを決めていたのにも関わらず、今になつてどこかおかしくないかと気になつてしまつ。

白地に小花柄のプリントされた膝丈のワンピース。胸元にはオフホワイトのベルベットリボンがまかれている。持つている服は動きやすいズボンばかりだし、お洒落にもそれほど興味がなくて可愛い服なんてほとんど持つてない私だつたけど、今日のために七海がよく行くお店に連れていつてもらつて服を買ったのだった。

デートじゃないとか言い続けながらも、クリスマスイブにお台場に出かけると思うと、うきうきせずにはいられなかつた。

何度も鏡で確認して、額にかかる髪の毛を直す。

「うん、バツチリ」

鏡の中の自分に笑いかけて、私はニットのロングカーディガンを羽織り、玄関でブーツをはく。

ずっと言えなかつた気持ちを言うと決めた
決意を胸に、私はしつかりと顔を上げて駅に向かつた。

約束の時間よりも少し早くついてしまつて、私は時間を確認した
携帯を鞄の中に戻す。

待つのは好きだけど、待つている間そわそわして落ち着かない。駅で待ち合わせするのは苦手だから、今日は映画館の前にある広場で待ち合わせ。

近くには私以外にも待ち合わせをしている人や、カップルで写真を撮っている人がいて、後ろを振り仰ぐ。そこには本物の木のクリスマスツリーが、天に向かうように伸び、一番上にはオレンジ色の星が壮麗に輝いている。夜になり、飾られた色とりどりのガラス玉がライトアップされるともつと綺麗なんだろうなと想像する。ぴゅーっと吹きこむ冷たい海風が頬をなでていき、体を震わせる。今日はうんと寒くなるって天気予報で言っていたから着こんできたつもりなのに、寒くて震えが止まらない。

見上げた空はどこまでも透きとあるブルースカイ。真上にのぼった太陽があふれんばかりに日差しを振りまいているのに、風が強くて西の方から雲が広がって来る。

うつすらとした雲がたなびいて青空に模様をつける。その様子を眺めているのも楽しくて、目元を和ませて空を仰ぎ、口元に当てる手にはあーっと息を吹きかける。

これからのことを考えたら笑つたりできる余裕はないのに、なんだか胸がふわふわと心地よい。良いことが起きそうな予感がする。その瞬間。

わあーっとため息のような声が響き渡る。

緑の葉を広げる樹木クリスマスツリーを見上げていた私は、そこにはちらちらと白いものが舞うのを見て息を飲む。と同時に、この時期に似つかわしくない大好きな香りを感じて大きく鼓動がうつ。

大きく息を吸い込めば爽やかに広がるラベンダーブルーの薫りに心が締め付けられる。先程感じた予感がどんどん大きくなつて、ばつと振り向くと、そこにいたのは

きりつとした一重、通つた鼻梁、薄く形の良い唇、肩につくぐらいの長さのサラサラの黒髪。間違えるはずがない、奏だった。

最後に会つたのはまだ暑さの残る九月、三ヶ月ぶりに田の前に現

れた奏が一瞬幻ではないかと思つてしまつ。だけど、私を見る奏の瞳が大きく揺れて立ち止まるように動きがゆっくりとなつて、幻なんかじやないんだつて思った。

胸に不安と疑念が一気に押し寄せて引いていき、ただ会えてうれしい気持ちだけが残る。

「奏……」

気持ちのまま名前を呼んだのだけど、立ち止まるようにゆっくりだつた動きがその瞬間、再生されたように動きが速くなり、奏は挨拶も交わさずに私の真横を通り過ぎて行つてしまつた。

えつ

確かに視線があつたはずなのに、無視されて、胸がきゅっと痛む。不覚にも泣きそうになつて誤魔化すように俯いた時、鞄の中の携帯が鳴りだす。

慌てて手の甲で田元を拭つて携帯を取り出して通話ボタンを押す。

「はい、もしもし……」

『あつ、羽鳥？ 『めん、電車が遅れててまだ駅なんだ』

慌ててたから誰からの電話かも確認するのを忘れて、だけど受話器の向こうから聞こえる優しげな秀先輩の声を聞いて、なぜだか涙が溢れてくる。

「秀先輩……」

震える言葉を切つてもう一度田元を拭い、から元気に明るい声を出す。

「そんなんですか。私はもう待ち合わせ場所にいるんですけど、待

つてるのでゆっくり来て下さいね

『ありがとう。だけど外で待っているのは寒いだろ? 今日は特別
冷えるからな』

『そうですね、今日はすこし寒いですね。あつ、さつや雪がぱら
っと降ったんですよ』

『雪のことを思い出して、くすりと笑つ。雪が降つたのは一瞬でも
うやうやしくて、ホワイトクリスマスつて言えるほどじゃないけ
ど、雪が降つたことが心を弾ませる。』

『本当は胸が切なく痛いのに、笑えるような気分にさせてくれた雪
に感謝する。』

『へえ、そりなんだ、俺も見たかったな。今地下鉄のホームだから
無理だけど』

『また降るといいですね』

『ああ。そつちに着くまでもまだ時間かかるから、映画館の中で待つ
てて。いいね?』

『はい』

優しい響きで言つた秀先輩に頷き返して、クリスマスツリーに背
を向けて広場から続く階段を登り始める。

『じゃあ、電車来たから切るね』

『はい』

『またあとで』

ふわりと笑う秀先輩の声が耳にくすぐつたくて、甘い痺れに襲わ
れる。

『はい。待つてますね』

『

電話を切った途端、直前の苦しい気持ちが襲いかかって、携帯を握りぎゅっと唇をかみしめる。

秀先輩と話しただけでこんなに温かい気持ちになるのに、奏の事を思い出して、奏のことだけで体中すべての感覚が囚われる。切なくて苦しくて、こんなに好きな気持ちが溢れてきて、泣きそだつた。

私は涙を堪えて、わざとらしく顔を上げて階段を登る。その瞬間、一の腕を後ろから強い力で引っ張られて、私はバランスを失って階段を踏み外して後ろに倒れかかり、奏の胸に抱きとめられた。

「どこ行くんですか　？」

耳元で低い声がして目を上げると、そこに息が止まりそうなほど綺麗な奏の瞳があつて、大きく胸が跳ねる。

私をまっすぐにみつめる奏の瞳は強い光を帯びていて、冷たく、そしてあまりにも美しくて、吸い寄せられてしまいそうだった。

「えつ……奏……？」

いきなりだつたから、状況がつかめなくて戸惑いがちに奏の名を呼ぶ。

背中に間での男らしい厚い胸を感じて、それが優しく私を受け止めていて、心が揺さぶられる。それから、無視されたばかりだといふことを思い出して、苛立つ感情が湧きおこる。

自分の心を落ち着かせるようにぎゅっと目を瞑つて、それから。

「……つ、奏には関係ないでしょ

感情的にならないように言つてから、腕をつっぱって奏の胸の中

から体を離す。掴まれたままの腕をといて階段を登ろうとしたのだけど、奏の手にぎゅっと力が込められて、痛みに眉間に皺を寄せる。

「秀先輩と会うんですか ？」

なんで奏がそのことを知っているのか驚いたけど、さつき視線があつた時は無視して素通りしたのに、自分の質問を押しとおそうとする強引な奏に腹がたつ。

「さうよ、秀先輩とデートなのっ！」

私はキッと顔を上げて奏を睨み、心を痛めながら叫ぶ。
本当はデートじゃないし、奏に話したいことや聞きたいことがあるのに、苛立つままに言っていた。

すっと掴まれていた二の腕から奏の手が離れる。もう奏に掴まれていらないのにそこにのじる感覚に胸が疼く。それを隠すように反対の手で二の腕を掴んで、俯いて唇をかみしめる。苦しくて切なくて、やるせない。

何も言つてこない奏に焦燥感が募り、後ろめたくて居心地が悪い。沈黙が重苦しくて、早く奏の前から立ち去りたかった。

「急いでるから」

掠れた小さな声で叫ぶと同時に、奏の返事を待たずに階段を登る。だけど。

次の瞬間、後ろから強く奏に抱きしめられて、壁にすりすり。

「れい、好きだ 」

ふわりと肩から回された奏の腕は力強く、優しくて。

三度目になる秦の畠山の言葉が胸に沁みて、心が震えた。

やんだと思つてこた雪がぱらぱらと舞い落ちて、視界を白く濁らせて。

思いもかけない告白に頭の中は真っ白。好きだと言われるのは三度目で、驚きよりも信じられないといつ負の気持ちがまさつてしまつて、詰らずにはいられなかつた。だつて。

「奏には好きな人がいるでしょ？ それなのにどうして私にそんなことを言うの？」

苛立ちの中に切なさをにじませて、声が震えてしまつ。

「だから俺が好きなのはれいなんです」

すっぽりと奏に包まるように抱かれたまま、耳元で甘やかな声でささやかれて、体中に奏の熱を感じて、頭がどうにかなつてしまいそうだった。

私も好き そう言つてすがつてしまいそうになる気持ちを押さえて、ぐつと唇をかみしめる。

だつて、好きだなんて言葉、信じられなくて……

私は振り向いて、とんと奏の胸に頭をついて、胸を押しのける。ふいの私の行動に奏はきょとんとした顔を向け、青空のように澄んだ瞳を私に注ぐ。

「れい……？」

痛々しいくらい静かな声で奏に名前を呼ばれて、ぴくんっと肩を揺らして、頭を左右に振る。

「分からない 奏の言つことが分からないよ。好きだつていうのは高校の時の話？ どうして今更その話をするの？ どうして再会した時に同級生だつて言わなかつたの……それは言えなかつたから？ 私は……男の人が苦手で、だけど奏は違つて初めてできた男友達だつて思つていた、信頼していたのに。奏には好きな人がいるつて言つていたでしょ。あのラベンダー色のハンカチの人、奏がその人と一緒に歩いているのを見たの」

「えつ……」

「高校の時、何も言わないので逃げたから……？」

見つめた先に、奏の動搖に大きく揺れる瞳があつて、胸が締め付けられる。そんな苦しそうな顔をしないでほしかつた。

私は泣き笑い、奏に告げる。

「私は奏が好きだよ……よかつたね、これで復讐が果たせて」

言つと同時に田の前にある奏の胸を力一杯押しのけて、駆けだした。無我夢中で階段を駆け上がり、陸橋を走つて映画館が併設されているショッピングモールに駆けこむ。

奥へと延びる通路を小走りで進み、頬を伝う涙をぬぐつた時、携帯がなつていてことに気づく。

「はい……つ

『羽鳥？ 今どこ？ 僕、映画館の前にいるけど、いる？』

「……つ、すみません、もうすぐ着きます……」

鼻をすすつて、走るスピードを上げる。映画館の入り口が見えて、その前で辺りを見回している秀先輩の姿を見つけて、ぶわっと胸に熱い気持ちが込み上げる。

秀先輩も私に気がついて、ふわりと優しい笑みを浮かべて、片手を上げる。

「羽鳥」

「秀先輩」

すがるような思いで秀先輩の側に駆け寄った時、後ろから強い力で引き寄せられる。

「 つー?」

振り仰ぐと、青のようになじんだ真剣な奏の瞳が目の前にあって、息を飲む。あまりに真剣な瞳に、目を瞬いてみいくつてしまつ。

「羽鳥……？」

戸惑いがちな秀先輩の声にはつとして、奏と秀先輩の顔を見比べる。

奏は私を見ずに、まっすぐ秀先輩を見据えると、瞳の色を濃くする。

「秀先輩……ですか？　すみませんが、彼女に用事があるのでちょっとお借りします」

えつ
？

奏の言葉に反応出来ないで呆然としている秀先輩の前から、私を引っ張つてずんずん歩きだしてしまつ。

「あつ、やだつ。なにするのよつ！　奏、離して。今日は秀先輩と約束してた……」

私の必死の抵抗も聞き入れてもらえず、奏は無言で歩き続ける。だけど、最初は強引に私の一の腕を掴んでいた手が、いつの間にか手のひらを優しく包んで、私の歩調に合わせて歩いていふことに気づいてしまつて、それ以上抵抗することが出来なかつた。

説明もなしに秀先輩を置いて来てしまつたことは気がかりだつたけど、奏がどうして私を追いかけてきたのか、どこに連れて行こうとしているのか、知りたかつた。

いいかげん、すべてのことを、はつきりとさせたかつたの。

ゆつくりと歩く奏に引かれて、私はなんだか無性に切なくなつて、静かに涙を流した。この涙がなんの涙なのか自分でも分からなくて、繫がれていな方の手で目元を拭う。

振り返つた奏と視線が合い、泣いていることに気がついた奏が複雑そうに瞳を揺らし、静かな声で言つた。

「すみませんでした、強引に連れ出してしまつて……ただ、どうして話したいことがあつたから」

強引なのは今回が初めてじゃない

秀先輩に振られて泣いている私を連れ出してくれた時のことと思い出して、その時とかぶつて、皮肉気な笑みを浮かべる。

電車に乗つてゐる間、私と奏は一言も話さないまま、どこに向かつてゐるのかも分からなかつたけど、次第に見慣れた駅に近づいていき、馴染んだ運河駅で電車を降りる。

空はすっかり薄雲で覆われてどんよりとしている。日射しがなくなつただけで、吹きつける風の寒さが一層強く感じる。

わざかに体を震わせると、繫がれていた手にぎゅっと力が込められて、半歩前を歩く奏の大きな背中を振り仰ぐ。

着いたのは奏のアパートで、以前来た時のように戸惑わずに奏に促されて中に入る。

一体、奏の部屋で何を話したいのかは分からなかつたけど、これで気持ちに整理がつくならいいと思つた。

例え、奏の好きな人についての話でも、私の思いが報われないものだつたとしても、奏の口から真実を聞けるのならそれで十分だと思つた。

お台場で奏と会つた時は突然の出来事で頭に血がのぼつて冷静に考えることは出来なかつたけど、奏の口から真実を聞く それが私の望みだつたのだから。

洗われたように澄んでいく心に、奏に気づかれないように微笑をもらす。

もともと 今日は秀先輩に会つた時に自分の正直な気持ちを伝えるつもりだつた。秀先輩とは付き合えない つて。

秀先輩のことは好き、だけど、それと同じくらい 「ひつん、それ以上に奏が胸を占める気持ちが大きくなつて」ことに気づいてしまつたの。

奏がどういうつもりで私に好きだつて言つたのか、他に好きな人がいるのに、何一つ奏のことを分からぬのに、気がついたら強く惹かれていた。

奏のことを考えると苦しくつて切なくて、涙が止まらない。秀先輩といふと心がほかほかして楽しくて、大好きだなつて思える。それなのに、奏のことが好きでどうしようもなかつた。

だから秀先輩とは付き合えない、奏への気持ちに決着をつけるまでは、秀先輩とは先輩と後輩の関係に戻りたいと伝えるつもりだつた。

だつて、奏はブルーベルから姿を消しちゃつて、いつ会えるかもわからなくて、いつ決着をつけられるか分からぬのに、待つと言つた秀先輩の言葉に甘えるわけにはいかなかつたから。

「ソファに座つてください」

そう言つて、お台場からずっと繋いだままだつた手を離した奏が、ソファーに私を座らせる。

奏は奥の部屋に続く三枚の引き違ひ扉を開けて、しばらくしてから戻ってきた。その手にはラベンダー色のハンカチを持って。私は差し出されたハンカチを見つめて目を瞬き、首を傾げて奏を見上げる。

このハンカチの持ち主　奏とデートしていた綺麗な女性のことが好きだと言われるとばかり思つていたら、奏の口から紡がれたのは予想もしていなかつた言葉だった。

第27話 届かない一等星 紺碧の宝箱

田の前に差し出されたのはラベンダー色のハンカチ。奏の部屋に大切に飾られていた、奏の好きな人のハンカチ

「これ、ずっとれいに返そうと思っていたのですが、返せなかつた俺のお守りだつたから」

言いながら、ゆっくりとハンカチに口づけた奏は、甘やかな視線を私に投げかける。

「え？」

私はすつとんきょうな声をあげて、ぽかんと口を開ける。

「私の……ハンカチ……？」

何を言つてゐるのか理解できなくて呆然とする私を、奏は田をすがめて訝しむ。

「氣づいていなかつたんですか……？」

そう言つた奏の声は上ずり、戸惑いと驚きをこじませていた。

「これ、れいのハンカチですよ。中学の時、隣の席になつた時に貸してくれた……本当に覚えて、ない……？」

空色の瞳が大きく見開かれて、それからくしゃりと顔を歪めて奏は手のひらで隠した。

私は手のひらに置かれたラベンダー色のハンカチをまじまじと見つめ、四隅の刺繡を見て、つい最近、七海が貸してくれたハンカチと同じものだと気づく。

あつ……思い出した。

中学の時、ラベンダー色のハンカチを見つけて嬉しくて即買いで一枚買って一枚を七海にプレゼントしておそろいで持っていたお気に入りのハンカチだということ。いつのまにかそのハンカチは失くなつていて、ハンカチを持つていたこともすっかり忘れていた。

「本当にこれ、私の……？」

自分でも忘れていたハンカチを奏が持っていたことが信じられない戸惑いがちに聞き返すと、奏は肩をすくめて私を見下ろす。ダインシングチェアをソファーの側に引き寄せた奏は、長い足をもてあそぶようにして座ると大きなため息をついて、額にかかるさらさらの黒髪を大きくかきあげた。

「本当に気づいていなかつたんですね、それでれいがなんであんなことを言つたのか納得がいきました……」

ため息のような小さな声だったから聞き取れなくて首を傾げたのだけど、奏はふわりと儂げな笑みを浮かべる。

「中学二年の一学期、席替えで俺とれいは隣同士の席になりました。その頃の俺は暗いダサいって女子にうつとうしがられてて、それなのにれいは普通に話しかけてくれた。体育で擦り剥いた肘を手当てしてもらおうと保健室に言つた時、れいがそのハンカチを貸してくれたんです。『これを使って』って。血がついて汚れるからって断

「た俺に、大丈夫だから手当でした方がいいって言ってくれました。たぶん、その時からずっと好きなんです」

奏は静かに目を伏せて、長い睫毛の影をその美しい瞳に落としながら、うつむくままほほえやかに微笑んだ。

「高校入ってすぐに転校すると決まって、転校する前にどうしてもれいに気持ちを伝えたかった。だけどなかなかタイミングが掴めなくて、ぐずぐずして、やっと言えたのは転校の前日で、あの時のことがずっと忘れられなかつた。れいが初めてブルーベルに来た日、一日でれいだと気づいて会えたことが嬉しくて、だけど聞いてしまつたから、れいが男性恐怖症になつた原因が俺だつて……だから話しかけたかつたけど、話しかけられなくて。でもずっと視線はれいを追つてしまつていた」

そこで言葉を切つた奏は、きまり悪そに口元を手で覆つて、じょじょにと言い訳っぽく話す。

「あの時、その、唇が当たつてしまつたのはわざとじゃなくて……すみませんでした」

そう言つて立ち上がつた奏は深く頭を下げる。その態度がすくなくして誠実で心に沁みる。

「会つて最初に言つべきことだったのに、苦い記憶を蒸し返すことになつてれいに嫌な思いをさせたくない、いや、こんなのは詭弁ですね。本当は俺が思い出してほしくなかつただけです。昔のダサイ俺なんて思い出さずに、俺を好きになつて欲しかつた。だから、れいが俺のこと同級生だと気づいていなことをいいこと、ずつと黙つてこつむつもりでした」

「でも、七海には同級生だつて言つたんでしょう……？」

七海に同級生だつて言つたのは、私への復讐が終わつて、もう気づかれてもいいと思つたからだとずっと思つていた。胸に抱えていた疑問を投げかけると、奏は片眉をあげてきらめく眼差しで私を見つめる。

「それは……このハンカチを見られて、れいが俺のことを思い出したと思つたんですよ。まさかハンカチが自分のものだとも気づかないで、あらぬ誤解をされてるとは思つてもみませんでした……」

呆れたように言わられて、その言葉が瘤に障る。

「だつて、失くしたと思つてまさか奏が私のハンカチを持つてるなんて思わないわよ。それに奏はあの時、好きな人のハンカチだつて言つてたから私のだなんて思いもしなくて あつ、そうよ。じゃあ、この前一緒に歩いていた綺麗な女性はだれなの？ あの人が奏の言つてた好きな人じやないの？」

なんだか頭が混乱して、自分で喋つても上手く状況を整理できなくて、痛む額に手を当てる。

「この前 つていつ頃？」

真剣な瞳にぎらりと光を反射させた奏にドキンとして、私は記憶をたどる。

「えつと、十月の初めの頃……」

額に手を当てる考へる奏は、それだけで絵になるほど綺麗で、た

め息が出るほど素敵だった。ぽおーっと見つめしまった私は、ふと視線を上げた奏と目があつてしまつて、ドギマギする私を皮肉気な笑みを浮かべて見た。

「ああ、それは叔母ですよ」

「叔母さん?」

「そう。あ……虎沢オーナー分かりますね? 彼は父の弟、俺の叔父にあたる人で、一緒にいた人はオーナーの奥さん。つまり叔母です」

「そんな……同じ年くらいに見えたのに」

本当に一緒にいた人がとてもじゃないけど叔母さんには見えなくて言つただけなのに、奏は目元を和ませてくすりと笑う。

「ああ見えて三十代です。それ、すみれさんと言つたらすく喜びますよ」

慈しみにあふれた瞳で見られて、居心地が悪い。奏の言葉を疑う理由はなくて、すんなりと真実が心に広がる。

なんだか今なら何でも聞けそうで、もうこの際、聞けることを全部聞いてしまおうと思ったの。

「でも、どうして叔母さんと一緒に? といつが、お店辞めたって聞いたけど……」

眉根を寄せて尋ねると、一瞬、目を見開いた奏は、次の瞬間お腹を抱えて笑いだした。私は、馬鹿にされたように感じて、むつと頬を膨らませる。

涙にぬれた目を横に流して私を見た奏は、まだ笑いながら言つ。

「どこで聞いたんですか、それ。辞めたんじゃなくて、ちゅうとしました休暇ですよ」

「休暇?」

予想もしていなかつた単語に、私はオウム返しする。

「ええ、実は祖父母がイギリスに住んでいまして、久しぶりに顔を見せるようにと電話がかかってきたので、休暇も兼ねて一月半ほど行つてましたよ。叔母と一緒に出かけていたのは、祖父母へのお土産を一緒に買つて」

オーナーと親戚だということにも驚いたけど、祖父母がイギリスに住んでいると聞いてさらに驚く。

「えつ……じゃあ、奏つてハーフとか?」

話がそれでいることのも氣づかずに尋ねてしまつ。

「父方の祖父がイギリス人で、俺はクオーターつてことになりますね。もともと小さい頃はイギリスに住んでいて小学五年からは日本にいたのですが、高校に入つてすぐにまたイギリスに戻ることになつて。仕事の都合だから仕方ないのは分かつてますが、高校を卒業してからは日本の喫茶店で働きたくて叔父の店で雇つてもらつていたんです。父も俺が日本に来てからはまた違う国に仕事で行くことになつて、ちゅうどいこと思つたんでしょ? うね」

苦笑した奏はそこで言葉を切つて、甘やかなにきらめく視線を向けるから、ドキンとしてしまつ。

「一緒にいたのは叔母で、俺が好きなのは……」

第27話 届かない一等星 紺碧の宝箱（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう」 勝手にランキング」 まじかと押して頂くだけです。

「俺が好きなのは 爽やかなフローラルの香りをさせたラベンダー好きの女の子。イギリスに行ってからもずっと忘れられないただ一人の彼女。ハンカチを見るたびに思い出して、あまりに好きすぎて彼女の好きなラベンダーの鉢植えを飾つたりして 誤解は解けましたか？」

ずっと胸にうずまいていた疑惑が晴れていって、私は微笑む。なんだ、復讐じゃなかつたんだ。奏はずつと私のことを好きでいてくれて、それで

そこまで思い至つて、自分でも分かるくらいかあーっと顔が赤くなる。

やだ……奏が好きなのは私だったのに、違う人を好きだと勝手に勘違いして、復讐とか騒いで……恥ずかしい。

赤くなつた頬を両手で隠すよつにはさんで俯く。

勘違いと、それから 奏がどんなに私のことを好きか語った言

葉が、今になつて鮮やかによみがえつてしまつて、さらに顔が赤くなる。きっと頭から湯気が出ていたのではないかといつくらい。

私がおろおろしていると、下げていた視界の中に、しゃがみこんだ奏の端正な顔が入つてきて、一気に鼓動が速くなる。

「分かりましたか？ 俺がどれほどれいのことを好きか 」

甘やかな瞳が一瞬うるんで、奏は頬を少しゆがめて、わざわざくふうに声を落とした。あまりにも魅惑的な瞳で見つめられて、ドキンとする。痛いくらい胸が締め付けられて、どうしていいか分からな

かつた。

私はドギマギとして、口をパクパクと動かす。

なんて答えたらいいのか分からなくて。しかも、お台場で奏に好きだと言つてしまつたことまで思い出して、どうしようもないくらい緊張する。

そんな私を面白がるよつに田を細めた奏は、すつと細い指を私に伸ばし頬に触れる直前

ブルルルルつ！

電話を知らせる着信音が大きく響いて、奏が手をぎこちなく止める。

奏は小さな吐息をもらすと、しきたなやせうな笑みを浮かべて私の鞄に視線を向ける。

「いいですよ、電話に出て下せこ」

私は奏から視線を慌てて鞄に移し、鳴り続ける携帯を探り出し、通話ボタンを押す。

「もしもし……」

出る直前に確認したディスプレイの名前に、いくんと奏を飲みこむ。

『あつ、羽鳥？ いま大丈夫かな……？』

受話器越しに聞こえる戸惑いがちな声に、ちらりと奏を盗み見て、立ち上がる。

「はい、大丈夫です。あの……ちょっと待つて下せこ」

奏が強く私を見据えた涼やかな瞳を、針のよつよつにきらめかせる。怖いほど美しい視線に、携帯を手で塞ぎ服に当てて早口に言ひ。

「ちょっと、外で電話してくるね……」

奏の返事を待たずに、私はその場から逃げだすよつに表に出る。突き刺さる視線が痛くて、そこに秀先輩と電話なんで怖くて出来なかつたのよ。

「すみません、お待たせしました」

私は言いながら、奏のアパートを出で、通りを少し進んだところにある電信柱の側に移動する。

『大丈夫だよ。もしかして……さつきの、彼と一緒に?』

その言葉に、秀先輩を置いて勝手に帰つてきてしまつたことを思い出す。電話だからとか関係なく、慌てて頭を下げて謝る。

「あの、さつきはすみませんでしたっ! 約束をすっぽかしてしまつて、本当にすみません……」

『ん……』

歯切れ悪く答える秀先輩は、くすりと苦々しい笑いをこぼした後。

『驚いたけど大丈夫、羽鳥は悪くないよ。事情はよくわからないけど、羽鳥が俺の返事を保留にしているのは……彼が原因?』

秀先輩の言葉がひどく切なく胸を震わせる。

今日伝えようと思つていたことを、電話で伝える訳にはいかない

と思つて、やめと瞳を開じる。

「はい……、今日、秀先輩にお話しあつと思つていました。やめんと、直接会つて、お話ししなければならないことがあります。もう一度これから会つて頂けますか？」

静かに言つた言葉に、しばしの沈黙を挟んで、優しい声が帰つて来る。

『うん、いいよ。じゃあ、十七時に柏駅で』

「はい、わかりました』

電話を切つた後もしばらくぼーっとその場に立ちつきしていた私の視界に、いきなり奏の端正な顔が入ってきて、驚いて後ろに体を引く。

「電話は……終わりましたか？」

奏が怪訝に眉根を寄せているのに気づいた私は、ドキドキと高鳴る鼓動に気づかれないように視線をそらし、俯いて答へる。

「うん、終わつたよ。それでね、ちよつといの後用事が出来ちゃつたから、帰るね」

「れい？」

「ほり、誤解は解けたし、話したいことつてハンカチのことでしょ？ ちやんと返してもらつたし、もう用事は済んだでしょ」

奏の返事を待たずそのまま帰るうとした私は、奏の腕を伸ばして壁に手をつく動作によつていた壁と奏に囲まれて、身動きが取れ

ない状態になってしまった。

「あの、奏……？」

恐る恐る視線を上げると、そこには奏のあざやかな瞳があつて、私をまっすぐに見つめていた。射止めるような瞳で、情熱的に見ていた。

そんなふうに見つめられて、体の奥から甘い痺れが広がつて、その場に縛いとめられたように動けなくなつてしまつ。

「れい……俺が言つたこと、ちゃんと聞いていましたか？」
「えつ、うん、聞いてたよ……ハンカチ、大切にとつていてくれてありがとうね」

そう言つて、私は甘い視線から逃れるように顔を背ける。
本当は奏がなんのことを聞いているのか分かつたけど、なんと答えたらしいが分からなくて誤魔化してしまう。

奏は話をそらしたことに不服そうに眉根を寄せながらも、それ以上は何か言つたりせずに、私を囲んでいた腕を解き、体を離す。
奏の熱を感じてしまう距離から解放されたことに横で氣づかれないようにほつと安堵の息をついて、私は家に向かつて歩き出した。

奏が復讐じやなく私のことを好きだと言つてくれて、嬉しかつた

だけど、それが今もなのか計りかねて、戸惑つていた。どんどん溢れいく気持ちをもてあまして、奏と向き合つことが出来なかつた。

気持ちに整理がついたといつたら嘘になる。まだ私の心に止められない想いがあつて。だけど、奏の口から眞実を聞けて、復讐じや

なかつたと知れたことだけで満足だつた。

今はとにかく、秀先輩に会うことが先決で、それから自分の気持ちを見つめ直せばいいと思つた。

奏のアパートから少し歩いて自分のアパートへ行き、四階にある部屋へと階段を登り始めた時、ふと、酔いつぶれてしまつた日のことを思い出す。

そう言えば、結局あの日はどうやって帰つたのだろうか。秀先輩に送つてもらつたように思つていたけど、そんなことはあり得なくて、ずっと謎のままだつた。自分で帰つたとしたなら、記憶もなにまエレベーターのないこのアパートの階段を四階まで一人で登られたのだろうかと疑問だつた。

機会があれば秀先輩に聞いてみようと思つ。

簡単に身支度を整えてアパートを出て駅に向かい、電車に乗つて待ち合わせの柏駅に向かう。

一緒に映画を見た後に言つてしまつたことを

第28話 届かない一等星 愛したのかけり（後書き）

「ランキングに参加しています。

「小説家になろう」 勝手に「ランキング」 まじめに押していただけ
けです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2584w/>

君色ブレンド

2011年11月26日20時58分発行